巻頭のことば

大正五年、「宗教研究会」の名のもとに『宗教研究』第一巻第一号が発刊されてから、本号で通巻二〇〇号になります。この間にいろいろの紆余曲折があり、止むを得ない事情による短期間の中断もありましたが、ともかくも五四年にわたって、全国的な学術誌として『宗教研究』が宗教学宗教史学の発展の上にはたしてきた役割は大きなものがあったことは言うまでもありません。ふりかえってみると、わたしどもも駆け出しの頃、つたない論文が本誌に掲載されることを一種の栄誉とも励みともし、学問的にも算えられぬ恩恵をうけ、育てられてきました。『宗教研究』がひろく学界に果してきた功績の蔭には、歴代の編集にあたられた方々の、なみなみならぬ献身的努力と、他方矜持とがあったことに、深く感謝と敬意とを表したいと思います。

一つの雑誌が長くつづいたということは、それなりの歴史的意義があるとも言えますが、ただ長命必ずしも尊いというものではないと考えられます。「二〇〇号」を記念しようというのは、「二〇〇号」そのものに意味があるのではなくて、激動しつつある現代社会に対応し、且つ学問的にリードする宗教学宗教史学の新らたな確立と発展のための決断のステップとして、これを意義あらしめなければならないと、切に念願する次第です。

会長　堀　一郎

『宗教研究』編集の想い出

――『宗教研究』二百号記念座談会――

出席者

原田敏明　小口偉一

古野清人　脇本平也

石津照璽　後藤光一郎

はじめに

脇本　二百号というのは、丁度きりがよいものですから、『宗教研究』の歴史というか、今までの歩みを振り返って、お話し合いをしていただこうという企画です。そのために、これまで中心になって編集をしていただいてきた方々にお集りねがって、思い出のお話しをいろいろ聞かせていただこうと考えました。もっとお集りいただいたほうが望ましい方々もまだたくさんいらっしゃるのですが、いろいろご都合もございますものですから、さしあたってここにお集まりの方々にお願いしたわけです。

ところで、『宗教研究』の始まりというのを私共は、はっきりと存じませんが、宗教学会が始まる以前に宗教学会の前身のようなものが在るようで、それと関連して、『宗教研究』にも宗教学会誌となる前の背景というようなものもあるようです。その辺のことを、丁度後藤君が洗君や飯田さんの協力をえて今までの『宗教研究』全体の論文総目録のようなものを作ろうかと一応カードにとったものですから、合わせていろいろ調べてもらいました。ここであいうことが、ここでこういうことが、という風な展開点や興味ある点を、ある程度整理して拾い出してくれているので、最初に後藤君にその話を簡単にしてしていただいたらと思います。

古野　ああ、簡単じゃなくていいよ（笑声）。

編集史概観

後藤　実はこれを機会に一つ文献総目録をつくりたいと考えました。そもそもそこから問題が発したのですが、『宗教研究』の総目録カードや発行実績について調べてみますと、『宗教研究』の編集にあずかるものとして、これまでよくも『宗教研究』の古いところをざっとすら読まなかったものだ、何も知らなかったものだと本当に恥じいった次第です。今日はこれまでの発行実績についていくつか要点をまとめてまいりました。まとめた順序通りでなくて結構ですが、諸先輩からいろいろとお話をうかがいたいと思います。

まず一つは、編集をなさいました先生方が、いつそれをなさったかということです。話のきっかけといたしまして、今ここに開いております『宗教研究』新第四巻第五号の一番最後に『会告』という小さな欄があります。それを読みますと、「今度編輯員の交代あり、組織変更創刊（註――新第一巻のこと）以来編輯主任とし、鋭意努力されたる原田敏明氏満期辞任し、古野清人氏新たに編輯主任となる」とこう書いてあります。これは年代から申しますと、昭和二年でなかったかと思います。ところでとりあえず、『宗教研究』の戦前の発行実績をこのような表にしてみました（付表参照）。合本にするため、しばしば奥付けが落としてありまして、発行年月など不明な点が多多ありますが、この昭和二年の記事を出発点として前を振り返ったり、年代を下ってまいりたいと思います。

一番最初は東大・京大宗教研究会というものが編集者で、赤松秀景氏が代表者ということになっています。それが新第八巻になりますと、その間どこで代ったのかわかりませんが、（註―第二巻第五号から）姉崎正治の名前にかわります。一方発行所は、第一巻は宗教研究会ですが、第二巻第五号から博文館、つまり本屋に移っています。

新第一巻第一号は奥付けが落ちていましてわからなかったのですが、第二号（註―通巻一八号）から同文館が宗教研究発行所となりました。もちろん研究会代表者として姉崎正治の名前がでていますが、実際に編集を責任もってされたのは矢吹慶輝、原田敏明両先生であると書かれています。これは大正十三年ですが、ここから先程の昭和二年の新第四巻第五号まで行くわけです。その後古野先生にひきついでいただきまして依然同文館から発行されています。それから新第七巻あたりからいろいろの面で変ってまいります。その第五号の編集後記のおわりにT・I、のキャピタルが出てきます。恐らく石津先生じゃないかと思いますが。

石津　第六巻からじゃないですか。

後藤　第六巻は奥付が全然ないんです。だからわからないのですが。

石津　年代を繰ってみりゃわかる。

後藤　第六巻は昭和四年です。

石津　はあ、それじゃあ、正式には七巻からです。（註―第七巻第一号から古野清人にかわって岸本英夫、石津照璽が担当

となる）昭和四年から植木さんのあとに私が入ったんですから。昭和五年に東大宗教学講座二十五周年記念をやって、その辺からしばらく私がやった。岸本は「おれはいやだ」というので。もっとも共同編集の責任者というかたちだったね。

古野　昭和二年頃、矢吹さんの名前もあるけれど、実際の編集責任者は原田さんでしたね。

原田　そののち矢吹先生が東京市の社会局長として行っちゃったから、私が置き去りにされたんです。「あとには宇野君がくるから君はおれ」といって。

脇本　そうしますと、大正十三年頃から。

原田　大正十三年九月ですよ。

脇本　九月ですか。それから原田先生が昭和二年まで。

原田　私が第四巻五号までやったんですよ。

脇本　そうですか。そして昭和二年の後半から古野先生ですね。

古野　ああ、そりゃあ、原田さんがやめられてから、僕がやったんです。僕にやれと言われたから。

脇本　そして、昭和五年から石津先生ですね。

古野　僕は東大図書館におる間やっとったよ。やめて学士院に就職するときに姉崎先生にね、編集にも力を借してもらいたいと言ったら、先生はうんと言って、そして「後は桜井君はどうかね」と言った。桜井さんは困っとった。僕らにはその困っておられる事情がわかるんだ。そこで、だいたい編集者がずうっと年配の上の人にいくのは良くない、と先生に言ったら、「それもそうじゃ」というようなことを先生が言われて、それから一時共同編集にしたんじゃないか、君（石津）と岸本と増谷と。

原田　それは私がやっているときにね、大正十五年にだよ、私があんたがたに共同編集をさせたんだ。私が先輩だったからね。そして新刊紹介は皆で担当していたんだ。

脇本　原田先生は恐かったというようなことを聞いたことがございますよ（笑声）。

古野　そりゃ、そうかもしれない。

原田　新刊紹介は、当時ある程度批評もしたな。

古野　いや、新刊紹介というのが、当時原田さんのイデオロギーに心服したのか、自己の独自の見解からか、とにかくやったんだな。そしていろいろなところから人を集めて、君はどの本をやるとか何とかいうような事でね。

石津　それで、共同編集の時期というものが、古野から私に受けたとき、私は研究室の副手だったわけでね、上の連中増谷、三枝、上野、それに古野は勿論のことだけれど、私とで共同編集をした。ま、その中で編集主任は私ということになっていたのだけれど。その人たちでとくに新刊紹介を分担して、みなそれぞれ一円ずつ払ったと思ったが、ずうっとやって来ていたわけだ。それは、古野から受けた規則だったけれど。だから、校正などにも同文館に出かけてやったわけだね、皆んなでね。岸本は外国に行っていていなかった。

小口　で、今度は、同文館から大東出版社に移ったのはいつ

か、ということになるね。

後藤　それは、昭和八年です。新第十巻からです。

古野　だが、このときは三省堂だったな。

石津　三省堂だけれども、同文館が三省堂に合併されていたからね。

それで、昭和八年に大東出版社に行ったのは、三省堂側でどうにもやって行けないと言うから、それじゃあどうする、と言うので、服部が大東出版社にかけあったのだ。奥田岩雲君なども橋渡しをしてくれたんだね。

後藤　そのあと新第十四巻の三号で不二屋書房に移っております。昭和十二年六月ですが。

小口　そう、そこでいろいろごたついたんですよ。

石津　とにかく新の七、八、九、十、十一、十二巻まで私がやった、と思うな。

後藤　そうです。先生の名前が出ているのは、一応十三巻の一号までです。

石津　そうだ、そこに引き渡しをやったというようなことが書いてあるでしょう。村上君だとか、研究室でやったのだ。

小口　そうです。私が副手になってからやったのですから。昭和十一年の一月ですよ。

こりゃあ、つまり、宗教学研究室が石橋体制になってね、石橋先生がね、「石津が外で編集しているのはよろしくない。研究室で編集するように」と言って副手に編集させた。それで村上俊雄と私が……

脇本　じゃ、それまでは研究室では編集していなかったのですか。

小口　だって、石津さん、自宅で編集していたんですから。

石津　自宅だなんて、あんなこと言って（笑声）。話はこうなんだから。

古野　真実はとにかくはっきりさせとかなくちゃあいけない。

石津　石橋体制というもの、あれが我々に来たんだよね。僕が副手をやめたのは、四年やったのだから、昭和九年の三月だったかな。

小口　つまり、昭和九年に石橋先生が、主任教授になったんですよね。そこでね、石橋先生がまず宣言したのは、ヴィツセンシャフト・ウント・オルドヌンクということなんですよ。ということは、つまり、石橋体制の確立を期したということです。『宗教研究』を東大と京大とで編集していたときには、石橋先生はほとんどタッチしていなかったんですから。そこでは、宇野先生の方が有力メンバーだったわけですね。

後藤　そこのところで、新第一四巻第三号と、それにつづく『宗教学紀要』第四輯が不二屋から出ております。

小口　実は、石橋先生の主任教授就任が昭和九年の四月からで、そのあともう一年間編集をつづけて、そこで新しい石橋体制によって、石津編集主任は首を切られたわけなんですよ。

石津　変なこと言うなよ（笑声）。罷免されたわけじゃない、退職を（笑声）……。石橋先生の意向は姉崎先生や宇野先生か

らきいたよ。

小口　とにかく、研究室でやらなくちゃあいけないというので、村上、小口の二人、その他に東大の印哲と京大ということで編集にあたり、あとで、不二屋というのはフニャと読むんですが、ここに発行を依頼した。ここはクリスチャンの方で、安部磯雄の関係で石橋先生の知人が経営していた印刷屋なんですが、そこへ話を一時的に持っていった。当時、どこも引き受け手がなかった。というのは、石津さんがやめたので、大東出版社ではもうやらないと言ったんですよ。大東が引きうけたときの条件がどんなだったか知らないですがね、大東出版社の岩野真雄氏とだいぶやりあって、そのとき彼がいったのは、『宗教研究』のような権威のある雑誌を引きうけることによって出版社としての地位が確立するというんですね。それで怒っちゃってね、それなら何故やめるのだといって。大東出版では『宗教研究』の購読者のところへ『宗』と『仏』という文字を入れかえただけの『仏教研究』という雑誌を送りつけたんです。

脇本　ああ、あれよく似てますね。

小口　似てるんですよ。そう、組みも全部同じようなんだ。こんないざこざがあって大東出版は手を引いて、不二屋書房で一時やってもらったんです。ですから、あそこから出たのは一冊で、そのほかには『紀要』第四巻です。これは駒沢大学でやった時のものではないですか。

石津　そういうこともあったでしょうし、その頃は大東も困っておった時期だねえ。

後藤　つづく昭和十三年という年は『宗教研究』は一冊も出ていません。

小口　それで、まあ一時消えたわけです。それから、これは石橋先生の功績ですがね、あの先生の友人で紙屋の中井商店から紙を沢山買って、それでそのあと雑誌を出したんですよ。当時、金があまってたかで、だんだん紙が払底してたころに、『宗教研究』だけは紙を残しておいて、これは田沢君と私が一緒のときで、文学部の地下室の倉庫に保存しておいて貰ったわけですよ。で、戦争中に休刊になっちゃったでしょ。戦後ふたをあけたら、紙がなくなっちゃってたんです。誰かが売り飛ばしたんだ。

脇本　ああ、あの問題になった、いろんなことで。そうですか。

石津　先程、小口君は失言されたけれども、『宗教研究』の仕事を研究室の副手があずかるということは会のしきたりとはちがうと思うんだよ。原田さんも研究室の副手じゃなかったし、古野もそうじゃなかった。

小口　いや、それは私が失言したのではなくて、石橋体制がそうだったんだから。

石津　そうだね。『宗教研究』の母体の会の考え方がおかしかったんだね。研究室で合同編集をやったのは、姉崎先生から「どうするか」といわれたので、「われわれでやりましょう」といってやったわけなんだな。その当時から考えていたんだが、編集者は副手と別の人でないとどうもうまくいかない。今でも

私はそう考えているんだけれど、研究室の副手や助手の仕事のなかに当然『宗教研究』の編集が入っているということになると、どうもいろいろ無理になる。今は一応別々になっていると思うからいいけれど。もっともお手当てがどういうようになっているのか知らないが、それも大事だな。こういうことがずうっとまあ良くいっていたんだけれど、今言ったように、研究室の人がやるべきだというようになった。時勢も悪かったんだろうけれども、なんだかそのころから雑誌の勢いが弱くなってきたんじゃないかと思います。

小口　これは、やはり、当時の財政難のためじゃなかったかと思います。大東出版社のときには多少金が出てて、石津さんから我々が引きついだときも、多分編集費は六十円で、みんなで分けていた。ところで、村上氏が文部省に行ったのは、あれは何年だったかな

石津　僕のあとが村上、竹園だったかな。

小口　竹園氏は編集にはタッチしなかったんだ。

石津　そうだ。竹園の方が村上より上か。

小口　いや後です。それで雑誌には関係しなかったんです。

原田　何年頃。

小口　竹園氏は、十年の三月まで副手をやってたわけです。無給副手です。無給副手だったから、帰一協会の仕事をしていたわけですよ。

古野　なるほどねえ。

小口　有給副手は五十一円だかもらってね、無給の方は気の毒だというのでね、帰一協会から出る二十何円かをもらってたわけです。

古野　村上はね、あの高野山からも四十円位もらってね。

脇本　じゃ、もう少し。

後藤　はい。それでは、一応キリをつけますと、結局『宗教研究』は昭和十四年六月になって、岩波書店から、季刊第一年第一号として再び発行されました。これが終戦の少し前、昭和十九年まで続いたわけです。

小口　編集者としての話に戻りますけれどねえ、十一年段階では、東京と京都ということで、京都では長尾雅人が編集員でした。

石津　私のときには、はじめは釘宮武雄とか市川白弦というような人たちがやってたんではなかったか。原田さんのときには誰がやっていた。

原田　甲斐実行。

石津　甲斐実行ね。それから古野のときにも誰かがいたんだろう。京都にはえにしがあって、私のときに、釘宮さんか市川さんから長尾君になったんだよ。

小口　それに東大の印哲が入った。印哲は梶芳光運。

古野　僕らのときにはいなかったんだ、京都に。それとね、その当時は委員がおるわけさ。宇野さんと、あと誰だったかなあ、四人いたんだ。

原田　最初は矢吹さん。京都では羽渓、赤松、こっちでは矢

吹、木村。

後藤　新第一巻の第二号に、『会告』というのが、今残っているのですが、そこに出ています。「東京及京都に、両帝国大学を始め各方面より選定せる常任委員各三名を置いて会務及び編輯を監督し、東京に於いては木村泰賢氏、矢吹慶輝氏、佐野勝也氏之に当り、矢吹氏当番となる。京都に於いては羽溪了諦氏、宇野円空氏、赤松智城氏之に当り、羽溪氏当番となる。編輯主任は原田敏明氏之に当り、京都に於いては甲斐実行氏が編輯事務を分担してゐる。」

原田　こりゃあ、私が書いたんだ。

石津　後藤君ね、その編集後記のあるのが製本にはちぎれていることがあるでしょう。

後藤　そうです。

古野　都立大学のときまでは持つとったんだが、都立やめたら置くところがなくなって、それだから売ったんだ。それにしても今の話をきいておると、製本のときいれておればよかったと残念で仕方がない。

小口　これ二百号記念だけれどねえ、別冊というのが出てるんだ。あれを号数の中へ入れたか入れなかったかだよね。あれは特集号で番号は入っていないからね。

後藤　『宗教学紀要』を勘定に入れれば号数は合います。

原田　別冊は四冊くらいあるでしょう。

石津　もっとあるでしょう。私のときもナンバー外で特集を何回かやったようにおもう。私は持っているが。

後藤　一度、是非見せていただきたいと思います。

石津　この頃ではねえ、変な脇道にそれるといかんが、『宗教研究』の値段が高くなっている。揃いで七十何万とかいう売値があるそうですね。

小口　しかしねえ、実際に見れば、中味がそろってないと思うんですよ、不二屋とか他の……。まあ話が脇道にそれたけれど。

日本宗教学会との関係

後藤　つぎにとりあげたい点は、はじめ宗教研究会の名で編集されていますが、石津先生が担当された昭和五年から宗教研究編集部という名によって編集されております。これは結局宗教学会との関係……

小口　それはね、編集部と宗教学会とは、直接の関係はなかったのですけれどね、休刊になってやりようがないというので、ここで、私がまあ発案したといってもいいかと思うのですがねえ、「日本宗教学会の機関誌にしてはどうでしょうか」ということで、多分昭和十三年だったと思うんですが、日本宗教学会の規約をつくって……

石津　いや、それはねえ、ちょっと違う前史がある。日本宗教学会の機関誌になったのはねえ、昭和五年に日本宗教学会を創設した。その年に宗教学講座二十五周年記念をやって、それを機会としてこしらえたわけですよ。そこから勢いというか、当然日本宗教学会の機関誌ということになったんだとおもう。

小口　いや、そうじゃないですよ。

石津　建て前はそうですよ。

小口　建て前はそうかもしれないけれど、そうじゃないですよ。宗教研究会の方は、購読者の会員の名簿があるから別です。ところが、宗教学会の方は、第五回まではですね、その都度会員を募集していたんです。恒常的な会員はなかったんです。で、そういうんじゃまずいというんで宗教研究会の会員、つまり購読会員の名簿をもとにして、日本宗教学会で、宗教研究会を吸収したような形になったんです。で、その時点で、私の個人的な関係で、岩波書店へ雑誌発行の話をもっていって、岩波茂雄と交渉したんです。ところが、あそこの営業部に堤という支配人がいて、こまかく計算されたわけです。そして結局まあ、岩波書店は発行所とはならずに、発売所になったわけです。しかも創刊号の形でなければという条件を出されて、誌名を『季刊宗教研究』とし、第一年第一輯として発行したんです。これが、日本宗教学会の機関誌となったいきさつです。

石津　なるほどね。手つづき的にはそうかもしれん。だが、建て前としては、今の宗教学会というものができてから、学会の機関誌の扱いをした。学会の記事や報告をのせたとおもう。そういう議論をしたこともあったようにおもうが、奥付けには、姉崎先生の名前で出てたんじゃないの。そうだと僕らは思っていたんだが。

後藤　姉崎先生の名前は、その前から出ています。

石津　宗教研究会として？

後藤　はい。そのときから出ております。

脇本　そもそも、その宗教研究会というのは、いつから始まったんですか。雑誌を出すのと同時なんですか、成立は。

小口　宗教研究会というのは、大正五年です。

脇本　そのときに、東京だけでなく、東北も京都も……

小口　いや東京と京都。

脇本　それがだんだんひろがっていったわけですか。

小口　それからね、時期的には昭和十年頃には、いわゆる帝国大学にまでひろがったんです。私立大学は……

原田　それは、宗教学講座二十五年記念会が生れ、記念講演会をすることになった。そこに先輩を招聘しておったわけですよ。それが宗教学じゃない人がずうっといるんですね。あんた覚えとるかい。岸本君も来とったし、ここも来とった。学士院の姉崎さんのところへ宇野さんがきて、羽渓さんなど四、五人集めて二十五周年の特別講演会をやるという。そのとき、「宗教学でやるというのに宗教学の人が出ない法はないじゃないか、宗教学は誰がやってんですか」といったら、「いや、あんた達がやってるではないか」といった。「それじゃあ、宗教学をやったこともない人に講演してもらう必要はないじゃないか。自分たちでやらなくてどうするか」と言うて、もう決っているのに、私龍谷にいたのですが、ひっくりかえしてしまった。

石津　昭和五年当時は、龍大ですか。

原田　龍大です。その時宗教学が学会やるのに、宗教学の者は一人も出ない。宗教学を専門にやっているのは我々じゃない

かといって、それで皆が出る学会にしたのです。あのとき初めて十五分講演というのができたんです。それ以前には十五分講演というのは、どこにもなかったんです。宗教学の第一回の大会は、本当にそれの初めですね。それからもうどこでも、真似して、今では当り前になってしまった。あれだけは宗教学の人は、忘れんでおいてもらいたい。

小口　矢吹先生がだいぶこの学会を大きくするのにまとめてこられたんです。

原田　そのとき最初、私今覚えているんですが、羽渓さんと帆足理一郎さん、その人たちに講演してもらうことになっていたんです。それから慶応の島原さん、あの人は、キリスト教です。

小口　宗教哲学をやってた人でしょう。

原田　帆足理一郎さんは一応宗教哲学でしょう。それから羽渓さんは仏教でしょう。それじゃあ宗教学の人は誰もおらんじゃないか（笑声）。

石津　その頃あの『宗教学論集』の編集で苦労したな。校正などでも散々。序文はけっきよく私が書かされたものだ。横文字の『コンメモレーション・ボリューム』、西洋人の寄稿論文を集めたやつ、あれもねえ、原稿あつめと校正で骨をおった。おまけに誤植も沢山できたりしてねえ。

原田　あのたくさんの連中が発表する今のような学会、我々がそれを考えたのは、やっぱり外国のあの宗教学宗教史学会、あれが頭の中にあったんだねえ。あれをやろうじゃないか、こっちでもやろうじゃないか、ということでねえ。

古野　あの頃、『ジャーナル・オブ・レリジョン』などがねえ……

原田　で、十五分たったらチン、三分たったらチンとやったんですね。ところがそれを考えだしたかんじんの石橋さんが遠慮なしにやるもんだから（笑声）。石橋さんが一番長くやっちゃったんだ。

小口　ここに記録が書いてありますよ。「石橋智信氏、『天啓』の宗教学的考察、三時五十四分より四時二十九分まで、三十五分間」（大笑声）。

脇本　あとあとこれじゃ困るということですか。

小口　だから第二回の大正大学のとき、非常にくわしく真野さんがやったので、誰が何分間質問したかなどと。……

原田　石橋先生のときは非常に印象的だったね。そのときはね、いきなり上がってすぐペーパーを読むことに決っていた。よけいなことをいわんで、ペーパーをよんで質問をうけて十五分ぴしゃりとやって、すぐ下がるというように。

古野　一昔のことですねえ

石津　一昔どころじゃないよ。

脇本　で、その宗教研究会で、宗教研究編集部というのがあって、『宗教研究』という雑誌を出して、それが購読の会員をもっていたわけなんですね。

小口　そうですね。

脇本　それが、昭和五年に日本宗教学会ができて、建て前と

しては、そこで宗教学会の機関誌としての雑誌ではあったけれど……

小口　むしろ、逆ですね。そのつもりではあったけれど、そうではなかったと。

脇本　実質的には宗教研究会の方の雑誌であったわけですね。それが昭和十四年から『季刊宗教研究』となって、正式に、名実ともに、宗教学会の機関誌となったわけですね。

小口　これは、日本宗教学会の会則の変更を見ればわかるんです。

原田　『新』の前の『何年』といっていたときにはねえ、東大と京都大学だけだった。京都大学といってもねえ、あの京都大学じゃ赤松さんの宗教社会学は受け入れられなかったんですよ。赤松さんは京都大学に入れない。だから結局京都にいながら、龍谷大学にいたわけですよ。だからほとんど東大と龍谷大学とでやってたことになるんだね。

脇本　赤松先生というのは、赤松智城先生のことですか。

小口　そうですよ。京城帝大にいらっしゃる前に。

原田　だから京都といっても京都大学とは関係なかったんですよ。宇野さんがこちらの大学を出て、むこうの大学院に入ったんだね。そこで赤松さんといっしょに世話をしたのですから。京都大学に関係があるというのは波多野さんを通してなのですよ。

小口　それに羽溪先生……

原田　羽溪先生はそのとき京都大学で、松本文三郎先生の下で助教授をしておられたが、やはり龍大関係の方であった。そこで『宗教研究』も京都では宇野、赤松、羽溪の三人が中心となっていた。

古野　我々の話だけではなくて、表紙の裏に何か書いてあるだろう。それを見てもらった方が確実じゃ、どっかにないかね。惜しいことをした。

小口　製本の時、表紙をつけてくれ、といって注文しないと、普通はとっちゃいますからねえ。

脇本　戦後の分は、だいたい表紙と裏表紙をつけて製本してあるんですよ。

小口　宗教学会の機関誌になる前はねえ、いろんな記録、例えば火曜会とかいう研究会の記事までのってたんですよ。宗教学会の機関誌になってからは、編集後記までとっちゃおうという考えも出て、そういう点では会報というような形で非常に無味乾燥なものになってくるわけだな。

石津　僕らが編集委員になっておった時期には機関誌という考え方だから、学会のことや何かを記録にとってたんですよ。だから、学会彙報というようなものが出ていたんですよ。

編集の仕事

後藤　原稿料が出たということは、なにほどか市販していたからですか。

石津　それはねえ、おそらくさっきの話に出てきた不二屋というところに行く前は、今とちがって会員のもの以外は市販と

いう形式をとっていたから。

原田　最初は、名前はたて書きだったのが、店に出すために、題を横書きにしたんですよ。当時は、機関誌としては、横書きは少なかったんですよ。あれ何度かかえたんですよ。私が同文館に書かせて何度もはりかえて。

脇本　市販して何部ぐらい出たんです。

原田　何部ぐらいでたんだろうねえ。古野さんに渡すとき以前にもう出てませんから。新第二巻ぐらいまでかな。

脇本　それじゃ岩波に匹敵する原稿料を出したというのは、本屋の方でですか。

原田　匹敵はしないけれど、岩波に次ぐ原稿料でしたね。その当時は、学術雑誌で原稿料を出すなんてことはまずなかったですよ。

古野　そうそう、よくぞ金があったもんだな。

原田　ということは、編集主任が非常に力があったんですよ。それで私がこの仕事を渡すときにね、古野さんは「忙しいのは厭だ」というので、「忙しくないからやれ」と言ったのです。

脇本　『宗教研究』に原稿を書いてくれといわれればみんな喜んで書いたわけですね。

原田　そう、大学の先生は皆喜んで書いてくれたね。だから古野に「心配せんでもいいからやれ」と言ったんだ（笑声）。

古野　全く、その通りなんだ。たまにはね、とにかく我々の先輩で、わざわざ尋ねて来て書かせてくれという人もいたよ。

原田　今のようにあちこちにスペースがなかったからね。

石津　それはね。三木清なんていう人が持ってきたね、原稿を。名前をあげんが、えらい人がちょいちょい原稿をもって来られた。そのかわり、おれのをなぜ出さぬかなどと苦情やこごともあったな。何かこう権威があったのかもしれんな。

原田　自分に番がまわるということは、非常に光栄なことだったんだね。だから『宗教研究』の編集というのは強かったんですよ。

古野　そりゃあ、他にないもんねえ。それで木村さんの推薦で、林屋友次郎という人が来たんだけれどねえ、ぱあっとたくさん書いて来るんだ。で、「毎号のせえ」、と言うんだね。僕は木村さんに文句を言ったんだ。「先生の推薦ですが本の三分の一位とりますよ」といったら、「まあやってくれえ」、と言った。

小口　実業家でしょう、あの人。

古野　この人が自分でさ、研究室を作ってね……。原田さんの木村さんへの攻略法はうまいんだ。どういう風にたのむか、バトンを受け継ぐということで、練習に行ったんだ。そうしたら木村さんが忙しくてとか何とか言ったらね、だんだん原田さん怒ってしまったような顔をしてさ、「だいたい先生が書かなくって一体誰が書きますか」と言ったらぐっと参っちゃて、「うん、それじゃ」、とか言ってね。それから後で僕の肩を叩いて、「ああいう風にやれ」とか言ってさ（大笑声）。原田先生は中中策士の気味がありますよ。

後藤　ところで、『新刊紹介』欄は、いちばん最初『批評紹

介』という形で第一号から出てまいります。このころは、記名入りでかなり詳しく長文の紹介を掲載しています。それが、『新刊紹介及批評』、『新刊批評』などと欄の名称の変せんを経て、新第三巻あたりで『新刊紹介』という名称におちつくと同時に、紹介される和洋書件数がにわかに増え、文も短くなり、記名がなくなります。やがて新第五巻になってから再び紹介者の名前が記されるようになります。それでも記名のないものやキャピタルだけのものもあります。いずれにせよ怠まんな私共は非常に驚いたんですが、とにかく二ケ月間に何十冊という多数の本を分担して目を通しておられる。一人が数冊ないし十冊近い本をこなしておられる。一体どういう風になさったのか、その秘伝でもおきかせいただければ、と思います。

原田　そりゃ、私がやっている最後の時分に石津さんや古野さんあたりと組んだときですね。

小口　石津さんのときに特に多かったんじゃあないかな、新刊紹介は。

石津　それがねえ、今の話の『新刊批評』というのは、二段組ではあったけれども、大きな活字で枚数は十五枚とか十枚とか五枚とかだったです。が『新刊紹介』というのは、六号で組んでたんです。四百字以内か何かその辺でしたよ。これが一項目一円というやつなんです。それで、注文した本だけでなく研究室に本屋から見はからいなどで沢山くるでしょう、そいつを皆さんにもっていってもらって書いてもらうという工合にしてたんですよ。それからねえ、非常に困ったときには、外国の雑誌などに出ているレビューから、レビューのレビューをしたことも実際にはあったんです。ですけど、あの頃はずい分前の頃だけれど、みなさんが研究室に出入りしていたので、そういう本を持っていって、なんとかしてくれたんだね。

原田　そうそうたる者がそろっていたからね。三枝君もいたし……

石津　常連は五人ぐらいいたと思うが。

脇本　当時は本をこなす人たちが多かったんですね。

石津　そうです。その通りです。研究室にはいつもゴロゴロしている仲間があったんですね。

脇本　助手、副手とか仕事をもった人もあるけれど、その他にいたんですね。

原田　副手は、むしろ万年副手の植木さんがいるでしょう。だから他の者はなれんですよ。

脇本　旧制大学というのは、大学院に籍を置いている人も多かったんですか。

石津　大学院ていうのは、あってないようなもんだったからなあ。

原田　当時大学院に行くというのは、本当に暇な人とか……

石津　よその大学を出たのが来るんだな。

後藤　新刊紹介の記名に、姓と名とが入っている場合にはわかるのですが、姓の方だけしか入っていないのもありまして、わからない人がこれだけいるんです。頭文字もわからないのがあります。

原田　長沢というと長沢信寿だろうな。京都から送ってきた。山田というのは山田龍城氏だろう。

後藤　それから、木下という人がでてくるんですが。

石津　木下というのは丸川のことだ。

後藤　それから釘宮という人がいます。

石津　ああ、その釘宮さんというのが京都の編集委員です。

脇本　これは仏教関係ですね。

原田　支那仏教だったな。書いたものがあったな。

脇本　圭室（たまむろ）さんというのは……

石津　それは、あの頃史料編纂所にいた圭室さんのことではないかな。

小口　村田は村田格山だな。後に覚山といったかな。

後藤　高田っていう方は。

口口に　修でしょう。

後藤　合坂さんていう人もたびたび出てきます。

石津　さっき外国雑誌のレビューから新刊紹介の文を書いたこともあると言ったでしょう。そういうときは匿名をつかったということも考えられるんでね。書いたものをみれば誰かすぐわかるんだが、

小口　木村俊太っていうのは、村上俊雄と八木亀太郎がいっしょにやったんですよ。八木亀太郎が読んでね。それで村上俊雄が作文してね。フランス語の本やイスラム関係だとか、彼はペルシャ語の専門だからね。そこで二人の名前をくつっけて木村俊太とかなんとかしたんだ。

編集と関係した諸問題

小口　それから、村上、小口の編集のときに、大島長三郎氏の『四姓制度に関する一考察』という新第十三巻三号の論文にまつわる事件があったが、とくに目だつ事件としては、これは『宗教研究』のどこかに私がちょっと書いておいたけれども、山川智応さんの論文が掲載禁止になったことなんです。当時はもう検閲が始まった頃ですね。それで編集責任者は出頭しろ、と警視庁からきたので、姉崎先生は病気だということにして私が代りに出頭して、一札いれて、その時はもう会員には雑誌を送っちゃった後だったけれどもねえ、一応後に残っているものだけ破り取ったんです。『日蓮聖人の国神観』（注―季刊第二年第四輯）ですよ。

古野　あれは、智応さんが姉崎先生に頼んで入れたのかね。君が……

小口　これは直接頼んだんですよ、編集部として。それで、それはね、山川さんの論文が悪いんじゃなくて日蓮の御書のね、『種々御振舞御書』というのがあるでしょう。その言葉を引用したこと自体がいけない。

古野　それは何年頃かね。

小口　昭和十五、六年頃だったとおもう。その次の号で学会の代表者に迷惑をかけちゃあいけないということで、実際にやっている者ということで、代表者名を私の名前にしたんです。私の名前のあとは田沢君になったんです。

後藤　そういう関係では『宗教学紀要』にも、ドイツのナチスが政権をとった一九三三年頃つまり昭和八年頃、ナチス批判をやった論文がのっているかと思うと、同じ本に蓑田胸喜の論文ものっているという具合です。双方の立場を知ることができて、非常におもしろく読みました。

小口　それは、つまり研究発表だから両方の立場がのっているということ。それは、今の状態と同じで、靖国神社問題が両方あるのと同じですね（笑声）。

後藤　研究発表といっても何か自己宣伝みたいなもので。

原田　そうですね。明治天皇の御製をね、ざあっと一番からおしまいまでやったこともある。

石津　原田さんが編集の頃じゃないかとおもうが、鈴木宗忠と小野清一郎とそれから佐野勝也の三先生がえらいごたごたしていたことがあったが。宗教経験のアプリオリか何とかのことについて。

脇本　ああ、ちょっといつか見たのは、小野先生と誰かと文化科学論でやっていたのがありましたね。

石津　それだろう。はじめは鈴木先生と佐野先生だったんで、何か価値論のことをやってたんではないですか、『宗教研究』誌上で。

脇本　丁度リッケルトのあれが出た頃のらしいですね。

石津　『宗教研究』に関係ないが、Das Heilige の問題ね、哲学雑誌でね。石橋、宇野両先生の間のことだよ。

脇本　何かそういう『宗教研究』に出た論文がいろいろと論争をまきおこしたというようなもの、あるいは論文そのものが学界全体で非常に大きな問題をおこし、評価を受けているというような例はまだその他にあったのでしょうか。『宗教研究』はかなり権威をもっていた雑誌だったわけですから。今でも持っているはずですけれど（笑声）。

小口　『宗教研究』での論争というのは、あまりないですね。さっきの Das Heilige の問題は哲学雑誌の方ですからね。

石津　まあ、『宗教研究』に出て、それこそ一世を風靡したなんていうのはないようだなあ。論争というので私が覚えているのは、さっきの原田さんのときのでスケールが小さいなあ。

小口　雑誌の上ではなかったけれども、宗教学会の研究発表でいろいろ質問が出てやったのには、二、三ありますね。

西谷啓治氏の『宗教と科学』かなんかは、姉崎先生がだいぶつっこんで質問しましたしね。岸本英夫氏の発表に対して、鈴木宗忠がねえ。

口口に　そうそう。

小口　鈴木宗忠先生がもうあれは多少感情的になってたね。

編集方法

後藤　話がかわりますが、『宗教研究』は、最初の方は出た順序に製本して、それに通巻頁数が打ってありますが、ある時期（註―新第五巻）から『新刊紹介』欄だけ別に通しの頁数をつけるようになります。それからしばらくして、いずれも石津先生のときですが、さらにこみ入った編集方法になります。本

論文、雑纂、その次の書評・展望などを含む部分、さらに新刊紹介と、それぞれ別別に通巻頁数をつけ、六冊を合本にするさい、まず論文だけをまず六冊分集め、次に雑纂を六冊分まとめて追加するという大変厄介な……

石津　厄介、それは、厄介かもしれませんが、僕になってから、新刊紹介は別として、二段組とその本欄というのは頁が始めから分かれていたんではないかな。違うかね。

古野　いや。そうだね、二段組でやったねえ。というのは、Original Article を段抜きで、紹介、解説みたいなのを二段組みにしたね。

石津　それはそうだけれど、頁数は。

後藤　新刊紹介だけが別の頁数になったのは、昭和三年、新第五号からです。

石津　古野からだ。私は五年からだから第七巻からだろう。

後藤　ええ、新第六巻あたりは新刊紹介以外これまで通りですが、新第七巻になりますと先程申しましたように全部が新刊紹介同様になりまして……

石津　そりやあ覚えておりません。何故そういうことをしたか。

後藤　それが三巻か四巻続きまして、結局また元に戻っていますが、

石津　新刊紹介はかなりたくさんにはなったんだ。十三、四頁ぐらいになっただろう。全体で一冊が二百頁を越えることもあったでしょう。

後藤　それがあとで合本として、あらためてもう一度市販されているようなんです。値段が六円六十銭です。もともと一冊一円、三冊三円、六冊一年分が五円八十銭です。と申しますのは合本の奥付が別にあり発行年月が合本された最終号の発行年月とずれているのがあるからです。

石津　それは、あるいは大東出版があとで売るためにということでそうしたのかなあ。知りませんがねえ。

後藤　それからもう一つ、調べていて興味をひかれた問題は、五冊ある『宗教学紀要』――そのうち三冊は小口先生からお借りしましたが――それぞれ巻末に報告がのっていて、そこに学会の部会構成がでていることです。それと併わせて発表者のレジュメの分類方法ですが、第一輯はアルファベット順で並んでおります。第二輯によりますと、大会は「宗教一般」と「成立宗教」の二部会からなっていますが、『日本の宗教学』という表題で出版されたそのときの紀要の中は、「宗教学一般及び方法論」、「宗教学特殊問題」、「未開民族及び古代の宗教史」、「キリスト教」、「仏教関係」（これは更に仏教学一般、初期仏教、後期仏教に細分される）、「日本宗教史」の六つに分類されています。第三輯も大会と紀要の分類が別ですが、第四輯は丁度私共が今やっているように部会通りに編集している、といった具合です。

小口　それはねえ、その第二回というのが、大正大学で、その次が立正大学ですねえ。で特に立正大学でやったときは浜田本悠さんの個人的な編集方針で、細分したわけです。宗教社会

学とか何とか出てくるでしょう。で中味はそうでもないのがあるというので、そういうのはまずいんじゃないかという話が出たことがあるんですよ。そのいう意味で『紀要』は当番校の方針で編集をだいたいやっていたもんです。で今のようになったのは、実際に、はじめて会則が出来てきた昭和十三年の段階からです。十三年の、これを見ると、十二月に会則が出来ているんですね。この編集後記は私が書いたんですから。展望という欄は、石津さんのときにつくったんだな。

石津　そうです。

小口　これはねえ、展望欄に書かせてもらうのはありがたいんで、あの棚瀬襄爾だの、私のかけ出しの頃……

石津　展望というのは、問題をやるやつでしょう?

小口　日本における宗教社会学とか何とか。

石津　そう。これは非常に評判のよかったものです。

小口　編集者がよかったということでしょう。

原田　いろいろ変ってるんだな。

古野　やっぱり小口君が通じゃろう。君が一番長いし。

石津　新しいところだねえ。

古野　我々は前のことはもう忘れておる。

原田　表紙の文字は一時かわったですね、最初のとおりではないでしょう。

小口　あのね、岩波のときにちょっと太くなりました。あっ、こりゃあ表紙がついてないんだな。

脇本　現在は、あの昔のような字に帰すというので、その太字のと違って、少しかえました。

小口　追悼号のような形もここで終ったんです、矢吹先生のこれで。あとは姉崎先生のにしても非常に簡単でした。もとは、木村泰賢先生のときのなど非常に立派な追悼号でした。

石津　そりゃあ、僕がやったんだ。あの時のことは覚えている。

小口　矢吹先生のには写真を入れたんですけれどね。それから後は、石橋先生、宇野先生のときは弔辞だけでしたね。これからはだんだんこれも出来なくなりますね。

原田　『宗教研究』は学術誌として古いのです。第二巻が出たすぐあとに社会学、倫理学が出たんですよ。

脇本　そうですか。他の学会の雑誌やなんかに比べると、これは早いのですね。

原田　『国語と国文』がこれと前後して出されましたね。

石津　哲学系統の『哲学雑誌』があって『丁酉倫理』というのがあって、その辺からこっちはあったからね、だから哲学系統の人でもこれに書くことをまあ光栄と考えてくれたわけですよ。……

苦心談やら余談やら

古野　だが、我々は苦労したもんだよ、編集には。原稿が出来たからもらいに来いというんで、行ったところが七十何枚かだよ。「先生こりゃあ少し長すぎますがね」とこう言うと、「枚数は、いわれなかったが」と言うんだね。「はい」というて貰

うてくる。今度はまた池田澄達さんに頼んだらこれはまた短いんだよ、「先生これは一頁位にしかなりませんが」といったら、「外国には半頁のもありますよ」（大笑声）。

石津　『宗教研究』というのはね、僕らのやっている頃には印哲との関係がね、非常におとなしかったけども、何となく反撥や抵抗というようなものがあった。それからその後に、僕がやめてからだが、そちらで印度学研究をやろうというので、仏教研究とかが独立したんだ。また後になって今の印度学仏教学会が出来たのだ。その頃の印哲の学界には、始めには何にもなかったんだろうけれど、やはり学会のようなものの希望があったのだろう。姉崎先生が健在の頃、木村先生など、「どうも姉崎先生にかかっちゃあかなわない」などと僕に言っておられたけれども、だんだんその独立ということになり、研究室がわかれわかれになって、それが雑誌にも反映しておった時期があったと思う。

原田　どうして印哲・梵文・宗教学会といっていたのか。

石津　ああ、そうでしたなあ。

脇本　その印哲・梵文・宗教学会というのはどういうものですか。

小口　それはねえ、一種の懇親会的なものですよ。それでね、昭和十年頃まで続いたんですよ。例えば予餞会などというものをいっしょにやったしさ。

古野　印哲も梵文も宗教も四合舎という建物にいっしょにおったんだもん、震災後。

石津　この編集とは関係なしに、宗教学会とも関係なしにつづいた。

脇本　その印哲・梵文・宗教学会というのは、だから雑誌は出してなかったんですね。雑誌を出しているのは、宗教学会。それで、印哲・梵文・仏教関係の人も『宗教研究』に書いていたわけですね。発表の場所として。

石津　それでねえ、今ここにいるのは宗教学の人だけれども、僕のときにはねえ、稲葉君が少し関係してでね。正式には梶芳光運君がいたんだ。その前に中田源次郎という副手の人もいた。

原田　印哲の寺崎もいた。

後藤　このあとの進め方ですがどういう抱負をもって、どういう経験をされたか、また論文の内容に反映したそれぞれの時代、そんなことでもお話し下されば……

脇本　それじゃあ、まず原田先生から。

石津　古野先生など、相当、原田先生から発破をかけられたというか、やられた方だろう。「諸君書きたまえ」とか何とか言ってさあ。編集権の確立というのもおかしいけれど、若手がそれをもっておったのは特色だったと思う。

原田　私のときは結局ね、インターカレッジの組織作りの時代だった。全然別です。東大なんてのは雑誌とは関係なかった。組織時代だ、それで骨を折った。だから編集をみてもすぐ分る。論文をね、どう扱うかでね。やっぱり皆トップにのっけたいんですね。しかし、トップというのは一つしかないんです

からね。それで困ったんです。私がやっとった時代にはね、一番初めに偉い人を、そして最後のところにその次の人を。それから真中に、そして我々有象無象はその中に入るわけですね。世間的に言ってですね。トップに姉崎先生が出れば、最後には波多野さんが出るとか。一番最後に常盤さんが出るとか。そしたら常盤さんから文句が出たですよ。「なぜ俺のはケツにのせるのか」、これには参った。「だけど先生みて下さい、ケツじゃありませんよ、よくみて下さい、最後の押さえですよ。」「うんそうか」というわけで……。一番ケツには重要な人をのせたものです。

石津　それは我々にまで言い伝わっていたですね。我々もそれをうけついだ。

原田　それはあとまで、多少その気持はあったでしょう。それはやっぱり呉越同舟ですからね。その感じが随分強かったですよ、その当時は。編集者は自分勝手なことをするといって、宇井さんあたりが東北にいるとね、何か「俺をつんぼさじきにおく」といってね。そんなことはないというけどね、きかんのですよ。鈴木さんでもね。羽渓さんという人は、非常に人のいい人でしたから、これはそんなことなかった。波多野さんは難しかった。厳密な人だったから。波多野さんという人はエネルギッシュな人だったな。

古野　宇井さんなんて、羅漢さんみたいな容貌しながら、こんなに細かいことという人かと思って驚いたな、あの手紙見て。

原田　ああ、私はさんざんやられたですよ。

古野　ひがみ深いんだな。

原田　いや、それが皆私にではなく、木村さんですよ、相手はね。それは編集の責任者が木村さんと宇野さんでしょ、東京では。そこをこちらは尻をぬぐわにゃならん。石橋さんがおられるときには、やっぱり石橋さんところに行きよったですよ。

脇本　そういう、うるさい先生方を相手に『宗教研究』の編集をやるのに、その場合編集権というものは、ぴしっと分れているんですか。

石津　姉崎先生などはそう、こちらに委せてべつに何してこなかったね。先生自身のさえ扱っておけば、それでいいんだからね、あの先生は。だから、うるさいのは却って宗門大学のえらい先生などにあったな。

小口　それからね、鈴木宗忠先生がうるさかったのは、昭和十三年から以降ですよ。たとえば、東京の例会というものをやろうと、つまり隔年の発表のほかにね、例会を年に何回かやろうと云ったら、鈴木先生大反対なんですよ。「それは、在京の者には有利かもしれないが地方にいる会員は損だ、同じ会費を払っているんだから」というんですね。それで結局できなかった。

脇本　それまでは、学会は隔年だったわけですね。

小口　隔年しかなかったわけですよ。

脇本　すると紀要も隔年だったわけですね。

小口　そういうことですよ。

原田　いまは沙婆も広くなったから研究室におったって、そ

んな窮屈さはないんでしょ。昔は大変窮屈だったですよ。学者ってのは、ケツの穴の小さいものだなあって、よく思ったものですよ。京都の方から突っつかれるかと思ったら、東北の方から、つっつかれる（笑）。

脇本　しかし、それだけ当時の『宗教研究』というのは、そういう、あっちやこっちの大物がどんどん寄稿してくれた……

原田　関心持つとったと言やあそうですね。今は、そんなことしなくても、皆、自分の研究機関誌を持ってますがね。

古野　だから、その頃の『宗教研究』のようなのは発表の場としては、ちょっと他になかったというわけだな、他に雑誌はない。それから、単行本も余程せにゃあ出版しない。

脇本　それじゃあ、原稿集めのための苦労というようなものは……

原田　『宗教研究』にはなかった。

脇本　むしろ、断るほう……

原田　ああ、断るのが容易じゃなかった。用心しとらんと、えらい人が来たら困るからといって。

古野　僕はあの松村さんの所へ緊急避難しとった。原稿はいよいよ集まってこん、雑誌はもう出さにゃならんというときは、先生の所へ行って頭を下げる。「明日何時までか」、というから、時間をいうときちっとくれるからね。

脇本　ああ、原稿ぐせのいい人と悪い人といろいろある……

石津　あの先生は頼みにくいけど、たいていは引きうけてくれた。きちんとしてて、その日にはぴしゃっと出来てたよ。何かあの、この辺におきゅうしてたね、きゅうの談義はよくきいた。弱い弱いといってたけど。高田（保馬）さんだったか天文の松隈さんだったか、高等学校のときあんなのが秀才だなとおもったといっておられた。

古野　それは、姉崎先生がよくほめられるんだよ。まとめる原稿はきちっとしてまとまっていると、というんだよ。あんまり言うから、先生がいつかキリシタンの研究した資料やなんかを外人に見せてるとき、「先生はいつもああ言われるけれど、大体、論文なんてものは、そんなにきちんとまとまるものですかね」といったら、「うんうんそれもそうじゃ」といってね（笑）。宇野さんに対して先生はどことなく、からこうたような所があるんだな。けれども、よその人に対しては、非常に感激しとったですね。

石津　すこしへだったところの人に感心しとったな。

古野　そういう所がある。松村さんは英文出身だった。先生は外（もと）の人には感心して……

小口　うちの者の価値は（笑）。

石津　あらが見えるんだろうな（笑）。

小口　子供に見えるんだよ、いつまでたっても。

古野　ことに宇野さんあたりはね、書生というような関係で、幼稚に見えるんだ。あれだけとりもった宇野さんが、姉崎先生からはあまり理解されなかったな。

石津　いや、それに矢吹先生がね、まるでこう番頭みたいな調子だったな。講義に来ててね、帰りに図書館長室に寄るんだ

な。「今日は御用はございませんか」というような調子でやるんだよ。アメリカに行ったときとか、そういうようなころからの癖がついてるんだろうな。

古野　あれはね、姉崎先生には頭があがらない。あの頃の権威主義たるやものすごいものだもの。先生の靴みがきやる男もいるんだよ。

石津　それから、何かまゆをやけどしておられたが、ハーバードかどっかで、お伴にくっついて行かれたんだね、その時ランプのそうじをしていると、油に火がついてとか矢吹さんからきいたな。ところがね、ずっと後のことだけど、姉崎先生がロンドンかオックスフォードかにおられたとき、矢吹先生なくなられたんだね。姉崎先生が帰ってきてからいわれたんだけど、姉崎先生に会いに矢吹さんが来たっていうんだよ。矢吹君が「先生来ましたよ」って来たっていうんだよ。不思議だと思ったらなくなったという電報が来たっていっておられたがね。そりゃいろんな人達がよくいうけれどね、丁度矢吹さんがなくなられたときに、その時刻に先生のところにあらわれたっていうんだね。

古野　だけどその矢吹さんの態度も、年もそう違わないのだがまるで臣下の態度だったね。

しかし『三階教の研究』のことで我々もしっかといわれたものだ。それは岩波の先代が涙こぼしていったっとった。姉崎先生があの十五円の本をな、五冊買うておった。自分は『出家とその弟子』が読者に評判がよかったのは嬉しいけれど、姉崎先生があんな高いものを五冊も買うている、その弟子を買うたげにゃいかんというて、岩波は矢吹さんと友達やから、感激の涙。先代というのは信州人にして、もうものすごい感激家よ。この小口君もそうかも知らんけどね。(笑)。

小口　いや、感激する人なんですよ、そうなんですよ。

脇本　だいぶ面白い話になったのですけれど、『宗教研究』から大部離れてしまった(笑)。もうあまり時間もありませんので、『宗教研究』をやってらっしゃった頃の苦心談というか、一番印象に残っていることを一言ずつお話し頂いてはどうですか。まず、原田先生から。

原田　姉崎先生のは大体非常に長かったですね。

古野　ぼくのときなんてね、先生がなにか批評を書くからというんでね、貰いに行くと普通の原稿用紙じゃない。なにかの裏へ書いたようなのくれよったよ。

小口　いや、その裏へ書くの、困るんだけど僕らも癖になっちゃってるんだ。まねしたんだな。

原田　あの頃は紙っていうのは大切だったからな。

小口　あの先生のは、ますへ一つずつ入れないんだよ。そうじゃなくてね、白い紙へ書いても、ちゃんと字数が合うんだよ。

古野　ところで、姉崎先生は人の英語を直すことが好きだった。英語だけじゃない、人の文句を直すことが。田中館愛橘先生というのは英文で人のことを書くのが好きなんだ。その英語はブロークンだがとおる。それで『帝国学士院紀要』の英文の

プロシーディングに追悼文を書いた。それに赤字がついている。それを発行するヘラルド芸文社の秋本という専務の所へ持って行くと、「君、これは君が訂正したのか」という。私は結局しょうがなしにね、「実は姉崎先生のところからまわって来た」といったら、うん、といって、ぱあーっともとどおりにして、「なあ君、英語というものは姉崎が作ったのではないだろう」(笑)。

これも本当だよ。花山信勝の『法華義疏の研究』について高楠さんが書いたやつを、姉崎先生はあれでも訂正するんだからね。そこにいくと高楠さんは、やっぱり人物よ。しゃあしゃあとしてるんだから。

脇本　高楠先生の書いたのを、姉崎先生が直すんですか。

古野　ああ、主査でね、先輩よ、高楠さんは。

小口　あのね、帝国学士院のプロシーディングス、でなくて、日本語の紀要があるでしょ、姉崎先生があれの幹事で編集長だった。それで実際の編集は、岸本さんだった。ところが岸本さんが東大の助教授になることになって、それが編集者では具合が悪いというんで、私が手伝った。それであの『帝国学士院紀要』の発刊の辞は、私が書いたんですよ。岸本さんはあのとき痔だったか盲腸だったかで入院しちゃってね、できなくてね。それで姉崎家でその発刊の辞を作ったんだよ。あれは昭和十九年か、十八年。

そのときに、会員で亡くなった人の追悼文みたいなもの、その当時一番関係の深かった桑木厳翼先生が書いたものを今度は姉崎先生が直すんだよ。そうすると今度は、それを桑木先生がまた直すんですね、直しっこしてるんだ。この位の一枚の紙でね、僕が机のひき出しに入れておいた。その編集の手伝いをしたのは、高木きよ子さんだから、彼女持ってると思うんだけれどね。あれ、残ってると面白いんですがね。

とにかくね、姉崎先生という人は、文章を人が書いたものでもどんどん直す。だから、あの口調覚えちゃうとね、姉崎調というので書けるようになっちゃいますよ。また『宗教研究』から話がそれたけれども。どうしても姉崎中心になっちゃう。

石津　そうだね。昔の先生のことならいくらもあるが……。あれだね、『宗教研究』のことだと僕のばあい昭和五年の第七巻から十二巻までかな、その時期になるんですがね。やはり、苦心というのは、さっきも話がでていたように、原稿の数をあつめる苦心というものじゃなくて、執筆者の配列とかだね。欲しいものの数としてはありあまるほどあった。だけど、狙うのが一寸難しいのと、もう一つ印哲への配慮というのが、この頃からだんだん出て来たな。

脇本　研究室でやるようになってですね。

石津　そういうことですね。それからもう一つは金だった。その後になると紙の方の苦心をした筈だ、小口先生あたりはね。だけど、私のときは紙なんてものは問題なかったけれど、金の問題があったね。同文館から大東に行っても。ことに大東のときはね。それから、まあ、編集権というほどのことはないけれど、それはさっきも話は出たが、姉崎先生は何もいわなか

ったね。従ってまた、その他の先生も一言もいわなかった。そういう意味では力は持っていたわけだろうね。一人じゃないですよ、何人かの合同編集スタッフがね。そしてよその分野の人たちも、とくに会員外にも書かせてたから、今みたいじゃない。ところがそれが喜こんで書いてくれるんだな、利用する人は。

脇本　編集のスタッフのなかには、印哲の方の人も入ってたわけですか。

石津　入ってはいたけれどね、実際にはそりゃ、つまりスタッフといったって、印哲とか京都とかは、原稿収集人であって、編集会議等には殆んど来やしなかった。ですから、結果はこうしましたということすら、姉崎先生の所へ言いに行ったことがなかったですね。ただ、原田さん達のときから、ずうっとあることだったんでしょうが、断るのがいやなことだったですね。たびたびあったですね。

脇本　どうやって断るときは断わったのですか。

石津　まあ、あからさまにいって。掲載を伸ばしておくとですね、向うから返してくれ、なんてのがくるんですな。だから、のびて申しわけないからと、いったこともある。それから人を介して断わって貰ったね、よく。

脇本　ここのところを手を入れて、もう少し書き直してというようなことはなかったんですか。

石津　いや、ある。たびたびある。たいてい折りあいがつくんだが、石橋先生には叱られた。「僕がいうんですよ」、なんていわれちゃった。旧約の権威である先生が言うんじゃというんだ、それをお前が何ごとだという訳じゃ。あのときはねえ、題がおかしいからとか短かすぎるから初めのところに何か書いてほしいといってもっていったんです。たいていはそういえばねえ、「やってみよう」とか、「それは君達のいいようにしてくれたまえ」なんていってこられるわけなんだ。ところが先生はだめだった。

古野　君は苦労したんだ。

原田　そういう苦労は僕にはない。あるとき梵文の飜訳を持ち込まれた。それをボツにしたところ、京都のえらい先生のだったので、島地大等さんがけしからんというて、「君はああいうえらい人のやつを、ボツにしたそうじゃないか」、「ボツにしませんよ、最初の約束と違うじゃないですか、飜訳はのせないということにしてあるんですよ、原稿料払うんですよ、そんなものに原稿料払えますか」(笑)……

脇本　なるほどね。

原田　原稿料はらわないで掲載料でも出すというんならそれでいいですけれど、こんなもので原稿料払えますかといって。そのあと先生は和睦々々といって私の手を握ったんですよ。

小口　でもあれ、年六回の発行ね、相当辛かったでしょう。

石津　ああ、月刊と同じようなものだなあ、あれは。殆んどほっとした暇はなかったですね。

小口　初めは相当辛かったですね。クォータリーになって大分楽になった。それに原田さんの頃はね、原稿がいくらでも頼

まなくても集まったっていうんだけれど、僕らのときになるともうそうはいかなくて、大体十人集めるのに、三十人位依頼状出したですね。そうじゃないと、年四回はなかなかだった。一回は特集号、大会のあるときはその紀要ね。それから僕らのときの苦心というのは検閲が始まったことですよ。それで、戦後にかかるわけで、GHQとか。

古野　検閲か。

小口　検閲は、例の発禁問題もあるけれど、戦中、戦後の検閲の時期に編集やったわけですからね。

脇本　あれはちゃんとその、検閲用に提出するわけですね。

小口　そうです。

脇本　それは、できあがってから提出するわけですか。校正刷の段階で……

古野　いや、本になってから。

脇本　なってからですね。それでだめなら……

古野　僕がやっぱり、『社会学』というあの本をやっとってね、第五号をやられたんだ……

小口　あれは、今のNHKの所に行っとったかなあ、前の建物、あのへんだったよ。

石津　NHKの一寸有楽町よりの所に文部省の出店みたいな所あったねえ。

古野　行って、係の者に会ったんだな、そして、どういう所が悪いんだといったら、……

小口　それは戦争中のあれだね……

古野　だあーっとこう赤字がしてあるんだ、このうち一ケ所をもってしても発禁に価する。田辺寿利さんと、一緒にじゃなかったが、一号ずつかわるがわるやりよったんだよ。そして今度のが発禁になったらもうだめじゃから頼むよといって、そしたら分ってるよなんていって（笑）。それを君、無茶苦茶しよる。共産党の鈴木市蔵の論文を一番最初にもってきとるんだから。それはそれでいいが新刊紹介じゃ、早稲田の洞富雄というのがおった。あれの中も赤字してあった。これはどうしてだといったらね、天皇がだな、妃持っておるということはいいんだ、ところが天皇なるが故にもっておるということになるともう発禁にする。規準があるんだよ。わるいことに森山書店がそのまま発行してしまって全部押えられて、それでもう、つぶれちゃった。

脇本　『宗教研究』には発禁というのは……

小口　ひっかかったのは、さっきいった山川さんだけです。それからまあ、苦労したというのは、今でも関係があるけれど、いわゆる神仏基のバランスですけどね。

原田　前はね、神は問題にならん。基もあんまり問題にならん、そりゃあ仏が多すぎるんだ。

一同　仏が多いねえ（笑）。

脇本　今でも編集委員会を開くと、仏教のは圧倒的に多いですね。これを押さえるというよりほかのが出て来なくてはいけないんですが、それがなかなか出ないんですねえ。論文の内容自体の問題もあるんですが……。

編集と報酬

小口　ところで石津さんのときには編集費として六十円もらっていたでしょう。

石津　いや、そんなには。二十円だったかな。

小口　六十円をみんなで割り振ったのかな。

古野　あのときの委員は宇野さんで、僕にやれと言われたとき、実際には原田さんから言われたんだが、宇野さんに会って返事をするさい岸本と一緒に「額はいかようでも労力に対する報酬としてもらいたい」とはっきり言ったんだ。そうじゃないと、責任持てないもんな。勇敢じゃったなあと思うておるんです。原田さんの知恵だから（笑声）。

原田　当時、私たちは一冊につき五十円だった。それで、姉崎先生が「君は困りゃせんか」、と言われたんだ。

石津　ただその頃は原稿料はくれたな。

古野　我々の新刊紹介の時は一円だったかな。とにかく無料でやりよったわけじゃないんだから。金は宇野さんからね、もろうて。だから金は宇野さんが握っとる。

小口　その一円というのは、ずい分長い間続いたんだな。昭和十年頃もそうだったから。

石津　遮二無二とってきたんだな。ないところから。そうしてね、何巻か見ればわかるけれども、その原稿料があってやっとるのがやめになるというんで姉崎先生から我々に諮問があった訳だねえ。「なくてもやるか」、というので「なくてもやります」とこういうことになっちゃって、そのときに十四、五円かなんかもらった。それでその帰りに、わらび粉かなんかをおみやげにもって帰った訳なんだがね、みんなあわせて十五円か何かでねえ。「どうしょうか、遊びに行こう」というようなことでねえ。古野と増谷と私と、岸本はいなかった。三枝はいたんだけれど、三枝だけいかなくて、我々三人が熱海の天城屋かどっかへ行って豪遊したことがあるよな。

古野　豪遊とはいえないよ（笑声）。

脇本　それがお金の出る最後というんですね。

石津　その後も、結果的には本屋からもうしばらく出た訳です。そのあといつだったか私がやっている間にシステムが変っていった時期があったね。

脇本　おいくつ位ですか。

石津　三十年前……

古野　しかし、今後編集者には、やはりさっきいったように、正当なる報酬を払うべきだね、編集権を確立して、口を出さずに。こいつは今後の学会のルールにすべきだな。

原田　今は報酬はどうなってます。

脇本　何もしてないです。

古野　それはやっぱりやらなきゃ。研究室のね、助手の仕事とは違うんだ。

脇本　研究室で始めたのは。

石津　僕のあとから。私、研究室におったでしょう。おったときにひき受けたわけですよ。それは昭和五、六、七、八年だ

から九年の三月だね、それからというものは…、というよりそれよりも前にね、ごじゃごじゃになった。さっきの話の続きなんですけど、編集者というものはね、別筋のものだという主旨をずっと持ち続けていた。今でも私のいいたいことの一つなんですけど、助手が即ち編集をするというのはね、どうも……やっぱりだれかに一任した仕事じゃないとね、流れるおそれがある。それで私のときには研究室でやったといっても副手だからやったということでもなかったんでしたよ。たまたま編集してるのが副手になったというか、そしてその編集者に、今云った仲間がいた。それでやったわけですね。姉崎先生から受けとったときはそういうつもりだった。それがのちに石橋先生のときから、研究室のものだという気持が出た。それに対して、よそからは反撥があったわけですよ。京都からね、そのほか……。

原田　それで、今の経済じゃやれないですか。

脇本　今の学会の経済状態じゃ、一寸出せないですね。

小口　それでね、戦後は仕方がないので編集委員の人を維持会員にして、会費免除として。どうなってる今、それやってない。

脇本　今はやってないですね。

小口　一時それやったんですがね。

脇本　いや、そのおかげでね、維持会員になっちゃってそれっきり維持会員（笑）……。

小口　それやるといいんだよ。

脇本　維持会員のまま、今度は免除取消しという（笑）……。

古野　その報酬というものは当然労働に対して支払わるべきだ。

石津　そりゃ、気持の上でそうだな。そりゃ確かにそうだ。今は賛助会員制度というのはやはりあるのか。

脇本　はいあります。

石津　どの位になるのかな。

脇本　件数にして三十位ですか。でも賛助会費というのは必ずしも全部集まってないですね。半数か……。

小口先生の頃は……ああ田沢さんになるわけですか、戦後の紙の心配とかなんとかは。

小口　田沢君と僕のときですね。

脇本　終戦まで岩波は発売所としてやってくれたわけですね。

小口　発売所としてはやってくれたけれど、謝金は出ないわけですね。

脇本　で印刷とかなんとか、それは一応岩波でやってくれるわけですね。

小口　いや、岩波は印刷所を紹介してるだけですからね。我々は出張校正してやったわけですよ。割合にいい印刷所でしたよ。

古野　で、岩波は何もくれんの。

小口　ああ、何もくれない。ただ店頭におくとか、店売りはしてたわけですね。

脇本　では、戦争中はまあまあ、何とかいってたわけです

ね。こっちから印刷してくれる所を探して走りまわるというようなことはなかった。

小口　ええ、それはなかった。

脇本　それは終戦直後のことですね。

小口　それはだから、大東出版社が断って、不二屋書房のとき一時あった位。他に引き受ける所がなくて……

原田　今の出版はどうなってます。

脇本　今はあの、本屋じゃなくて、印刷屋ですね。

原田　直接経営ですね、こちらの。

脇本　ええ、そうです。

今後の『宗教研究』

原田　今の『宗教研究』はあんまり幅が広く、バラエティが多すぎるですね。幅が広すぎても、それだけ会員が多ければ良いけれど、会員が実質的に七百じゃそう多いともいえんですね。

古野　仏教学者は両方に発表するんだろ。

脇本　印哲の連中のは印仏学会で発表したものだけしかいれないんですよ、あの『印度学仏教学研究』というのは。しかし学会で発表したものというのは、精々十枚とか二十枚とか位ですね。で、まとまった論文は『宗教研究』にと、こういうやり方で両方使いわけるわけです。

原田　宗教学出身とか宗教学プロパーでなくても、仏教にしたところがもう少し宗教学的なアプローチをするとかしなければ。

古野　何かの形でね、大学の構造に食いこんでいくようなやり方やらんとね、若い人が出てきたって宗教学は非常に不利だよ。今後のこと考えるとそれはやっぱり必要ですね。

原田　だから少し制限したらどうですか。宗教学プロパーでなくとも、宗教学的なものに限るとか、あるいは減ることになるかも知れないが……。減ってもねえ、こちらでやってるのは宗教学だと、ここらあたりで出せば。ここの学会みたいに何でもかんでも載せるから、学会そのものに自主性がないですがな。神学はもう抜いて出すんですよ。仏教学はそれ自身でやれば良いし、キリスト教も同様ですね。題目をみたって分らない、何をいってるのか。そういうのはもうぬかしたっていいんじゃないですか。その点もう少し考えたらいいじゃないですか。その代り危険はあるんですよ。

小口　会員が減るっていうことね。

原田　そうじゃないですね。ある限度がありますよ。私はちゃんとやっていけると思うんですよ。それは確かに狭いんです。その代りもっと固定してきます。今の『宗教研究』は一冊とって見ても何もみるところがない。これじゃ困るですね。何かの因縁があるから入っているけれど。もう少し、宗教学に集約してこんと。少なくとも大部分そうであっていい。でないとね、教理の難しいこととか神学の難しいこととか、それでつぶされていることがあるね。

古野　それはやっぱり、今後集約していくということは必要

でしょう。

原田　昔は、文学部全体が一冊の雑誌で良かったですものね。それが文学、史学、哲学と分れたんだ。史学でも、日本史は日本史でやってますよね。経済史も経済の方だけでやってる。それの方が立っていく。それだけ学問が進むんじゃないですか。宗教学はそこの所が未だ確立していないんじゃないですか。史学なんていう雑誌では今なり立ちませんよ。日本史とか、日本史もね、この頃は上代史とかね、近世史とか、地方史とかね、そうなってますよ。地方史なんて、何千て会員がいる。最初はがり版でやっていたからね、一号、二号は。急速に伸びてしまって。あれは地方史だから、あれでやれる。

古野　時代の雑誌の傾向と、研究室の傾向と逆行している感じはあるな。

石津　これも、さっき出てた話だけど、印哲がさ、たった二冊しか出さないんだからね。印度学仏教学会がさ、紀要ばっかり。だからまかなえないから、こっちへきちゃうわけだよな。あれがちゃんと独立したものなら、いやでも応でも、かなりすっきりするでしょう。

原田　それにはね、一つには宗教学大会をもう少し整理せにゃいかん。それとやっぱり歩調をそろえて……。あんなのでは宗教学大会じゃないんですもの。

古野　困難な事情もあるだろうけれどさ……

原田　宗教の研究さえすれば、宗教学になっちゃうんだよ。

古野　編集のスタッフがもう若がえっているんだから、これから大いに君、思い切ってやったらいいじゃないか。

原田　もうここらでやっていいんですよ。

古野　うん、そういう時代じゃ。

脇本　編集権は大いにふるう（笑）……

小口　だって、みんな三十代の時にやってたことだものね。

原田　そしたら会費が少し高くてもしようがないです。それの方がまだいい。今のようなことじゃ、宗教学会が一番つまらんですよ（笑）。

古野　まあしかし、ほかの分野の学者も少しは遠慮するところがあるんじゃろうからな。

原田　そりゃ、できるだけのことをやりゃあいいんですよ。

古野　集約してやればシンパサイザーがまたできるんで……

原田　もう宗教学で大分やってる人がいるから、もう少しは宗教学的なものにしてしまった方が。学会でも宗教学概論を聞いた者でなければ、やる資格がないとかなんとか、やったらどうですか（笑）。

脇本　入会資格に（笑）……

小口　講習会やりますか、え、宗教学会主催の……

石津　なるほどね、それも一つの方法だ。こっちも大いにやることだな。

原田　今は宗教学の概論なんて、見たことも聞いたこともない人が大部分でしょ。

脇本　いやあ『宗教学概論』という題で、仏教概論か何かやっている大学がある。

原田　宗教学じゃ、あてにならんというのですね。

脇本　いや、あてにならんというより『宗教学概論』という形の構義はかなりあるんですね、大学に。

小口　ある。あるけれど中身は違う。

脇本　その場合、実際にできる人がいなくて自分はまあ宗教をやってると、まあ仏教をやってるから、仏教をやっときゃそれでいいだろうというような。

原田　そりゃ、仏教でもいいんですよ、宗教学的なやり方をすりゃあ。それでなくちゃ宗教学のありようがないんですからね。

脇本　そりゃあ、全く宗教学とは違うものらしいですねえ。

古野　四十年の何じゃからなあ。

原田　四十年で一つ、若返ったら。

石津　二〇〇号というのは四十年になる？

小口　五十年近いね。

後藤　大正五年ですから。

小口　だから五十年になる。

原田　大正五年なら、五十年すぎてる。

古野　五十三年じゃからもう。

脇本　宗教学会に、もちろん仏教が入ってもいいんですけどね、仏教学者の仏教学みたいなのが入ってきたのは、むしろ戦後じゃないでしょうか。

石津　まあ、そうかも知れないですね。

脇本　戦前は、仏教関係やる人は、一応宗教学の雑誌だとう、そういう頭で書いてくれた。ところがこの頃はそうじゃなくなっちゃった。

原田　宗教学会がそうなっちゃってるんじゃないですか。

脇本　ええ、宗教学会がそうなってる。

それではどうやら時間のようですので終りたいと思います。本当にどうも面白いお話しを長いこと有難うございました。

行　実　績　表

雑纂	批評紹介			学会彙報など	価額	備考
	頁数	洋書件数	和書件数			
12	2	4	1	2	75銭	「宗教研究」は宗教研究会の会誌として発足。 総頁数欄のカッコ内は目次，口絵など。 会費年2円50銭
9	7	9	4	4	〃	
43	5	5	4	4	〃	
27	4	5	5	3	〃	
17	3	2	—	4	〃	
11	4	3	—	2	〃	
7	—	—	—	4	〃	
32	3	3	1	3	〃	
57	—	—	—	1		
—	—	—	—	5		
—	—	—	—	1		
	新刊紹介及批評					
—	5	—	2	6	85銭	
—	—	—	—	—		
—	7	7	1	2		
	新刊紹介					
—	5	2	2	32		
28	13	4	4	5		
						関東大震災による中断

付　　表

宗　教　研　究　刊

号	編輯者 代表者	発行所	発行年月	総頁数	本欄論文
第1巻第1号	東大・京大宗教研究会 赤松秀景	宗教研究会	大正5年4月 (再)　11月	228 (+3)	212
〃　第2号	宗教研究会	〃	〃　7月	208 (+2)	188
〃　第3号	〃	〃	〃　11月	188 (+2)	136
〃　第4巻	宗教研究会 赤松秀景	〃	6年4月	228 (+2)	194
第2巻第5号	宗教研究会 姉崎正治	博文館	〃　9月	192 (+3)	168
第2年第6号	〃	〃	〃　11月	200 (+2)	183
〃　第7号	〃	〃	7年3月	210 (+2)	199
〃　第8号	〃	〃	〃　8月	190 (+2)	152
第3年第9号	〃	〃	〃　12月	164 (+2)	106
〃　第10号	〃	〃		176 (+3)	171
〃　第11号	〃	〃		134 (+2)	133
〃　第12号	〃	〃	9年8月	118 (+2)	107
第4年第13号	〃	〃	〃　12月	124 (+2)	124
〃　第14号	〃	〃		122 (+2)	113
〃　第15号	〃	〃		148 (+2)	111
〃　第16号	〃	〃	11年10月	112 (+2)	66

書評		新刊批評			学会彙報など	価額	備考
頁数	洋書件数	頁数	洋書件数	和書件数			
10	1	21	6	1	1		
		新刊紹介並批評					東京及び京都にそれぞれ3名の常任委員をおき，会務，編輯を監督し，編輯主任は原田敏明氏，京都では甲斐実行氏が編輯事務分担 一冊1円，三冊（半年分）3円 六冊（1年分）5円80銭 新第1巻合本2円20銭
—	—	14	3	—	20	1円	
—	—	18	3	1	1	〃	
—	—	23	5	2	—	〃	
—	—	11	2	1	—	〃	
—	—	12	2	1	—	〃	
—	—	26	4	1	—	〃	
—	—	12	1	3	—	〃	新第2巻合本6円60銭
—	—	7	1	1	—	〃	
—	—	14	3	—	—	〃	
—	—	17	2	2	—	〃	
40	4	新刊紹介			1	〃	新刊紹介に紹介者の名前が付されない
		8	34	7			
8	1	10	41	8	—	〃	
13	2	10	43	4	—	〃	合本6円60銭
17	2	9	29	4	—	〃	
3	1	7	26	—	—	〃	

付　表

号	編輯者 代表者 (編輯主任)	発行所	発行年月	総頁数	本欄 論文	雑纂	展望
新 第1巻第1号 (17号)	宗教研究会 姉崎正治	同文館 宗教研究発行所		144 (+5)	93	12	7
〃 第2号 (18号)	宗教研究会 姉崎正治 (原田敏明)	〃	大正 13年11月	170 (+10)	136	—	—
新 第2巻第1号 (19号)	〃 〃 〃	〃		170 (+5)	132	—	19
〃 第2号 (20号)	〃 〃 〃	〃		162 (+5)	139	—	—
〃 第3号 (21号)	〃 〃 〃	〃	14年5月	162 (+5)	151	—	—
〃 第4号 (22号)	〃 〃 〃	〃		168 (+5)	133	—	23
〃 第5号 (23号)	〃 〃 〃	〃		152 (+4)	104	—	22
〃 第6号 (24号)	〃 〃 〃	〃	〃 11月	174 (+12)	162	—	—
新 第3巻第1号 (25号)	〃 〃 〃	〃	15年1月	172 (+5)	165	—	—
新 第3巻第2号 (26号)	〃 〃 〃	〃	〃 3月	164 (+5)	150	—	—
新 〃 第3号 (27号)	〃 〃 〃	〃	〃 5月	169 (+5)	133	—	19
〃 〃 第4号 (28号)	〃 〃 〃	〃	〃 7月	170 (+5)	103	8	10
〃 〃 第5号 (29号)	〃 〃 〃	〃	〃 9月	168 (+5)	117	27	6
〃 〃 第6号 (30号)	〃 〃 〃	〃	〃 11月	166 (+12)	128	7	8
新 第4巻第1号 (31号)	〃 〃 〃	〃		160 (+4)	117	17	—
〃 〃 第2号 (32号)	〃 〃 〃	〃		159 (+4)	130	19	—

書評			新刊紹介			弔文	学会彙報など	価額	備考
頁数	洋書件数	和書件数	頁数	洋書件数	和書件数				
11	1	—	11	29	5	—	—	〃	
9	1	—	12	32	7	—	—	〃	
29	1	2	7	21	5	—	1	〃	編輯主任原田敏明氏満期辞任，古野清人氏新たに編輯主任となる
6	1	—	9	20	4	—	—	〃	合本 6 円60銭
18	—	2	6	18	2	—	—	〃	
5	1	—	6	16	3	7	—	〃	新刊紹介だけ別に新第5巻第1号にさかのぼる通巻頁数をつけはじめる
6	1	—	9	21	7	2	—	〃	
5	1	—	10	18	11	—	—	〃	新刊紹介の和書の部に大体紹介者の名，またはキヤピタルが再び付される
9	1	—	9	19	8	—	1	〃	
—	—	—	8	22	2	—	1	〃	合本 6 円60銭
4	1	—	8	14	2	—	—	〃	新刊紹介の洋書の部にも再び紹介者の名が付される
—	—	—	10	17	3	—	—	〃	
20	2	1	10	17	4	—	—	〃	
3	—	1	14	11	9	—	—	〃	
27	—	3	8	12	4	—	—	〃	
3	—	1	8	13	4	—	—	〃	合本 6 円60銭
29	2	3	9	16	5	—	2	〃	(1)本欄(2)雑纂(3)展望，書評(4)新刊紹介，彙報がそれぞれ別の通巻頁を付される

付　　表

号	編輯者 代表者 (編輯主任)	発行所 発売所	発行 年月	総頁数	本欄 論文	雑纂	展望
新 第4巻第3号 (33号)	宗教研究会 姉崎正治 (原田敏明)	同文館 宗教研究 発行所		168 (+4)	130	16	—
〃 〃 第4号 (34号)	〃 〃 〃	〃		166 (+5)	130	15	—
〃 〃 第5号 (35号)	〃 〃 (古野清人)	〃		172 (+4)	126	9	—
〃 〃 第6号 (36号)	〃 〃 〃	〃		164 (+10)	133	7	9
新 第5巻第1号 (37号)	〃 〃 〃	〃	昭和 3年1月	178 (+4)	126	27	1
〃 〃 第2号 (38号)	〃 〃 〃	〃	〃 3月	166 (+4)	139	9	—
〃 〃 第3号 (39号)	〃 〃 〃	〃	〃 5月	151 (+4)	96	38	—
〃 〃 第4号 (40号)	〃 〃 〃	〃	〃 7月	150 (+4)	106	29	—
〃 〃 第5号 (41号)	〃 〃 〃	〃	〃 9月	146 (+5)	100	27	—
〃 〃 第6号 (42号)	〃 〃 〃	〃	〃 11月	160 (+9)	124	27	—
新 第6巻第1号 (43号)	〃 〃 〃	〃	4年1月	150 (+3)	124	142	—
〃 〃 第2号 (44号)	〃 〃 〃	〃	〃 3月	150 (+3)	118	22	—
〃 〃 第3号 (45号)	〃 〃 〃	〃	〃 5月	126 (+3)	88	8	—
〃 〃 第4号 (46号)	〃 〃 〃	〃	〃 7月	165 (+3)	102	38	8
〃 〃 第5号 (47号)	〃 〃 〃	〃	〃 9月	154 (+3)	104	15	—
〃 〃 第6号 (48号)	〃 〃 〃	〃	〃 11月	162 (+9)	102	49	—
新 第7巻第1号 (49号)	宗教研究編輯部 姉崎正治 (岸本英夫・石津照璽)	〃 発売所 三省堂	5年3月	175 (+4)	72	57	6

書評			新刊紹介			弔文	学会彙報など	価額	備考
頁数	洋書件数	和書件数	頁数	洋書件数	和書件数				
12	2	—	10	8	8	—	—	〃	会員価額年5円となる
—	—	—	9	16	3	—	1	〃	
26	3	1	12	13	5	22	1	〃	木村泰賢教授追悼号
19	和書件数 1	洋書件数 1	13	16	8	5	9	〃	
48	洋書件数 2	和書件数 1	14	14	11	—	2	〃	合本昭和7年1月発行6円60銭5年11月臨時特輯号「現代宗教批判」（298頁，1円20銭）が同文館から発行
18	和書件数 1	洋書件数 2	20	和書件数 17	洋書件数 14	—	8	〃	
—	—	—	14	16	9	—	10	〃	
24	2	1	14	7	21	(4)	7	〃	カッコ内は本文頁数に入いっていない別頁数
30	洋書件数 2	和書件数 1	14	10	14	(2)	4	〃	
34	2	2	11	8	11	—	7 (1)	〃	
—	—	—	—	—	—	—	65	1円50銭	宗教学講座創設廿五年記念宗教学大会：昭和5年5月10日(土)～11日(日)東京帝国大学。発表者はＡＢＣ順に発表，1人15分。紀要；発表者，大会事務関係または欠席者の原稿をＡＢＣ順に載録，11日大会後の協議会で日本宗教学会が成立。会規約に隔年大会の開催と紀要の発行が発定められたが宗教研究の発行はまだ会の事業となっていない。
16	1	1	14	8	13	(6)	4	1円	合本6円60銭
—	—	—	15	14	12	—	7	〃	新刊紹介欄に新刊宗教関係書目がある
11	和書件数 1	洋書件数 1	10	8	7	—	2	〃	〃

付　表

号	編輯者 代表者 (編輯主任)	発行所 発売所	発行年月	総頁数	本欄 論文	雑纂	講演	展望
新 第7巻第2号 (50号)	宗教研究編輯部 姉崎正治 (岸本英夫・石津照璽)	同文館，宗教研究発行所，発売所三省堂	昭和 5年5月	188 (+4)	72	94	—	—
〃　第3号 (51号)	〃 〃 〃	〃 〃	〃　5月	167 (+3)	54	98	—	5
〃　第4号 (52号)	〃 〃 (I., 石津照璽)	〃 〃	〃　7月	184 (+3)	90	33	—	—
〃　第5号 (53号)	〃 〃 (T. I., 石津照璽)			196 (+3)	41	109	—	—
〃　第6号 (54号)	〃 〃 〃	〃		186 (+12)	70	52	—	—
新 第8巻第1号 (55号)	〃 〃 〃	同文館	6年1月	194 (+3)	44	104	—	—
〃　第2号 (56号)	〃 〃 〃	〃	〃　3月	200 (+3)	62	99	—	15
〃　第3号 (57号)	〃 〃 〃	〃	〃　5月	188 (+4)	73	70	—	—
〃　第4号 (58号)	〃 〃 〃	〃	〃　7月	196 (+3)	68	80	—	—
〃　第5号 (59号)	〃 〃 〃	〃	〃　9月	192 (+3)	52	88	—	—
宗教学紀要 (東京帝国大学宗教学講座創設二十五年記念) (60号)	東京帝国大学宗教学講座創設二十五年記念会編	〃	〃　〃	351 (+11)	275	—	11	—
新 第8巻第6号 (61号)	宗教研究編輯部 姉崎正治 (T. I., 石津照璽)	〃	〃　11月	178 (+11)	52	92	—	—
新 第9巻第1号 (12号)	〃 〃 〃	〃	7年1月	203 (+4)	78	81	—	22
〃　第2号 (63号)	〃 〃 〃	〃	〃　3月	178 (+3)	45	85	—	25

新刊紹介			弔文	学会彙報など	価額	備考
頁数	和書件数	洋書件数				
12	14	8	—	7	〃	
11	14	10	29	5	〃	新刊紹介欄に新刊宗教関係書目がある。
12	8	14	—	1	〃	〃
10	8	13	—	1	〃	〃
—	—	—	—	—	〃	
15	13	9	8	—	〃	
27	11	58	—	1	〃	
18	14	12	—	—	〃	
15	11	11	—	—	〃	
15	19	8	—	1	〃	
—	—	—	—	14	1円50銭	第2回大会：昭和7年5月7日(土)～8日(日)大正大学 部会：第1部　宗教一般，第2部　成立宗教 紀要：「日本の宗数学」というタイトルで出版された。 分類：1. 宗教学一般及び方法論　2. 宗教学特殊問題 3. 未開民族及び古代の宗教史　4. キリスト教 5. 仏教関係 (1)仏教学一般　(2)初期仏教　(3)後期仏教 6. 日本宗教史
22	18	13	—	—	1円	新刊紹介欄に新刊宗教関係書目がある
19	15	11	—	—	〃	〃
13	12	9	—	—	〃	
18	12	11	—	4	〃	新刊紹介欄に最近新刊書目がある

付　　表

号	編輯者 代表者 (編集主任)	発行所	発行年月	総頁数	本欄 論文	雑纂	展望	書評		
								頁数	和書 件数	洋書 件数
〃　第3号 (64号)	宗教研究編集部 姉崎正治 (石津照璽)	同文館	昭和 7年5月	184 (+3)	25	123	—	17	1	1
〃　第4号 (65号)	〃 〃 〃	〃	〃　7月	191 (+3)	32	70	19	25	2	1
〃　第5号 (66号)	〃 〃 〃	〃	〃　9月	181 (+4)	58	98	—	12	1	—
〃　第6号 (67号)	〃 〃 〃	〃	〃　11月	180 (+10)	78	71	—	20	3	—
新 第10巻第1号 (68号)	〃 〃 〃	大東出版社	8年1月	368 (+3)	368	—	—	—	—	—
〃　第2号 (69号)	〃 〃 〃	〃	〃　3月	220 (+4)	35	81	46	35	3	2
〃　第3号 (70号)	〃 〃 〃	〃	〃　5月	174 (+3)	58	66	—	22	洋書件数 2	和書件数 1
〃　第4号 (71号)	〃 〃 〃	〃	〃　7月	184 (+3)	70	48	12	36	和書件数 2	洋書件数 1
〃　第5号 (72号)	〃 〃 〃	〃	〃　9月	178 (+3)	27	117	11	8	2	—
〃　第6号 (73号)	〃 〃 〃	〃	〃　11月	176 (+3)	26	94	25	15	2	—
第2回日本宗教学大会紀要 (74号)	宗教研究編輯部 姉崎正治	〃	〃　12月	338 (+4)	324	—	—	—	—	—
新 第11巻第1号 (75号)	宗教研究編輯部 姉崎正治 T. I.,(石津照璽)	〃	9年1月	180 (+3)	56	72	12	18	—	2
〃　第2号 (76号)	〃 〃 〃	〃	〃　3月	177 (+5)	66	66	—	26	洋書件数 2	和書件数 1
〃　第3号 (77号)	〃 〃 〃	〃	〃　5月	187 (+3)	36	114	—	24	—	1
〃　第4号 (78号)	〃 〃 〃	〃	〃　7月	184 (+4)	56	96	—	10	1	—

書評		新刊紹介			弔文	学会彙報など	価額	備考
頁数	和書件数	頁数	和書件数	洋書件数				
—	—	13	14	6	—	—	〃	
—	—	—	—	—	—	—	〃	特輯「日本的宗教の検討」
—	—	9	5	10	—	—	〃	
—	—	9	5	8	—	—	〃	
—	—	8	4	8	—	—	〃	
—	—	11	7	8	—	—	〃	
—	—	11	9	7	4	—	〃	
—	—	—	—	—	—	10	1円50銭	第3回大会：昭和9年5月5日(土)～6日(日)立正大学 部会：第1部（宗教学一般・キリスト教・神道関係） 第2部（仏教学印度学関係） 紀要分類：第1篇宗教学の部 A　宗教哲学の諸問題 B　宗教心理学の諸問題 C　宗教社会学の諸問題 D　特殊問題 第二篇　宗教史の部 E　一般宗教史の諸問題 F　日本宗教史の諸問題 G　東洋宗教史の諸問題 H　西洋宗教史の諸問題
12	1	12	11	8	—	—	1円	
8	1	9	8	8	15	—	〃	通巻頁が1001からはじまる
26	2	14	3	12	—	—	〃	

付　　表

号	編輯者 代表者 (編集主任)	発行所	発行年月	総頁数	本欄論文	雑纂	展望	海外雑誌論文
〃 第5号 (79号)	宗教研究編輯部 姉崎正治 (石津照璽)	大東出版社	昭和 9年9月	186 (+3)	72	101	—	—
〃 第6号 (80号)	〃 〃 〃	〃	〃 11月	198 (+9)	49	52	97	—
新 第12巻第1号 (81号)	〃 〃 〃	〃	10年1月	177 (+3)	63	101	4	—
〃 第2号 (82号)	〃 〃 〃	〃	〃 3月	158 (+3)	49	98	2	—
〃 第3号 (83号)	〃 〃 〃	〃	〃 5月	159 (+3)	55	92	4	—
〃 第4号 (84号)	〃 〃 〃	〃	〃 7月	155 (+3)	48	94	2	—
〃 第5号 (85号)	〃 〃 〃	〃	〃 9月	155 (+3)	45	93	2	—
日本宗教学会 第3回大会 紀要 (86号)	日本宗教学会 姉崎正治	立正大学 宗教学 研究室	〃 10月	350 (+6)	340	—	—	—
新 第12巻第6号 (87号)	宗教研究編輯部 姉崎正治 (石津照璽)	大東出版社	〃 11月	160 (+10)	53	81	2	—
新 第3巻第1号 (88号)	〃 〃 〃	〃	11年1月	155 (+4)	77	44	2	—
〃 第2号 (89号)	〃 〃 宗教学，印度哲学 梵文学両研究室 副手(深川恒喜) (梶芳光運)	〃	〃 3月	146 (+3)	19	81	4	2

書評		新刊紹介			弔文	学会彙報など	価額	備考
頁数	和書件数	頁数	和書件数	洋書件数				
—	—	13	5	8	—	—	〃	
7	1	9	5	6	—	—	〃	
—	—	15	5	11	—	—	〃	本欄中8頁は横組巻末
—	—	10	9	1	—	—	〃	
—	—	7	3	4	—	—	〃	
—	—	8	4	4	—	—	〃	
—	—	5	4	4	—	—	〃	
—	—	—	—	—	—	11	2円	第4回大会：昭和11年11月28日(土)〜29日(日)，駒沢大学 部会及び紀要（学会部会の分類がそのまま紀要の分類となる） 講演部 第1部（宗教学一般・キリスト教関係） 第2部（宗教史的宗教社会学的のもの） 第3部（仏教学印度学関係）
—	—	—	—	—	—	16 (9)	非売品	第5回大会：昭和13年10月29日(土)〜30日(日)，立教大学 部会①宗教学一般 ④一般宗教史 ⑥仏教学第一 ③宗教哲学・キリスト教 ⑦仏教学第二 ②宗教心理学・宗教社会学 ⑤日本宗教史・神道 （数字は紀要における順序） 会則改正，普通号3回，特輯号1回の会誌季刊「宗教研究」の発行がきまる。
13	1	—	—	—	3	34	1円 20銭	普通号1円20銭 特輯号2円 1年分5円60銭 会員会費1ケ年5円

付　　表

号	編輯者 代表者 (編輯主任)	発行所 発売所	発行年月	総頁数	本欄論文	雑纂	展望	海外雑誌論文
〃　第3号 (90号)	宗教研究編輯部 姉崎正治 (深川恒喜，梶芳光運)	大東出版社	昭和 11年6月	165 (+3)	39	104	3	6
〃　第4号 (91号)	〃 〃 〃	〃	〃　8月	157 (+3)	60	76	3	2
〃　第5号 (92号)	〃 〃 〃	〃	〃　10月	159 (+3)	75	63	3	3
〃　第6号 (93号)	〃 〃 〃	〃	〃　12月	156 (+10)	55	87	—	4
新 第14巻第1号 (94号)	〃 〃 〃	〃	12年2月	153 (+3)	102	42	—	2
〃　第2号 (95号)	〃 〃 〃	〃	〃　6月	154 (+3)	76	68	—	2
〃　第3号 (96号)	〃 〃 〃	不二屋書房	〃　6月	163 (+3)	73	83	—	2
宗教学紀要 第4輯 (97号)	日本宗教学会 姉崎正治	〃	13年3月	362 (+12)	351	—	—	—
〃 第5輯 (98号)	〃 〃	日本宗教学会	〃　12月	328 (+5)	312	—	—	—
季刊 第1年第1号 (99号)	日本宗教学会 姉崎正治 (小口偉一) (村上俊雄)	日本宗教学会 発売所 岩波書店	14年6月	202 (+3)	137	15	—	—

書評		弔文	学会彙報など	価額	備考
頁数	和書件数				
—	—	29	2	〃	
16	1	—	—	〃	
—	—	—	—	2円	特輯「日本宗教の諸問題」
6	2	—	1	1円20銭	
10	2	—	3	〃	
16	3	—	2	〃	
—	—	—	10	2円	特輯「第6回大会紀要」 大会：昭和15年10月19日(土)～20日(日)龍谷大学 (学会創立10周年) 部会：第1部　宗教学宗教史一般問題 第2部　〃　〃　特殊問題 第3部　仏教学仏教史 紀要：部会毎ＡＢＣ順に編集
13	2	—	2	1円20銭	
14	3	—	2	〃	
6	4	—	1	〃	
—	—	—	1	2円	特輯「文化と宗教」
—	—	—	2	1円20銭	
—	—	—	5	2円40銭	特輯「姉崎博士古稀記念論文集」
—	—	—	7	2円	特輯「第7回大会紀要」 大会：昭和17年10月17日～18日東京帝国大学 部会　第1部　宗教学　第2部　宗教史学 第3部　宗教哲学 紀要：部会毎50音順に編集

付　　表

号	編輯者 代表者 (編輯主任)	発行所 発売所	発行年月	総頁数	本欄論文	雑纂
〃 第2号 (100号)	日本宗教学会 姉崎正治 (小口偉一，村上俊雄)	日本宗教学会 岩波書店	昭和 14年9月	219 (+4)	188	—
〃 第3号 (101号)	〃 〃 〃	〃 〃	〃 11月	208 (+3)	160	32
〃 第4号 (102号)	〃 〃 〃	〃 〃	〃 12月	322 (+9)	322	—
季刊 第2年第1号 (103号)	〃 〃 〃	〃 〃	15年3月	200 (+3)	193	—
〃 第2号 (104号)	〃 〃 〃	〃 〃	〃 6月	248 (+4)	235	—
〃 第3号 (105号)	〃 〃 〃	〃 〃	〃 9月	206 (+3)	188	—
〃 第4号 (106号)	〃 〃 〃	〃 〃	〃 12月	411 (+15)	401	—
季刊 第3年第1号 (107号)	日本宗教学会 小口偉一	〃 〃	16月4月	195 (+3)	180	—
〃 第2号 (108号)	〃 〃	〃 〃	〃 7月	194 (+3)	178	—
〃 第3号 (109号)	〃 〃	〃 〃	〃 10月	200 (+3)	193	—
〃 第4号 (110号)	〃 〃	〃 〃	〃 12月	295 (+9)	294	—
季刊 第4年第1号 (111号)	〃 〃	〃 〃	17年4月	222 (+3)	220	—
〃 第2号 (112号) 〃 第3号 (113号)	〃 田沢康三郎	〃 〃	〃 7月	444 (+5)	439	—
〃 第4号 (114号)	〃 〃	〃 〃	18年1月	331 (+11)	324	—

書評			学会彙報など	価額	備考
頁数	和書件数	洋書件数			
—	—	—	4	1円20銭 税14銭	
—	—	—	3	1円20銭 税11銭	
—	—	—	3	〃	
—	—	—	7	2円 税13銭	特輯「国民生活と宗教信念」
—	—	—	1	1円40銭 税20銭	
—	—	—	2	1円20銭 税20銭	
書評					第二次世界大戦末期及び戦後における中断
頁数	洋書件数	和書件数			
13	2	5	7	150円	表題「現代宗教学の問題」
—	—	—	1	〃	表題「宗教と人間」 第8回学術大会紀要を中心とする 大会：昭和23年10月23日～25日 部会：二部会 紀要：50音順に編集
15	—	14	9	〃	表題「死と宗教」 第9回学術大会紀要 大会，昭和24年10月7日～9日 東北大学：部会二部会
—	—	—	2	会費300円	英文表紙，目次，レジュメが付されるようになる。常務理事即ち編集委員の氏名が表示されるようになる。
6	1	—	1	（三冊分）	
6	—	5	2		
—	—	—	5	会費年暫定600円	第10回学術大会紀要 大会：昭和25年10月20日(金)～22日(日) 国学院大学：部会，三部会 紀要：部会毎50音順に編集
—	—	—	1	〃	

付　　表

号	編輯者 代表者 (編輯主任)	発行所 発売所	発行年月	総頁数	本論文	雑纂		
季刊 第5年第1号 (115号)	日本宗教学会 田沢康三郎	日本宗教学会 岩波書店	昭和 18年5月	178 (+3)	174	—	—	—
〃 第2号 (116号)	〃 〃	〃 〃	〃 7月	142 (+1)	139	—	—	—
〃 第3号 (117号)	〃 〃	〃 〃	〃 9月	158 (+1)	155	—	—	—
〃 第4号 (118号)	〃 〃	〃 〃	〃 12月	179 (+2)	172	—	—	—
季刊 第6年第1号 (119号)	〃 〃	〃 〃	19年4月	117 (+1)	116	—	—	—
〃 第2号 (120号)	〃 〃	〃 〃	〃 7月	90 (+1)	69	19	—	—
						研究報告	展望	文献目録
121号	日本宗教学会 小口偉一	玄理社	23年9月	145 (+3)	102	—	18	5
122号	〃 〃	日本宗教学会	24年10月	149 (+3)	108	40	—	—
123号	〃 〃	春日出版社	25年10月	160 (+4)	65	61	自由討議 10	—
124号	日本宗教学会 岸本英夫	日本宗教学会 発売所 春日出版社	26年2月	74 (+1)	72	—	—	—
125号	〃 〃 (大畠清)	春日出版社	〃 4月	60 (+1)	47	—	—	6
126号	〃 〃 (脇本平也)	〃	〃 6月	34 (+1)	26	—	—	—
127号	〃 〃	〃	〃 10月	165 (+5)	—	153	—	7
128号	〃 〃	〃	〃 12月	48 (+8)	47	—	—	—

書評			学会報など	価額	備考
頁数	洋書件数	和書件数			
—	—	—	1	会費年暫定600円	
—	—	—	3	〃	
8	—	2	3	〃	第11回学術大会紀要 大会：昭和26年10月19日(金)～21日(日) 天理大学 部会　第1部　哲学的研究 第2部　実証的研究 第3部　宗教史—日本宗教史 第4部　〃　—クリスト教・道教等 第5部　仏教(1) 第6部　〃　(2) 紀要：部会毎に編集
—	—	—	—	〃	
—	—	—	2	〃	第12回学術大会紀要 大会：昭和27年10月18日(土)～19日(日) 立教大学 部会：三部会
—	—	—	—	〃	
—	—	—	1	〃	
—	—	—	1	〃	
—	—	—	3	〃	第13回学術大会紀要 大会：昭和28年10月9日(金)～10日(土) 同志社大学 部会：4部会 紀要：全部を50音順に編集
12	1	4	—	〃	
—	—	—	—	〃	
4	1	—	—	〃	
—	—	—	—	〃	

付　　表

号	編輯者 代表者	発行所	発行年月	総頁数	本欄論文	研究報告	展望	文献目録
129 号	日本宗教学会 岸本英夫	春日出版社	昭和 27年3月	48 (+2)	47	—	—	—
130 号	〃 〃	日本宗教学会	〃 6月	96 (+2)	93	—	—	—
131 号	〃 〃	〃	〃 8月	74 (+8)	—	63	—	—
132 号	〃 〃	〃	〃 10月	63 (+2)	56	—	—	7
133 号	〃 〃	〃	〃 12月	212 (+18)	—	210	—	—
134 号	〃 〃	〃	28年5月	46 (+14)	46	—	—	—
135 号	〃 〃	〃	〃 9月	62 (+2)	61	—	—	—
136 号	〃 〃	〃	〃 10月	76 (+2)	75	—	—	—
137 号	〃 〃	〃	〃 12月	81 (+15)	—	78	—	—
138 号	〃 〃	〃	29年3月	116 (+2)	104	—	—	—
139 号	〃 〃	〃	〃 7月	97 (+3)	97	—	—	—
140 号	〃 〃	〃	〃 10月	44 (+2)	40	—	—	—
141 号	〃 〃	〃	〃 12月	43 (+2)	43	—	—	—

書評			弔文	学会会報など	価額	備考
頁数	洋書件数	和書件数				
—	—	—	—	3	会費年暫定600円	第14回学術大会紀要 大会：昭和29年10月11日(月)～13日(水) 早稲田大学。部会：5五部会 紀要：全部を50音順に編集
—	—	—	—	—	〃	
—	—	—	—	—	〃	
3	—	3	6	—	〃	
—	—	—	—	4	〃	学会創立25周年，東京大学宗教学講座創設50周年記念 第15回学術大会紀要 大会：昭和30年10月14日(金)～16日(日) 東京大学　部会5部会 紀要：全部を50音順に編集
3	—	1	—	3	〃	
11	—	3	—	—	〃	
5	—	2	—	—	〃	
—	—	—	—	4	〃	京都大学文学部創立50周年記念 第16回学術大会紀要 大会：昭和31年11月23日(金)～25日(日) 京都大学：部会6部会 紀要：全部を50音順に編集
10	—	4	—	3	〃	編集事務が東北大学宗教学研究室へ移管された。
—	—	—	—	1	〃	
—	—	—	—	2	〃	
—	—	—	—	6	〃	第17回学術大会紀要 大会：昭和32年10月25日(金)～27日(日) 大正大学 部会：6部会 紀要：全部を50音順に編集

付　　表

号	編輯者 代表者 (編輯主任)	発行所	発行年月	総頁数	本欄論文	研究報告	展望	シンポジウム
142号	日本宗教学会 大島清	日本宗教学会	昭和29年12月	89 (+15)	—	86	—	—
143号	〃 〃	〃	30年3月	64 (+2)	64	—	—	—
144号	〃 〃	〃	〃 7月	80 (+2)	80	—	—	—
145号	〃 〃	〃	〃 10月	76 (+2)	67	—	—	—
146号	〃 〃	〃	〃 12月	92 (+18)	—	88	—	—
147号	〃 〃	〃	31年3月	98 (+2)	92	—	—	—
148号	〃 〃	〃	〃 8月	77 (+2)	66	—	—	—
149号	〃 〃	〃	〃 11月	90 (+2)	73	—	12	—
150号	日本宗教学会 石津照璽	〃	〃 12月	79 (+7)	—	75	—	—
151号	〃 〃	〃	32年3月	97 (+3)	84	—	—	—
152号	〃 〃 (土屋光道，石田慶和，三枝充悳)	〃	〃 9月	128 (+7)	127	—	—	—
153号	〃 〃 (岡田重精)	〃	〃 12月	131 (+8)	129	—	—	—
154号	〃 〃	〃	33年2月	101 (+9)	—	91	—	4

書評			弔文	学会報など	価額	備考
頁数	洋書件数	和書件数				
—	—	—	—	13	会費年額暫定600円	
—	—	—	—	15	〃	英文表紙に Editorial Board が東北大学にあることを表示
—	—	—	—	17	〃	第9回国際宗教学宗教史会議 昭和33年8月27日(水)～9月4日(木)東京，9月5日(金)～9日(火)関西 学術大会は中止され，11月22日に国学院大学で総会及び講演会を開催
—	—	—	—	4	〃	
—	—	—	—	3	〃	
—	—	—	—	1	〃	
—	—	—	5	7	〃	
—	—	—	—	5	〃	第18回学術大会紀要 大会：昭和34年10月16日(金)～18日(日) 関西学院大学 部会：6部会 紀要：全部を50音順に編集
—	—	—	4	4	〃	
—	—	—	—	4	〃	第10回国際宗教学宗教史会議，マールブルク大会1960年9月11日～17日
—	—	—	—	1	〃	
—	—	—	—	11	〃	第19回学術大会紀要 大会：昭和35年11月4日(金)～6日(日) 青山学院大学：部会5部会 紀要：全部を50音順に編集
—	—	—	—	13	会費年額1000円 雑誌購読年額800円	

付　　表

号	編輯者 代表者	発行所	発行年月	総頁数	本欄論文	研究報告	展望	シンポジウム
155 号	日本宗教学会 石津照璽	日本宗教学会	昭和 33年3月	121 (+20)	608	—	—	—
第32巻第1輯 156 号	〃 〃	〃	〃 8月	110 (+8)	95	—	—	—
〃 第2輯 157 号	〃 〃	〃	〃 12月	117 (+5)	100	—	—	—
〃 第3輯 158 号	〃 〃	〃	34年3月	113 (+4)	77	—	32	—
〃 第4輯 159 号	〃 〃	〃	〃 7月	102 (+9)	81	—	18	—
第33巻第1輯 160 号	〃 〃	〃	〃 10月	99 (+7)	98	—	—	—
〃 第2輯 161 号	〃 〃	〃	35年2月	84 (+5)	72	—	—	—
〃 第3輯 162 号	〃 〃	〃	〃 3月	101 (+8)	—	86	—	10
〃 第4輯 163 号	〃 〃	〃	〃 3月	136 (+15)	111	—	17	—
第34巻第1輯 164 号	〃 〃	〃	〃 9月	131 (+5)	127	—	—	—
〃 第2輯 165 号	〃 〃	〃	〃 11月	86 (+6)	85	—	—	—
〃 第3輯 166 号	〃 岸本英夫	〃	36年1月	110 (+10)	—	99	—	—
〃 第4輯 167 号	〃 〃	〃	〃 3月	103 (+15)	90	—	—	—

書評			学会会報など	価額	備考
頁数	和書件数	洋書件数			
9	2	1	6	会費年1000円 雑誌購読年800円	編集事務が東北大学から東京大学へ引継がれる。これまで編集委員は常務理事が兼ねていたが，常務理事を編集顧問とする編集委問会が組織された。
11	2	1	11	〃	
—	—	—	12	〃	第20回学術大会紀要 大会：昭和36年10月13日(金)～16日(月) 九州大学：部会6部会 紀要：各部会毎に発表順に編集
13	2	1	7	〃	
10	2	—	7	〃	
11	2	—	10	〃	
—	—	—	11	〃	第21回学術大会紀要 大会：昭和37年10月12日(金)～14日(日) 日本大学：部会6部会 紀要：部会毎に編集
11	—	1	12	〃	
15	3	—	8	〃	
—	—	—	11	〃	第22回学術大会紀要 大会：昭和38年10月6日(日)～8日(火) 富山大学：部会8部会 紀要：部会毎に編集
17	3	—	6	〃	
—	—	—	5	〃	
6	1	—	5	〃	

付　　表

号	編輯者 代表者	発行所	発行年月	総頁数	本欄論文	研究報告	展望	分科会報告
第35巻第1輯 168号	日本宗教学会 岸本英夫	日本宗教学会	昭和 36年6月	120 (+3)	98	—	7	—
〃 第2輯 169号	〃 〃	〃	〃 10月	136 (+3)	97	—	17	—
〃 第3輯 170号	〃 〃	〃	〃 12月	166 (+6)	—	141	—	13
〃 第4輯 171号	〃 〃	〃	37年3月	126 (+11)	106	—	—	—
第36巻第1輯 172号	〃 〃	〃	〃 9月	136 (+2)	112	—	7	—
〃 第2輯 173号	〃 石津照璽	〃	〃 12月	128 (+2)	93	—	14	—
〃 第3輯 174号	〃 〃	〃	38年1月	204 (+7)	—	193	—	—
〃 第4輯 175号	〃 〃	〃	〃 3月	108 (+6)	74	—	11	—
第37巻第1輯 176号	〃 〃	〃	〃 9月	138 (+2)	115	—	—	—
〃 第2輯 177号	〃 〃	〃	39年1月	168 (+6)	—	157	—	—
〃 第3輯 178号	〃 〃	〃	〃 3月	122 (+2)	99	—	—	—
〃 第4輯 179号	〃 〃	〃	〃 3月	62 (+11)	57	—	—	—
第38巻第1輯 180号	〃 増谷文雄	〃	40年1月	134 (+2)	110	—	13	—

書評			弔文	学会彙報など	価額	備考
頁数	和書件数	洋書件数				
—	—	—	—	10	会費年1000円 雑誌購読年800円	第23回学術大会紀要 大会：昭和39年11月13日(金)～15日(日) 東京大学：部会5部会 紀要：部会毎に編集
3	1	—	—	6	〃	
3	1	—	—	4	〃	
4	1	—	—	7	〃	
11	2	—	—	4	〃	
—	—	—	—	12	〃	第24回学術大会紀要 大会：昭和40年8月28日(金)～29日(日) 北海道大学：部会6部会 紀要：部会毎に編集 第11回国際宗教学宗教史会議 クレアモント大会1965年
—	—	—	—	16	〃	
6	1	—	—	5	〃	
—	—	—	—	5	〃	
—	—	—	—	12	〃	第25回学術大会紀要 大会：昭和41年9月30日(金)～10月2日(日) 東洋大学：部会6部会 紀要：部会毎に編集
6	1	—	—	16	〃	
6	1	—	—	12	〃	
—	—	—	—	6	〃	
—	—	—	—	15	〃	第26回学術大会紀要 大会：昭和42年10月20日(金)～22日(日) 龍谷大学：部会8部会 紀要：部会毎に編集

付　　表

号	編輯者 代表者	発行所	発行年月	総頁数	本欄 論文	研究 報告	展望	講演
〃 第2輯 181号	日本宗教学会 増谷文雄	日本宗教学会	昭和 40年3月	182 (+7)	—	172	—	—
〃 第3輯 182号	〃 〃	〃	〃 3月	138 (+2)	85	—	12	32
〃 第4輯 183号	〃 〃	〃	〃 3月	112 (+12)	90	—	15	—
第39巻第1輯 184号	〃 〃	〃	〃 6月	120 (+2)	91	—	18	—
〃 第2輯 185号	〃 〃	〃	〃 7月	116 (+2)	101	—	—	—
〃 第3輯 186号	〃 〃	〃	〃 10月	153 (+5)	—	141	—	—
〃 第4輯 187号	〃 〃	〃	41年3月	135 (+2)	119	—	—	—
第40巻第1輯 188号	〃 〃	〃	〃 6月	116 (+2)	105	—	—	—
〃 第2輯 189号	〃 石津照璽	〃	〃 11月	136 (+2)	131	—	—	—
〃 第3輯 190号	〃 〃	〃	42年1月	223 (+5)	—	168	—	43
〃 第4輯 191号	〃 〃	〃	〃 6月	110 (+2)	88	—	—	—
第41巻第1輯 192号	〃 〃	〃	〃 9月	100 (+2)	82	—	—	—
〃 第2輯 193号	〃 〃	〃	〃 12月	105 (+2)	99	—	—	—
〃 第3輯 194号	〃 〃	〃	43年3月	244 (+5)	—	194	—	35

書評			巻頭言	会報など	価額	備考
頁数	和書件数	洋書件数				
7	—	1	—	18	会費年1000円 雑誌講読年800円	
7	1	—	—	6	〃	
14	2	—	—	11	〃	
—	—	—	—	6	〃	第27回学術大会紀要 大会：昭和43年10月4日(金)～6日(日) 武蔵野女子大学。部会：7部会 紀要：部会毎に編集
6	1	—	—	2	〃	
—	—	—	1	—	〃	

本表は日本宗教学会，東京大学総合図書館，文学部宗教学研究室，個人所有本を資料としてまとめた。

空欄は合本製本のさい奥付がのぞかれたなどの理由により不明のもの。会員諸氏の蔵書でもし判明するばあい，是非ご一報いただきたい。

戦前の「宗教研究」に雑纂という欄があり，ここにしばしば展望・書評に相当する比較的短い論文が含まれている。本表のばあいそれらを展望，書評として雑纂と区別した。

書評，批評紹介（この欄の名称はたびたび変るが新刊紹介というのが一番長く使われた）欄の和洋書件数は書評，紹介の対象となった本の数である。時代によって洋書が先になったり和書が先になったり，混ったりするので，多少わずらわしいが和洋の前後を区別した。

弔文も本欄，雑纂などに含まれているばあいがあるが，本表では弔文として別にまとめた。

付　　表

号	編輯者 代表者	発行所	発行年月	総頁数	本欄論文	研究報告	展望	座談会
〃　第4輯 195号	日本宗教学会 石津照璽	日本宗教学会	昭和 43年6月	125 (+2)	100	—	—	—
第42巻第1輯 196号	〃 〃	〃	〃　9月	104 (+2)	91	—	—	—
〃　第2輯 197号	〃 堀　一郎	〃	〃　12月	127 (+2)	102	—	—	—
〃　第3輯 198号	〃 〃	〃	44年3月	166 (+5)	—	160	—	—
〃　第4輯 199号	〃 〃	〃	〃　6月	139 (+9)	116	—	—	—
第43巻第1輯 200号	〃 〃	〃	〃　12月	162	—	—	102	58

アメリカ宗教学界の最近の動向

中村恭子

はじめに

アメリカの宗教学界については、かつて北川三夫氏が本誌に寄稿された「アメリカ宗教学の展望　上・下」[1]、『宗教学入門』に収められた同氏の「アメリカにおける宗教学の展望」[2]などがある。それらはアメリカの宗教学界を歴史的に概説し、問題点をついたもので、アメリカ宗教学界の現状を理解するうえに有益な資料であることは今も変らない。さらに今春より、アメリカ宗教学会（American Society for the Study of Religion）会長として活躍中の北川氏は、近刊予定の『現代の宗教学』[3]に、再びアメリカ宗教学界の動向を執筆、旧稿以来の間隙を埋める予定といわれる。

そこで、わたくしは本稿において、最近十年間の動向を中心に、主として大学の教課、制度面に現われた変化を通じて、アメリカ宗教学界の動きを跡づけてみたい。わたくしが一九五九―六九年という線を引いたのは、一つには五九年がアメリカ宗教学会結成という、学界の歴史を劃する年であるため、一つには五九年に留学し、現在、また滞米中のわたくしにとって、この十年間の変化は体験を通じて語ることができるのではないかと考えたからである。

一九五八年のわが国における第九回国際宗教学会議に出席された読者は、ヨーロッパの著名な宗教学者グループにたいし、神学者、哲学者、聖職者、歴史家など、アメリカからの数多い出席者の中には、宗教学という共通の背景も意識も認め難かったことを想起されるであろう。アメリカ宗教学会が発足したのは、その翌年のことであった。発会式に全米各地よりシカゴに集った三十名あまりの会員を前に、初代会長グッドイナフ（Erwin R. Goodenough）は「宗教学」[4]と題する講演をおこない、学術的宗教研究の道の嶮しさ、時流に迎えられぬ宗教学の伸び悩みについて述べ、一度ならず宗教学もしくは宗教学者を「とり残されたもの」と呼んでいる。すくなくとも、五九年以前のアメリカにおいて、宗教学は宗教研究の、無視もしくは排除されがちな傍系にすぎなかったのである。北川氏も前出論文中、当時大学院に宗教学（history of religions）科が設置されているのはシカゴ大学（University of Chicago）のみであると慨歎し、研究所、研究誌の必要を力説している。

しかしながら、これは宗教研究の必要が、当時認められなかったということではない。むしろ、教会に直属しない大学で宗教をカリキュラムから閉出したことが反省され、その必要を説く声が次第に高まりかけていたのである。[5]その後相ついで、ハーバード大学（Harvard University）に世界宗教研究所（Center for the Study of World Religions）、クレアモント（Claremont）

にプレズデル世界宗教研究所（Blaisdell Institute for the Study of World Religions）が開設される一方、シカゴからは宗教学研究誌（*Journal of the History of Religions*）が創刊され、さらに社会科学者をも加えた科学的宗教研究学会（Society for the Scientific Study of Religion）とその会誌が発足するなど、宗教研究はアメリカの学界に、着々とその歩みを印した。六五年にクレアモントで催された第一一回国際宗教学会議は、このような動向を反影している。そして、最近二、三年間の大学における宗教研究を論ずる論文は、筆を揃えて「その不思議な人気」[6]を伝え、この推移を「静かな革命」[7]とまでいう声も聞かれるのである。

新しい価値を模索する学生

洋の東西を問わず、各国の大学をゆるがしている学生運動は、アメリカではカリフォルニア大学バークレイ校（University of California at Berkeley）、シカゴ大学などに始り、コロンビア大学（Columbia University）、ハーバード大学など、全米の公私立大学に波及した。新聞に報道されるような暴力沙汰に至らぬまでも、過去一年間になんらかのデモ、抗議が全米の三分の二のキャンパスで行われたと伝えられている。[8]その共通スローガンはベトナム戦争反対、人種差別反対、学生の大学運営への参与などさまざまであるが、大学側は学内問題について相当敏速な反応を示している。約七〇パーセントの学生はカリキュラム編成に従来以上の学生の参与を希望しているといわれるが、[9]昨年から今年にかけて多くの大学にアフロ・アメリカ研究センター、プログラムなどが新設されたのは、主として黒人学生の要望に応じたものである。宗教研究においても、これまで無視されがちであつた黒人教会史、ブラック・ムスリム研究、ひいてはアフリカ宗教研究などが脚光を浴び、書店にはアフロ・アメリカ研究コーナーが特設される今日、[10]中世ローマ教会史を「異端と抗争の歴史」というテーマで書き直して売込もうとする出版社の話も驚くにあたらない。

一方、大学の既成コースに飽き足りぬ学生が自主セミナーを組織運営し始めたのも、この二、三年間のことである。[11]人間と社会により直結した問題に取組もうとするこの種のコースには、文学、哲学、宗教などに関するものが多い。既成学科間の壁を破り、人間の問題をさまざまな角度から検討しようとする試みは、大学側への建設的デモとして効果をあげ、最近の諸大学におけるプログラム改訂、新設コース内容に相当の影響を与えている。ここで軽卒に学生運動と宗教研究の上昇気運の因果関係を論じるつもりはないが、すくなくとも、それらの共通の基盤は指摘できるのではないだろうか。たとえば、アメリカの学生運動といえばすぐ連想されるカリフォルニア大学バークレイ校は宗教学科をもたず、委員会制によって宗教を専攻できる仕組みになっているが、学部では専攻者がほとんどいなかったといわれる。しかしながら、「文学としての聖書」、「東洋の聖典」というようなコースは、キャンパスの人気コースとしてあげられている。[12]六三年にサンタ・バーバラ（Santa Barbara）校

に宗教学科が設置されたのは、このような気運の反映とみられる。一昨年、カリフォルニア知事の教育費予算削減に抗議した学生たちは、その打撃を蒙る、学生の関心深いプログラムに宗教学科をあげていた。

現代の若い世代は、伝統的なアメリカの基本的価値を、疑うことなしに受けいれはしない。ベトナム戦争、あるいは人種差別というアメリカの歴史を通じて、かれらは今それらの価値を疑い、それ以外の価値にも心を開いているのである。『毛主席語録』、『易経』、『バガバッド＝ギーター』、禅関係書などが大学近辺の書店で相当の売行きをみせているのはこのためである。それらはいわゆるヒッピーと呼ばれる学生のみならず、アメリカのエリート・コースを歩んでいる学生たちにも影響を及ぼしている。[13]「世界の諸宗教」、「東洋思想」などのコースは、既成教会にも世俗主義にも安住できない、新しい生き方を求める学生、未知の世界を知的好奇心をもつて探究しようとする学生などを集め、従来の欧米の優越感、実証主義、理性主義への反省的言辞が学生の拍手を招くことはしばしばである。十年前のいかにもアメリカ的なカレジの学生の雰囲気は、遠い昔のことしか思えないほど、その変り方は激しい。それでは、このような風潮は、そのまま宗教研究もしくは宗教学の発展を支えるものなのであろうか。

公立大学における宗教研究の進展

最近の宗教研究に関する最も明白な変化は、公立大学にみいだされる。第二次大戦後、徐々に進行し、最近とみに加速化されたこの変化はどのようにしてもたらされたのであろうか。

歴史的に語るならば、アメリカのカレジにおける宗教コースは、少数の例外を除けば、宗教研究のためではなく、宗教教育のために設けられたといえる。教会の直轄する大学が、各教派の宗教教育を学生にほとんど必修としてきたことはいうまでもない。キリスト教諸派、ユダヤ教など、異なる信仰を抱く学生を集める公私立大学においても、特定教派に偏らないという建前ではあるが、かなりプロテスタント的教育が行われていたというのが事実である。今世紀初頭には、「聖書講座」(Bible Chair)と呼ばれる寄附講座が公立大学にも設けられ、初め課外コースであったものがやがて単位を与えられ、正規のコースに認められるという経過をたどっている。アメリカ南部では、今日もこの制度がいくつかの大学の宗教研究プログラムにみられる。テキサス大学(University of Texas)は、一九〇七年以来この制度によっている。[14]また、二、三〇年代には、リベラリズムの風潮によって、キリスト教諸派とユダヤ教合同の「宗教学校」(School of Religion)が生れた。アイオワ大学(University of Iowa)は現在までこの制度によって宗教研究を行っているが、そのカタログには神学校(Seminary)との相異点とともに、ユダヤ・キリスト教研究に重点をおく旨が明記されている。

アメリカ最古の州立大学(一七九五年創立)であるノース・カロライナ大学(University of North Carolina)は、前述二制度を経た後、一九四六年に宗教学科を設置、他の公立校に少

なからぬ影響を及したと考えられている。しかしながら、制度上の変革は必ずしも過去の学風との断続を意味せず、聖書研究は中心的位置を占めていたが、次第にその研究範囲は拡大され、宗教と文化の問題、さらに六十年代に入つて、比較宗教的要素も加味された。[15] ちなみに、プリンストン大学（Princeton University）に宗教学科が設けられたのも、同じ四六年のことであつた。

第二次大戦がアメリカの社会を大きく変貌させたことは今更いうまでもない。戦後のアメリカのアジアへの全面的介入は、アメリカ人をそれまでの孤立主義から次第に押出した。五八年に成立した国防教育法（National Defense Education Act）は、大学における言語及び地域研究プログラムの財政援助を規定している。戦時中の外国語特別教育プログラムを発展させ、従来冷遇されていたアジア、東欧などの地域研究を一挙に発達させようとする目的のため、援助は名門校の大学院プログラムに、少数重点主義的に配分された。六四年以降、カレジにも援助が拡張され、全国的規模にひろがってきたといわれる。[16] このような地域研究の重点が政治・経済面におかれ、それも近代、現代に集中するのは自然の成行である。宗教は中世とともに棚上げされがちであつたが、それには、あまりにキリスト教中心的で、他宗教に関心を示さなかつた宗教研究者一般もその責を負わねばならない。とはいえ、イスラム、ヒンズー教、仏教などの研究が、言語学者、社会学者、史学者などによって、地域研究の一環として開発されたことは事実である。その珍しい例は、ウイスコンシン大学（University of Wisconsin）のインド言語地域研究センターに新設された仏教学専攻博士課程であろう。ユダヤ教研究についてその推移をみると、カレジの専任職は四五年の一二から、六五年には六〇に増加、その半数は州立校で、中近東言語地域研究プログラムの一コースとして扱われる傾向が著しい。また宗教学科にユダヤ教関係コースがおかれるようになつたのも、この数年間の新しい変化の一つである。[17]

一方、宗教不在の大学教育、公立校における宗教研究のあり方をめぐって、四九年のミネソタ大学（University of Minnesota）主催「州立大学における宗教」会議[18]を皮切りに、五八年のミシガン大学（University of Michigan）主催「宗教と州立大学」会議[19]などが催され、教課的、法律的、行政的諸問題が宗教を教える人々の間で論じられるようになった。六二年に発足した高等教育における宗教協会（Society for Religion in Higher Education）[20]は、ケント、ダンフォース奨学金[21]受領者を会員とする教育団体で、高等教育の場における宗教の意義探究をその目的にうたっている。この協会が六四年に「州立大学における宗教研究」会議[22]を催した頃には、すでに大学における宗教研究の当否を論ずる段階はすでに過ぎ、議論はいかに教えるべきかという具体策に移っていった。その翌年のサザン・イリノイ大学（Southern Illinois University）の会議[23]は、すでに新しい方向に踏み出した州立大学の空気を伝えている。

六五―六六年度の各州より抽出された一三五公立大学調査結果によれば、宗教専攻が可能なのは、大学院を有する大学（九

○）の三五パーセント、学部のみの大学（四五）の一八パーセントということである。宗教が選択コースとして教えられている大学は過半数に達し、「宗教学校」型、「聖書講座」型プログラムを有する大学は全体の一二パーセントを占める。州別にみても、全米の約半数の州は宗教コースをもつ大学を有し、約三〇パーセントの州が宗教を専攻できる大学をもっているので、宗教の学術的研究の必要はすでに広く認められるに至ったといえよう。[24] その後の情勢の変化は著しく、六八年の報告によれば、全州立大学の九〇パーセント以上がなんらかの宗教のコースを有し、約三〇パーセントは宗教学科をもっているといわれる。[25] これらの統計の数字に現われぬ点を補足するならば、このような新変化のみられる州立校は、学生の急増しているマンモス型大学であることが多い。[26] 今世紀末には全米学生の九五パーセントが公立大学で教育されることになるであろうといわれるので、これらの大学の将来への影響の大きさは容易に予測される。

公立大学に宗教学科新設、充実が急に起った原因はいろいろ考えられる。前述のように第二次大戦後のコスモポリタニズムは政府の外国研究振興政策と相俟って、諸宗教研究促進に力があった。一方、三、四〇年代のキリスト教界の「神学ルネサンス」は、アメリカではポール・ティリッヒ、（Paul Tillich）、ニーバー兄弟（Reinhold and Helmut Richard Niebuhrs）などの活動を通じて、知識人の宗教への関心を増大したのである。さらに、第二次バチカン公会議以降のエキュメニズムは、宗教の相互理解をうたい、教会人の間にも諸宗教研究の機運が盛上ってきたことなどがあげられる。またアメリカ社会の宗教的多元性が、信教の自由をめぐる法律闘争、最高裁判決などによって漸く人々に理解されるようになり、教育機関における宗教のあり方に関心が高まったこともあげられる。

従来、公立校における宗教プログラム設立反対理由の一つは、それが信教の自由を保証する憲法に抵触するということであった。アメリカ連邦憲法は公立校における宗教研究に直接言及していないが、各州憲法や法令には公立校の政治的、宗教的偏向、宗派的教育の禁止を明文化しているものがある。六六年にワシントン大学（University of Washington）を相手どって、その英文学科の「文学としての聖書」コースは宗教教育なので違憲であるとする、最高裁に持込まれた訴訟が、大学における宗教をめぐった最初の例であるといわれるが、[27] 大学行政者や宗教コースを担当する神学者は法律上の問題にかなり神経を使い、前述の州立大学主催会議では必ずこの問題が論じられている。宗教教育、儀礼が公立校から姿を消した今、公立校における宗教の唯一の生存の道は学術的研究なのである。また、宗教の多様性はその一学科内での研究を不可能にするので、関連諸学科合同下で研究されるべきであると主張し、現在、委員会制度を採用している大学もある（ミシガン大学）。行政者が反対する理由は、現実的な予算、施設の問題である。諸財団の援助、政府の国防教育費などを獲得して新設、拡張を行う大学が多いが、これも本年に始る政府の緊縮財政政策のために、ここ

数年の急激な上昇カーブが頭打ちになるのではないかと思われる。すでに、六九―七〇年度に新設予定していたコースを取消す大学の噂などもきこえている。

カナダの新しい動き

アメリカ合衆国内のこのような動向に対応して、カナダでも漸く大学における宗教研究のあり方が問題になってきた。カナダ人文科学協議会（Humanities Research Council of Canada）に所属するカナダ宗教学会（Canadian Society for the Study of Religion）は一九六六年に発足、現在の学会の最大の関心事は、宗教研究の発達度もしくは発達指数としての大学・大学院における宗教のカリキュラム、プログラムの問題であるらしい。[28]

六八―六九年度において、宗教研究の大学院プログラムを有する大学は、カナダ全体に八校あり、その規模、内容は千差万別といわれる。たとえば、マクマスター大学（McMaster University）では宗教学科に四〇名の大学院生を擁し、全員に奨学金を与えることができるが、ブリティッシュ・コロンビア大学（University of British Columbia）では二名のみにしか与えられないというような財政上の相異がある。また、将来の就職の見通しが困難なので、優秀な学生が集まらないという嘆きもきかれる。カナダの大学一般はいまだに修士どまりで、博士課程は英、米、仏などへ留学するというのが常識なので、大学関係者は宗教の博士課程新設に性急に踏切るべきではないと考えている。したがって、少数の例外を除いて、現在のカナダの問題は、カレジにおける宗教研究のあり方である。

ほとんどが教会と直接関係をもたないカナダの大学の過半数において、宗教を主専攻（メイジャー）にも副専攻（マイナー）にもできないのが現状である。神学科もしくは宗教学科を有する二一校中、一六校はユダヤ教、キリスト教以外の宗教に関する専門的コースをもたず、七校は入門講座ももっていない。換言すれば、非イスラエル宗教を入門レベル以上に教えているのは五校のみで、アメリカと同様、ここでも伝統的キリスト教研究が盛んであることを物語っている。これらの大学の宗教関係四二五コースの内訳はキリスト教三〇〇コース余、ユダヤ教六七、イスラム九、アジア諸宗教一八―二〇、世界諸宗教二〇、比較宗教もしくは宗教現象学一五―二〇で、キリスト教対非キリスト教のコース数比率は一五対一ということになる。これにたいし、神学科、宗教学科をもたぬ五〇校中、宗教関係コースが全然ない大学は三校のみ、四七校はいずれかの学科内で約一〇〇コースを提供している。それらのコース内容と提供学科の内訳は、哲学科の宗教哲学コース四六パーセント、歴史科の個別宗教史三一パーセント、社会学科の宗教社会学一〇パーセント、古典学科のギリシヤ・ローマ宗教七パーセント、美術、人類学科各三パーセント、文学、心理学各一パーセントである。[29] これをアメリカにくらべてみれば、行動科学者の宗教への関心の薄さが明らかになる。同時にカナダの宗教研究がきわめて神学的、哲学的であることが知られよう。

しかしながら、カナダにおいても、この一、二年間に宗教学

科新設への動きが著しく、遠からずほとんどの大学で宗教専攻が認められ、宗教専攻博士課程も数校に設けられるであろうといわれる。[30] 新設宗教学科は従来帰属していた哲学科よりの独立、神学科の宗教学科への転身、無よりの創造などさまざまであるが、カナダの場合は束縛となる歴史や教会との関係がないので、プログラムがその企画者次第で、斬新なものとなる可能性が充分認められる。長い伝統を有するマッギル大学（McGill University）のイスラム研究所、マニトバ大学（Manitoba University）のユダヤ教学科、或いは、ブリテイツシュ・コロンビア大学に開設された仏教学プログラムのように、数大学が協力して専門領域を分担しあう制度が、財政的にも人事的にも好ましいと考えられている。アメリカと境を接し、同じ英語を話す国であるにもかかわらず、カナダの英語文化圏はイギリス式で、フランス風もしくは、アメリカでシカゴが確立した意味あいでは“history of religions”という言葉を使わない。人によって“comparative religion”“phenomenology”“study of religion”“religious studies”などまちまちな用語を使っている。英仏二国語に代表される二文化圏より成るカナダにおいて、まず共通用語の概念規定が重大問題になることであろうが、それは方法論に連なる問題であるだけに複雑である。現在のカナダ宗教学会は圧倒的に英米色が濃く、フランス文化圏の一層の参与が待たれる次第である。宗教学研究誌発刊は六八年以来の懸案であるが、いまだ実現の運びに至らないのは資金不足、人不足のためであろうか。ちなみに、マクマスター大学では、宗教学に“religious science”という語を用い、人文科学と社会科学双方から半数ずつの教授を迎えたといわれ、岸本英夫氏が国際的共通用語設定のために“religiology”という語を新造、「宗教学」の語義を与えようとされたという話が、今改めて想出されるのである。[31]

伝統的大学院のプログラム再編成

公立大学のなかには、アイオワ大学、テンプル大学（Temple University）、ペンシルベニア州立大学のように、修士、博士課程をもっている大学もあるが、その数はきわめて少ない。宗教研究を志す学生は、神学校、私立大学の神学部（Divinity School）もしくは宗教学科に進学するのが普通である。ちなみに、マイケルセン（Robert Michaelsen）がケイス・スタディを発表した一〇大学（公立八、私立二）[32]の六三―六四年度の宗教プログラム担当教授の博士号取得大学を調べたところ、つぎのような結果が得られた。ほとんどの教授は私立大学の神学部もしくは宗教学科で学位を得ている。数の多い順にあげれば、エール、シカゴ、ハーバード、プリンストン、コロンビア、デューク、ペンシルベニア、ジョンズ・ホプキンズなどで、神学校としてはプリンストン（Princeton Theological Seminary）とユニオン（Union Theological Seminary）、唯一の州立大学はカリフォルニア・バークレイ校である。他に移民学者のヨーロッパ大学の学位がいくつかみられる。アメリカの学界―とりわけ人文・社会科学―を動すといわれる、いわゆる五大学がここ

にもはっきり現われ、その実績のほどを示している。五大学中、プリンストンはいまだに伝統的なカレジ中心主義を守り、学生数を学部二、大学院一の比率におさえているのに対し、もともと大学院中心に創られたシカゴは、大学院二、学部一と逆の比率を示し、最近、ハーバード、コロンビアもその構成に近づいている。エールはその中間で、学部と大学院、ほぼ同数である。[33] これらの大学に代表されるアメリカの既成学界に、数の上からすれば急増が予想される公立大学の大学院が、どのようなプログラムで割り込んでゆけるかは、現在のところ未知数に近いが、興味ある問題である。日進月歩の自然科学領域では、すでに旧体制は崩されているが、伝統的学問においては、まだこれらの五大学は旧体制化せず、推進力を握っているのである。

アメリカの著名な私立大学はほとんど教会によって創立されたといっても過言ではない。元来、聖職者教育のために設けられたのであるが、大学が拡張され、教会の直轄を離れるに至ると、神学部もその性格を次第に変えていった。研究の学術的水準が上昇するにともない、聖職者養成の実践的要請に応じかねることが多く、それに不満な教会は各神学校を新たに開設するに至ったのである。しかしながら、神学校のなかには、大学に隣接し、契約によって大学との交流をはかっている所もある（ユニオンとコロンビア、プリンストン神学校と同大学、ハーバードと聖公会神学校など）。ここで五大学をとりあげれば、ハーバード、エール、シカゴは神学部を有し、宗教研究はそこで行われる。エールは聖職者教育と学術的研究を切離し、後者を人文科学の一学科としたが、ハーバードとシカゴの神学部は現在なお二つの機能を果している。プリンストンとコロンビアは人文科学の一として宗教学科を設け、各神学校と緊密な提携を行っている。そこで、まず神学校と一般大学の中間的存在である神学部における宗教学のあり方を、シカゴとハーバードの例によって考えてみよう。

アメリカの寄合世帯的宗教研究者のなかで異彩を放つ宗教学者グループは、シカゴ大学神学部宗教学科の出身者である。ヨアヒム・ワッハ（Joachim Wach）、ミルチァ・エリアーデ（Mircea Eliade）と、第二次大戦後、二人のヨーロッパの碩学を主任教授に迎えたシカゴは、ヨーロッパに生れ育った宗教学をアメリカの風土に移植、適応させるのに最も貢献し、今日「シカゴ学派」と呼ばれる少壮学者を育てたのである。[34] シカゴには、一八九二年より一九四五年まで、人文科学部大学院に比較宗教学科がおかれていたが、その後神学部に移り、宗教学科となった。そのハスケル講演制度（Haskell Lectureship）は、一八九五年創設以来世界各国より著名な宗教学者を招き、アメリカの宗教学者養成はもとより、文化交流にも著しく貢献した。わが国からは姉崎正治、岸本英夫、堀一郎の諸氏が招かれ、アメリカの日本宗教理解に貢献されたことは、周知の通りである。宗教学を学問として樹立し、固有の方法論を主張、出版活動を通じて広くその業績を公表してきたが、近刊予定の『現代の宗教学』（直訳すれば、『宗教学―理解の問題に関する諸論』）

は、とくにシカゴ育ちの宗教学者のみの寄稿に成り、意識的な方法論樹立への態勢がうかがわれる。

しかしながら、宗教学科はこれまで神学部内で主導的位置を占めていたわけではない。ワッハ時代から六〇年代初頭まで、宗教学科は神学部の少数派周辺学科にすぎず、わたくしの記憶では、六〇年代の初めに宗教学専攻学生は博士、修士課程あわせて十数名あまりであった。当時の神学部は聖書学、教会史、神学を中核(コア)学科として、学位取得資格試験において全学生必修、宗教学を含む他の四学科は修士号のためには二つ選択、博士号のためには全部必修とされていて、自己の信仰と研究との関連がしばしば口述試験で問われたものであった。宗教学を専攻する積りで、神学部学生になることを予期せず留学したわたくしは、当時の神学部のプロテスタント的神学意識の強さにかなり悩まされたものである。それは仏教徒—すなわち、神学部の異端者的存在—であったわたくしのみならず、カトリックの神父やユダヤ教徒にも共通の悩みであり、わたくしの在学中、あるカトリック神父は神学部の正規の学生になろうとしなかった。ところが、数年後の六八—六九年度に、宗教学専攻学生は五八名に増大、六二、三年頃までは神学部の教授も学生も圧倒的にプロテスタントであったのが、現在の学生を宗教グループ別にみると、最大グループはローマ・カトリック教徒であるといわれ、第二次バチカン公会議以後のエキュメニズムの進展と神学部それ自体の変化をまざまざと感じさせられるのである。

このような目ざましい変化を神学部にもたらしたきっかけは、ポール・ティリッヒの訪日後の言動ではないかと思われる。シカゴで帰国後行った講議は、日本、すなわち非キリスト教文化圏への初めての旅が、老神学者にとってどれほど強烈な経験であったか、そしてその経験と真剣に取組むことによって自己の神学体系をより完全なものにしたいという願いを卒直に語ったものであったといわれる。これが当時の学生、ティリッヒの弟子であった教授などに大きなショックを与えたことはいうまでもない。ティリッヒがエリアーデとの合同セミナーを要望し、死の直前まで三年間それを続けたことは、シカゴのみならず、アメリカの多くの神学者にあらためて宗教学の存在と意義を認めさせるのに役立ったのである。[35] さらに、つぎつぎに英訳されたエリアーデの多くの著作、北川氏の大学内外での活躍により、宗教学科は神学部の最も有力な、魅力的な学科に変ったのである。今夏は神学部の従来の神学校型カリキュラム、必修試験制度を解体、既存七学科の壁を破り、学生の志望にそう個人差を認めたプログラムを暫定的に実施、これに平行して、神学部を聖職者教育の場とするか、宗教研究大学院に変身すべきかという根本的な議論が戦わされるということである。[36] 今秋からのコース内容は未発表であるが、人文・社会科学の隣接諸分野との提携が一層反映されることであろう。同時に現在三五〇人を越した神学部の学生数を減らし、教育の徹底をはかるといわれる。

これにたいし、ハーバードではリベラリズム時代の宗教学がいったん断絶、五九年に世界宗教研究所が神学部によって創設

され、[37] 発足したので、いまだに伝統は確立されていない。現所長 W・C・スミス（Wilfred Cantwell Smith）は前マッギル大学イスラム研究所長、カナダにおける宗教学の先覚者である。ハードードの神学部は学科制をとらず、宗教研究を十あまりの領域に分ち、各領域の関係教授より成る委員会で運営される仕組みで、従来のシカゴの制度と比較すれば、柔軟性に富んでいるといえる。しかしながら、神学部全体の中での宗教学―ハーバードでは "history of religion" と単数形にする―の重さは増加の傾向にあるが、中心的とはいえない。昨年以来、神学部学生は学内での神学部孤立状態を指摘、他学部との交流をめざして自主セミナーを組織する一方、現行プログラム再編成を要望、教授会に次のような機構改革案を提出した。それによれば、神学部は三分され、第一部門は神学、聖書学、教会史のようなキリスト教研究の一領域専攻プログラム、第二部門は「聖書と英文学」、「宗教と社会」のような主専攻と副専攻の結合プログラム、第三部門は比較宗教専攻プログラムとなる。学生の狙いは、第二部門によって人文・社会科学との関連を深め、第三部門を比較宗教として従来より宗教学を強固に確立しようということであるらしい。神学部も早速機構改革委員会を設け、検討に乗出したが、ここ一、二年間あまり変化はみられないようである。各専門分野の長老学者は自分の研究以外の分野にあまり関心を示さず、学生が問題にしている宗教研究のあり方というような一般的問題を論じる興味も用意もないというのが実情であるらしい。学生は上級生用セミナー試案を作成、題目、担当教授などの具体案を示す一方、来年度も自主セミナー続行とのことである。「ハーバードにおける宗教研究プログラムの自己批判的要素として企画した隣接科学合同セミナー」と学生の称する試案には、「諸宗教併存が社会のパターン、信仰、神学に及す影響」、「人間の宗教的表現の諸様相と相関性」などのテーマがみられ、アイデァとしては面白いが、数人の各学科の教授の出席を必要とするセミナーには、財政的、人事的困難がつきまとうことであろう。[38] ちなみに、シカゴにおいては数年前まで、ハーバードでは現在も、学部学生が宗教を専攻する制度はない。宗教はいまだに他学科から宗教教育ではないかと疑いの目で見られているのである。これが他学部と神学部の交流を難しくしている一原因ではないかと考えられる。

これにたいし、人文学部内に宗教研究科を設けたエール、プリンストン、コロンビアの場合はどのようなプログラムを持っているのであろうか。コロンビアは宗教社会学者オデ（Thomas O'Dea）を主任教授とし、他学科よりのかけもち教授とユニオン神学校の合同により、資料的にも方法的にもかなり広い宗教研究が行われるかと期待されたが、オデはカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校に去り、その後寄合世帯の弱さが現われているようだ。専攻領域は宗教史宗教学、宗教的文献、宗教哲学、宗教と社会の四つにわけられ、隣接諸学科との合同による仏教研究も加えられている。プログラムとしては神学校型を破った構成をもっている。暫くは現状維持とのことで、とくに新しい動きはなにも感じられない。

一方、エールは一七〇一年にキリスト教信仰高揚のために創立されて以来、神学部中心に発達した大学であるが、信仰と研究の分離は神学部を聖職者教育に専念させ、キリスト教学術研究のためには宗教学科を設けるに至った。現在、宗教学、聖書学、キリスト教史、キリスト教倫理、神学研究の五分野に分れ、宗教学（history of religions）は非キリスト教宗教と宗教学説などを扱っていて、全体に文献学歴史学などの伝統が強く、プログラム構成は神学校型である。学部としての粘着性が強く、順調な歩みを続けていると思われるのはプリンストンである。学生の定員が厳重に守られ、宗教専攻の大学院生は常時二十名内外といわれる。大学で宗教を教える学者の養成を旨とするこの学科は、従来七領域――旧約聖書学、新約聖書学、キリスト教史、組織神学、キリスト教倫理、宗教哲学、宗教学（history of religions とくにヒンズー教・仏教研究）に分れていた。宗教学は全学生の必修とされ、キリスト教中心主義を匡正する努力はなされていたが、内容はともかく、プログラムの構成は神学校型であった。ところが、今夏、プリンストンも改訂に踏切り、従来の七領域を宗教学（ヒンズー教、仏教、ギリシャ・ローマの宗教、アフリカの宗教、方法論）、宗教哲学、神学的倫理学、キリスト教思想・制度史の四領域に変え、今秋より実施予定である。[39] その改訂の主旨は、キリスト教中心主義を、より一般的な人間の問題の方向へと変え、必修課目制よりは学生の自由選択を一層認めるというものではないかと思われる。キリスト教倫理を神学的倫理に変えたのは、キリスト教の枠を外すとともに、神学を従来の神学校的営みにせず、社会にこの神学部でも、聖書、教会史の志願者が減少する傾向にあるといわれるが、プリンストンでは、それらの伝統的神学校的コースを、連携しているプリンストン神学校にゆだね、宗教学科の人文科学一部門としての性格を一層明確にした。これと時を同じくして、従来非西欧地域研究のほとんどを収めていたオリエント学科が、六九年七月以降、東アジア研究科（中国、日本、朝鮮）と中近東研究科に分れて成立した。これは従来の教育の西欧中心主義を多少是正した動き、東洋の地域研究の発達を表す動きと考えられるが、学生の批判的発言が促進剤になったといわれる。ちなみに、プリンストンの学部には六、七〇名の宗教専攻学生が居るといわれるが、かれらの卒業後の方向はさまざまで、決して将来の宗教学者を志しているわけではない。学部学生の宗教専攻は文学専攻と同様に考えられ、これは一般公立大学における事情と全く同じである。

以上の五大学の動向から、次のように結論できるのではないだろうか。宗教の学術的研究は神学部においても、人文科学内においても成立可能である。そのいずれにおいても、従来のプログラムはキリスト教中心であったが、最近それを打破し、広く人間の問題として捉えようとする動きがみられる。プログラム改訂に向った場合、宗教学科にはその方法、内容に関し完全な自由があるが、神学部には制約と困難がつきまとう。聖職者教育と宗教の学術的研究の分離は早晩、大学神学部の問題にな

るのではないかと思われる。

神学者の歩みより

前述のような大学、学生の動向を神学部、神学校の主流をなす神学者（広義）が傍観しているわけではない。大学の教師を会員とするアメリカ聖書学協会（National Association of Biblical Instructors）がアメリカ宗教アカデミー（American Academy of Religion）とその名称を改め、その会誌も *Journal of Bible and Religion*（1933—66）から *Journal of the American Academy of Religion*（1967— ）と改称したのは、かれらがキリスト教の枠を破り、諸宗教研究への窓を開き、キリスト教以外の宗教研究者をも会員に迎えた著しい変化を象徴する。その寄稿論文の内容を論評した編集者が、宗教学関係論文の数少いことを嘆いているのには、誠に時世の推移を感じさせられる。[40] 神学者が宗教の学術的研究振興を喜んでいることは確かであるが、現在の学生の関心も大学におけるプログラムも、明らかにキリスト教中心から次第に宗教一般へ、神学校型から人文・社会科学型へ向っていることをどのように受けとめているのであろうか。

最も劇的な変化がみられるのは、第二次バチカン公会議後のカトリック界である。カトリック系大学は創立以来宗教コース（通称カトリック教育コース）を学士号取得のための全学生必修課目としていたが、五五年頃より必修の枠を外す学校がぽつぽつみられるようになった。アメリカの現存二三〇の四年制大学中、学部で宗教を専攻できるのは一五校のみといわれ、専攻制度を設け必修の枠を外そうとする進歩派と、従来の宗教教育的コース必修制度を固守する保守派との意見の相異はいまだに調整されていない。五五年に初めて催されたカトリック大学聖教学教授会（Society of Catholic College Teachers of Sacred Doctrine）は、既存の全米カトリック教育協議会（National Catholic Educational Association）では大学の宗教研究が充分論じられないという理由で創立された。当時、会の名称について、ドミニコ会神父は「神学」という語を固守、イエズス会神父や非聖職者の教師は「宗教」の語を主張、結局トマス・アキナスの『神学大全』にみえる“sacra doctrina”の多岐な語義に両派の妥協点をみいだしてこの会の名称としたという苦心談は、その雰囲気をよく伝えている。[41] 結局、六七年に至り、それは「神学」を広義に解するという了解のもとで、カトリック大学神学教授会と改称された。

最近十年間の最大の変化は、アメリカとカナダのカトリック大学人文学部に多くの神学研究の大学院プログラムが設けられ、聖職者と平信徒が机を並べて学ぶようになったことである（非カトリック大学に学ぶカトリック聖職者がすでにそのような経験を有していたことはいうまでもなく、この人数はおそらく増加の一途を辿るであろう）。六八年よりイエズス会の神学校であるカンサス州セント・メリー大学（St. Mary's College）は、セント・ルイス大学（St. Louis University）の人文学部神学科と合同して神学校を運営、アメリカ・カトリック史上初

めて、男女共学の神学校に大学卒の聖職者志願者が学ぶことになった。このような制度上の変革は、当然教育内容の変化となって現われ、従来のローマ・カトリック教学の知識を得るための神学研究よりは、批判的精神涵養、知的、学術的研究、社会・文化と教会の研究などの導入をみることであろう。このカトリック大学の動きは、半世紀以前のプロテスタント大学のそれを想起させる。カトリック界における大学と神学校の合体にたいし、プロテスタント界では、現在、両者の分離した上での提携が望ましいと考えられている。しかしながら、最近志願者減少に悩んでいるといわれる神学校が、大学における宗教研究発達を脅威と感じることもありうる。すなわち、宗教を知的探究の主題とする場合、将来宗教を教える職につきたい場合、学生は神学校に行かず一般大学の大学院へ進むであろう。また、一般大学で宗教を学部時代に専攻した学生が神学校に入ってくると、伝統的カリキュラム、教授法には満足できず、問題を起すであろう。しかしながら、指導的立場にある神学者は、この信仰と知性の対話を健全な神学の発達に欠くことのできないものと考えている。アメリカ教会協議会 (National Council of Churches) は六七年に「大学における宗教研究の教会と神学校への意義」を論ずる会議を催し、教会、神学校、大学の神学者の前向きの姿勢を印象づけている。(42)

他方、ユダヤ教神学校は、カトリック・プロテスタント神学校より一層保守的で、改革はもとより、批判も疑いの目で見られるというが、時代の波はここにも漸く押し寄せ、問題を起し始めている。たとえば、本年五月にアメリカ・ユダヤ教会議 (American Jewish Congress) の機関紙季刊 *Judaism* 主催のシンポジアムで、アメリカ・ユダヤ文化財団会長シルバー師 (Rabbi D. J. Silver) はユダヤ教神学校の動脈硬化状態を指摘、若いラビ、学生たちの意見を反映させた。アメリカには現在三大神学校——オーソドクス派の Yeshiva University、保守派の Jewish Theological Seminary、改革派の Hebrew Union College Jewish Institute of Religion——が約四〇〇名の学生を収容しているが、それらはあまりに技術化した教育を周囲の社会から孤立して行っているといわれる。シルバー氏は宗派的教育をやめ、学生に大学で見聞を広めさせ、女性聖職者も認めるべきだという、大変急進的な提案を行った。これに多くのラビが直ちに反撃したことはいうまでもない。しかしながら、すでに再建派のラビ大学 Rabbinical College が六八年フィラデルフィアに創られ、公立大学の数少い大学院プログラムを持つテンプル大学において、学生は他宗教を研究することになっている。この他に、ケンブリッジ、ニューヨークなどに実験的共同体が教師と学生の合同運営によって営まれ、一九世紀ヨーロッパ的神学校を二〇世紀のアメリカにマッチさせる問題と取組んでいるといわれるが、大勢はいまだに判然としない。(43)

カトリック界においては、宗教を大学で教える者は「神学者」と呼ばれ、教科内容は「神学」が主であると思われるが、プロテスタント界では、最近「宗教研究者」(religionist) という名称が好んで用いられている。研究の内容、方法からいっ

て、「神学」という語は適当でないと考えられたからであろう。この一事にも神学者の歩みよりの態勢が反映している。六四年以降、ダンフォース財団の援助で始められた高等教育における宗教協会の教職者研究のためのプログラムは、自然・社会・人文科学者の宗教研究と宗教専攻者の他分野の研究援助を行っているが、多くはキリスト教学者がアジアの宗教を半年大学院で研究し、後の半年は海外旅行することに用いられているようである。この他にも、宗教研究者の内地留学、海外旅行を可能にするプログラムがいくつかあり、しみじみアメリカの学者が恵まれていることを感じさせられる。それが神学者の体質改善に役立っていることは確かである。しかしながら、一年の研究生活後大学へ戻り、世界宗教コースを担当するという人が多いのには驚かされる。

宗教研究と宗教学

アメリカの大学における宗教研究は、すでに述べたように著しく伸展したが、同時に混乱した様相を呈しているといえる。制度的には、神学校、神学部、宗教学校、宗教学科、隣接学科内での研究、関連諸学科合同委員会制、などさまざまである。カリキュラムの上でも、特定の宗教のみに限られた研究から、全宗教もしくは宗教一般の研究、歴史学的、神学的、現象学的、哲学的傾向など大変な巾の広さが認められる。その目的も教義解説から、道徳的宗教的高揚、人文・社会科学の綜合、護教、宣教など千差万別である。人事面では、宗教学者、神学者、哲学者、文献学者、人類学者、社会学者など諸分野の学者、もしくは、カトリック、プロテスタント、ユダヤ教の各教派代表、さらに、仏教徒、ヒンズー教徒、イスラム教徒を彩りに添えるという構成も稀ではない。このような現状が“religionists”によって反省され、論議され、そこから次のような意見の一致が次第に生れかけていると思われる。(44)

まず、学術的宗教研究の主題は人間の現象としての宗教である。それには信条、教義、信仰などの宗教思想、教会、儀礼、聖職制のような制度、他の文化領域との関連、神話、シンボル、信仰体制などが含まれる。第二に、このような複雑な宗教の性格は一つの方法では研究不可能であるので、歴史学、文献学、心理学、社会学など多くの関連する学問の方法が必要に応じて用いられるべきである。第三に、宗教研究が学問として成立するためには必ずしも固有の方法（メソドロジー）が必要ではないが、客観性、実証性が必要である。そして学識と共感的理解が相伴わなければならない。第四に、研究と宣教の混同は排除されなければならない。第五に、教授銓衡の規準は学識であって、その人の信仰ではない。

これらの協議事項は、現在のアメリカ宗教学界の論議の問題点を表わしており、アメリカの宗教学がいまだ啓蒙期を脱していないことを物語る。第一の点は、大学における宗教研究の目的は人間理解にあるとの原則が一般に了承されたことである。従来の宗教研究においては、この「人間」はアメリカ人もしくは欧米のキリスト教徒であったが、徐々に人類一般となること

であろう。読者は、わたくしが「学術的宗教研究」を「宗教学」と呼ばないことをいぶかしく思われることであろう。アメリカにおいて後者は前者の一部分にすぎない。「宗教学」は人類の宗教現象を研究の対象とするという前提に立つとわたくしは考えている。ところが、アメリカでは—ヨーロッパにおいても「宗教学」(history of religion(s))は主としてアジアの宗教の研究を意味する。「宗教学」のもっとも未開発な領域は、逆説的にきこえるかもしれないが、キリスト教、ユダヤ教なのである。「学術的宗教研究」のほとんどがキリスト教研究であったことはすでに述べた通りである。仏教やヒンズー教を研究するのと同じようにキリスト教を研究することが欧米の学者には大変難しいことなのであろう。宗教学が歴史的にはインドの宗教研究に発したことは周知の通りであるが、それが人間の宗教現象を研究する学であるならば、当然ユダヤ教もキリスト教もとりあげられるべきである。宗教現象学はたしかに個別宗教の境界をとりこわしたが、宗教史は通例個別宗教史に分れ、キリスト教の場合、それは教会史、あるいは神学史に化してしまう。一例としてアメリカ的というよりはむしろ国際的であるが、*Journal of the History of Religions* 創刊号から現在までの寄稿論文の内容を調べてみると、多い順にヒンズー教、ギリシャ・ローマの宗教、原始宗教、仏教、シャマニズム、神道、イスラム、キリスト教、ユダヤ教となる。このアンバランスは宗教学者の偏向または怠慢によるものであろうか。実情はおそらく、西欧における宗教研究のキリスト教中心主義を是正する役割を歴史的に果した宗教学が、キリスト教研究者と平和共存するためにキリスト教に手をつけなかったのであろう。或いは、ユダヤ教、イスラム関係論文も少数であることは、唯一神教が宗教学の苦手な領域であることを示しているのであろうか。それでは宗教学は人類の全宗教経験を研究する学問とはいえない。わたくしのハーバードでの経験では、「世界の諸宗教」のコースで最もテクストに困ったのはキリスト教である。聖書研究、中世神学史、プロテスタント・キリスト教史、ギリシャ正教史など数冊の本を部分的に学生に読ませたところで、これによってキリスト教の宗教学的理解は得られない。キリスト教内部の者には、キリスト教全体の歴史を客観的に書くこと、とくに簡潔な入門書を書くことがきわめて難しい。ギブ(H. A. R. Gibb)のイスラム史のような本を、[45]誰か非キリスト教徒が書いてくれたら——という嘆きを耳にすることはしばしばである。

第二以下の諸点は方法論の問題に帰着する。宗教現象は常にある社会・文化的脈絡(コンテクスト)の中に起り、きわめて多様であるので、それを理解するために隣接諸科学の援用が必要なことはいうまでもない。わたしたちはデータに従って方法を選ばなければならない。しかしながら、宗教学者の仕事はそこで終るのであろうか。シカゴ学派は宗教学は独自の方法をもたなければならないと主張する。すなわち、隣接諸学科を援用し、それらの結果を綜合し、宗教現象の意味を解釈するのが宗教学者の独自の仕事であるという。これは実際問題として容易なことではない。宗教学者は多数の言語を修得し、隣接諸学科の学説、方法

を心得、百科辞書的教養と綜合力をもたなければならない。それよりは分業制にして、一つの宗教伝統を専攻し、幾つかの、或は、一つの方法で切る方が手堅いし、実現可能な研究法であるとは誰しも考えるところである。したがって、シカゴ学派の主張は理想論とされ、大勢に受けいれられるに至らないのである。ハーバードのW・C・スミスの主張する宗教的研究法も、宗教学者独自の解釈を目指す点ではシカゴの主張と同じである。[46] 宗教研究を関連諸学科合同委員会によって運営したり、隣接学科内で実現しうると考える人、或いは宗教研究を客観的にするためには、各教派代表、各学科代表より成る宗教学科を作ればよいと考える人は、宗教学の独自性や独自な方法の可能性を考えないであろう。そのような大勢の具体的な現われは、最近、「動物園」型、[47]「博物館」型と呼ばれ、批判の対象にされている教授陳構成である。すなわち、プロテスタント神学者、カトリック神父、ユダヤ教ラビを常任に、さらに予算が許せばヒンズー教徒、イスラム教徒、仏教徒研究者もしくは宗教家を招き、各各の宗教、信仰について語らせるという。現在各地で大流行の方式である。最近は、アフロ・アメリカ研究は黒人教授でなければ指導できないという黒人学生の主張のため、黒人でなんらかの高学位を有する人のスカウト合戦はたけなわで、それらの異色ある教授やゲストは大学のリベラリズムの看板になるのである。しかしながら、それだけでこれまでの学問の西欧中心、もしくは白人中心主義が是正されたとはいえない。宗教学の歴史を振返ってみると、このような風潮はアメリカの伝統に根ざしていることがわかる。北川氏が指摘したように、万国宗教大会の影響はいまだに跡をひき、宗教家と宗教研究者、宗教学者のイメージは重っている。それに加えて、宗教現象の共感的理解、感情移入の必要の強調、学生の実存的問題意識などは、易に凝ったり、ヨガの実践、菜食主義、マロワナなどによる神秘体験などを「東洋思想」、「世界諸宗教」コースの副産物として生み出したのである。少くとも宗教研究者と自称する人々は、このような誤解を是正しなければならないことを、今意識し始めている。

　このようなアメリカと、一層護教的アジアの傾向が国際宗教学会議でヨーロッパ宗教学者の批判するところとなり、ウエルブロウスキー(R. J. Zwi Werblowsky)は六〇年のマーブルクにおける国際学会について、特定の宗教や学者の善意や精神的献身を証するようなペイパーが多いが、[48] それらは国際宗教家会議で読まれるべきであると述べている。六五年のクレアモント会議でアメリカ側が「独立宣言」を行ったのは、このようなヨーロッパ側の批判に対する反撥、国際学会のヨーロッパ中心主義への抵抗であったと思われる。国際宗教学会を地域別グループにわけ、それらにより大きな自律性をもたせる、国際会議の現執行部の権限を総会に移す、などのアメリカ提案はクレアモントでは否認され、その後、ヨーロッパ側はヨーロッパとアメリカの間の方法論的相異を否定したといわれる。アメリカ宗教学会は来年のストックホルムでの国際会議において、再び機構改革案を提出する予定といわれ、その成否はわが国の宗教学会の

進退にかかっているのではないかと思われる。

以上のようなアメリカ宗教学界の問題は、それらをアメリカ学界全体の中においてみると、一層はっきりする。アメリカの大学がそのモデルをヨーロッパの大学に仰いできたことは歴史的事実である。わたしたちの目には、実践的要求に敏速に対応し、改革に暇ないかのごとく映るアメリカの大学も、激動する現代社会にややもすれば遅れがちとなった。黒人学生は大学が大都市のスラム街の問題に取組まないのを責めるが、わたくしのいいたいのは、これとは多少違った意味である。大学が身近な環境、学生の悩んでいる問題を無視するのは誤っている。しかしながら、大学は近視眼的になってはならない。その好例は歴史教育である。アメリカの社会科における郷土研究重視はきいていたが、カレジの学生に接して初めて気附いたのは、かれらが世界史を知らないことである。アジアの歴史はいうに及ばず、ヨーロッパの歴史でさえ、とくに中世はおぼろげにしか知らない。現在の社会の問題、世界の問題を歴史的に考察するための基礎となる知識や訓練は与えられていないのである。このような一般的風土において、宗教学者の主張が特殊視されるのは、火を見るより明らかである。これにたいし、シカゴ学派がどのようにその主張を滲透させることができるかは、今後の問題である。現在アメリカに、シカゴに対抗する主張を持つグループはみあたらない。教授の移動が激しいアメリカの大学では、特色ある学風が育ちにくいが、シカゴの今日の伝統を築いたのは、ワッハの弟子、北川、ロング(Charles Long)がその学燈を守り、エリアーデを迎え、チーム・ワークのよさをみせたからであろう。最近相ついて、ハーバードからベラ(Robert Bellah)、コロンビアからオデがカリフォルニア大学へ去り、宗教社会学のメッカは西海岸ということになりそうである。社会科学者のあいだでも、これまでの宗教研究法を反省し、各領域の専門家を招いて改善策を論じる会議が催されているという。例えば、今春、アメリカ学術会議社会科学部門日本部会が主催した「前近代日本歴史・宗教研究にかんする会議」には、日本を研究する歴史学者、仏教学者、宗教学者などが招かれ、アメリカと日本における研究現状、業績、傾向、盲点などを論じ、宗教研究について活潑な意見交換が行なわれた。(49)

今秋ボストンで同時に開催されるアメリカ宗教アカデミー学会と科学的宗教研究学会は、神学者グループと行動科学者グループの宗教研究における歩みよりという新たな態勢を生み出すのではないかと思われ、わたくしはひそかに心待ちしているのである。(一九六九年六月記)

後注

(1) 『宗教研究』三二巻、一五八、一五九号、一九五九年。

(2) 岸本英夫監訳『宗教学入門』東大出版会、一九六二年、一―四六ページ。(M. Eliade & J.M. Kitagawa, ed., *History of Religions-Essays in Methodology*, University of Chicago Press, 1959)

(3) 堀一郎監訳 『現代の宗教学』東大出版会、近刊予定 (J.M. Kitagawa, ed., *History of Religions-Essays*

on the Problem of Understanding, University of Chicago Press., 1967)

(4) E. R. Goodenough, "Religionswissenschaft," *American Council of Learned Societies: Newsletter*, X, 6 (1959), pp. 5-19; *Numen*, VI, 2 (1959), pp. 77-95

(5) Huston Smith, "The Interdepartmental Approach to Religious Studies," *Journal of Higher Education*, XXXI, 2 (1960), p. 61. "That liberal education cannot rightfully claim its name if it omits the study of religion is a point of view which has become almost universally reaccepted in the United States."

(6) J. M. Kitagawa, "The Making of a Historian of Religions," *Journal of the American Academy of Religion*, XXXVI, 3 (1968), pp. 191-202.

(7) Robert Michaelsen, "The Study of Religion: A Quiet Revolution in American Universities," *Journal of Higher Education*, XXXVII, 4 (1966), pp. 181-186; M. D. McLean, ed., *Religious Studies in Public Universities*, Southern Illinois University, 1967, pp. 9-14.

(8) これは本年五月に、全米の無作意抽出五十校について行われたインタビュー調査結果による。

(9) 同右。

(10) この分野ですでに古典となったものに、Joseph R. Washington, *Black Religion*, Beacon Press, Boston, 1964; C. Eric Lincoln, *The Black Muslims in America*, Beacon Press, Boston, 1961 最も戦闘的な最近作に、James H. Cone, *Black Theology and Black Power* がある。

(11) *The Time Magazine*, June 6, 1969, pp. 56-61 参照。

(12) Robert Michaelsen, *The Study of Religion in American Universities*, Society for Religion in Higher Education, New Haven, 1965, pp. 56-58

(13) Andrew M. Greeley, "There's a New-Time Religion on Campus," *The New York Times Magazine*, June 1, 1969, p. 14.

(14) Michaelsen 前掲書、一〇六—一一四ページ。

(15) 同、七七—八〇ページ。

(16) Lyman H. Legters, "The Place of Religion in Foreign Area Studies," *Journal of the American Academy of Relgion*, XXXV, 2 (1967), pp. 159-164.

(17) Arnold J. Band, "Jewish Studies in American Liberal Colleges and Universities," *American Jewish Year Book*, 1966, pp. 3-30.

(18) Henry E. Allen, ed., *Religion in the State University: An Initial Explosion*, Burges Publishing Co., Minneapolis, 1950.

(19) Eric A. Walter, ed., *Religion and the State Uni-*

versity, University of Michigan Press, Ann Arbor, 1958.

(20) Charles Foster Kent 元エール大学新訳聖書学教授，一九一三年に National Council on Religion in Higher Education を創立，その奨学生は Kent Fellows と呼ばれた。

(21) William H. Danforth 創立のダンフォース財団が五一年より始めた制度，奨学生は Danforth Fellows と呼ばれる。

(22) ***A Report on An Invitational Conference on the Study of Religion in the State University***, Society for Religion in Higher Education, New Haven, 1965.

(23) M. D. McLean 前掲書

(24) 同，六一—六四ページ参照。宗教の専攻が行われる学科について次のような結果が得られる。

調査対象校＼学科名	宗教学科	宗教哲学科	関連学科合同委員会制	隣接学科（歴史，社会学，他）	計	調査校数	%
大学院・学部	19	5	4	4	32	90	35
学部のみ	2	5	0	1	8	45	18
計	21	10	4	5	40	135	30

(25) Robert A. Spivey, "Modest Messiahs: The Study of Religion in State Universities," ***Religious Education***, LXIII, Jan.-Feb. (1968), pp. 5-12.

(26) 最近宗教研究プログラムの拡張，学科新設を行った諸大学についてみると——

大学	学生数 (1965)	学生数 (1966)
University of California at Santa Barbara	9,253	11,245
Florida State University	12,456	14,308
University of Illinois（宗教・哲学科）	34,781	42,301
Indiana University（宗教・哲学科）	30,977	44,651
University of Iowa	16,355	17,755
Michigan State University	33,357	41,474
Western Michigan University（学部のみ）	13,551	16,470
Pennsylvania State University	21,341	32,234
University of Tennessee at Knoxville	12,557	26,589
University of Virginia	8,443	9,594

（Western Michigan University 以外はすべて大学院プログラムを有し，イリノイ，インディアナ以外はすべて宗教学科を設けている）

学生数は ***American Universities & Colleges***, American Council of Education, Washington D. C., 1968 による。

(27) Robert Michaelsen, "Religion and Academia," *Theological Education*, Ⅲ, 3 (Spring 1967), p. 373.

(28) "Canadian Society for the Study of Religion: Annual Proceedings, 1968" 未出版。

(29) C. P. Anderson, "The Current State of Religious Studies in Canada," 前掲カナダ学会会報に収録。

(30) C. P. Anderson & T. A. Nosanchuk, ed., *The 1967 Guide to Religious Studies in Canada*, University of British Columbia, Vancouver, 1967. 現在六九年度版作成中、八月完成予定。

(31) 岸本英夫『宗教学』大明堂、一九六一年、一ページ。

(32) R. Michaelsen, *The Study of Religion in American Universities.*

(33) 一九六六年の五大学の学生数は次のようである。

大学	全学生数	(学部学生・大学院学生)
Princeton University	4,738	(3,228 : 1,510)
Yale University	8,454	(4,080 : 4,360)
Columbia University	17,377	(5,885 : 9,242)
Harvard University	13,909	(4,850 : 9,059)
University of Chicago	8,110	(2,496 : 5,614)

American Universities and Colleges による。

(34) Jerald C. Brauer, "General Editor's Preface," *History of Religions: Essays on the Problem of Understanding*, p. viii

(35) Paul Tillich, *Christianity and the Encounter of the World Religions*, Columbia University Press, New York, 1963
Mircea Eliade, "Paul Tillich and the History of Religions"; Paul Tillich, "The Significance of the History of Religions for the Systematic Theologians," *The Future of Religions*, by Paul Tillich, Harper & Row, New York, 1966

(36) "A Brief Prepared for Faculty and Students," April 30, 1969, (Divinity School, University of Chicago) 非刊行物。

(37) 実際に制度化したのは五九年で、現存施設の完成は六一年といわれる。

(38) "Proposal for consideration for the caucus of graduate students in the Study of Religion" Spring, 1969 (Divinity School, Harvard University) 非刊行物。

(39) "Graduate Program," Department of Religion, Princeton University, 1969 未発表委員会草案による。

(40) "Editor's Preface," *Journal of the American Academy of Religion*, XXXIV, 1, 1966.

(41) Gerald S. Sloyan, "Religious Studies in Roman Catholic Colleges and Universities," *Theological Education*, Ⅲ, 3 (1967), p. 377.

(42) *Theological Education*, Ⅲ, 3 (1967).

(43) Edward B. Fiske, "Religion-New Challenge to Jewish Seminaries," *The New York Times*, June 1, 1969, p. 9.

(44) Karl D. Hartzell, "Review of the Discussions," *The Study of Religion on the Campus of Today*, Association of American Colleges, Washington, D. C., 1967.

(45) H. A. R. Gibb, *Mohammedanism*, Oxford University Press, New York & London 1949.

(46) W. C. Smith, "Non-Western Studies: The Religious Approach," *A Report on an Invitational Conference on the Study of Religion in the State University*, pp. 50-62.

(47) E. Thomas Lawson, "A Rationale for a Department of Religion in a Public University," M. D. McLean 前掲書, 三八—四四ページ。

(48) R. J. Zwi Werblowsky, "Marburg-and After?" *Numen*, Ⅷ, 2-3 (1960), p. 217

(49) "Confernce Report," American Council of Learned Societies, Social Science Research Council, Joint Committee on Japanese Studies, April 18-19, 1969.

追　記

展望執筆にあたり，非刊行物などの資料を快よく提供していただいた次の方々に紙面をかりて感謝の意を表したい。なお，資料蒐集の必要経費は Radcliffe Institute の援助によるものである。

C. P. Anderson, University of British Columbia, Canada
Philip H. Ashby, Princeton University
Nancy Falk & E. Thomas Lawson, Western Michigan University
Joseph M. Kitagawa, University of Chicago
W. C. Smith, Harvard University

アメリカにおけるイスラム学の動向

中村広治郎

(1)

アメリカ（合衆国及びカナダ）におけるイスラム研究の動向を論ずるにあたって、まず筆者の念頭に浮ぶ疑問は、一体アメリカ独自のイスラム研究というものが成り立ち得るだろうか、ということである。つまり、これまで、アメリカにおけるイスラム研究を支えてきた者は、その大半が、ヨーロッパからの移住者であったし、このことは今日においても大して変らない。約十年前、或る人が推定したところによると、当時イスラム学者の三分の二以上は外国人だといわれる。[1] 筆者の在籍するハーバード大学で、今日何らかの形でイスラム研究に関係している教官のうち、何とその四分の三が外国人、またはヨーロッパで学位をとってきたアメリカ人である。さらに今では、会議・講演・講義・その他のために大西洋を往来するのは誠に簡単だし、[2] ヨーロッパとアメリカの学者間の交流は、われわれが想像する以上に盛んである。このような事情を考えると、アメリカのイスラム学の動向を論ずることに果して意味があるだろうか、ということである。

思うに、学者の移住・招聘・交流が盛んであるとすれば、アメリカにそれを促すものがあるということではなかろうか。このような要求、あるいは刺戟が研究体制・教育制度を生み出し、これがその国の文化的伝統というプリズムを通して、学者の学的関心に反作用し、研究を方向づける。その際、その研究がイスラムと直接「関係がある」か否かはさほど問題ではない。「実用」・「非実用」を問わず、その両者を含めた巾広い研究体制・成果があってはじめて本来のイスラム研究が成り立ち得る。このような過程の中で、アメリカ独自のイスラム研究が生まれてくるものであろう。したがって本稿では、まず、主としてアメリカにおけるイスラム研究の制度的背景を歴史的にたどることにし、研究そのものの批判的紹介は別の機会にゆずることにしたい。

註(1)　R. B. Winder, "Arabic and Islamic Studies in the United States," *Middle East Forum*, 31 (1956), p. 22.

(2)　一例をあげると、一昨年度(一九六七―六八)から、ハーバード大学の Center for Middle Eastern Studies の中に地域研究 (Regional studies) の一つのコースとして、"A Colloquium on Tradition and Change in the Middle East" が設けられたが、これには、アメリカは云うに及ばず、世界各地から、わずか一、二時間の講義をするために、多くの著名なイスラム学者が招待さ

れた。例えば、J. N. D. Anderson（イギリス）、A. Bausani（イタリア）、J. Brugman（オランダ）、M. Gilsenan（イギリス）、M. Rodinson（フランス）など。

(11)

アメリカのイスラム研究は、ヨーロッパに比べて約半世紀遅れて出発した。聖書解釈学としてのヘブライ語学は早くからあっても不思議はないが[1]、広い視野に立った比較セム学・文献学（Semitic studies）がアメリカで成立したのは一八八〇年代で、その頃、ハーバード、シカゴ、エール、シンシナティ、ペンシルベニア、コロンビア、ジョンズ・ホプキンス、カナダのマックギル、トロントなどの古い大学が、そのための講座や学科を設け始めた[2]。したがって、アメリカでアラビア語が一般に教えられ出したのは、もう少し後になってからである。一八八八年にセム学者の W. Pepper が「アメリカ東洋学会」（American Oriental Society）の会員を前にして語ったところによると、一八八〇年頃ハーバード大学のある学生がアラビア語関係の学位論文を提出した時、それを審査する資格のある教官が見当らず、やむなく「全国で唯一のアラビア語の教師」であったエール大学の Salisbury 教授に送らねばならなかったとのことである[3]。

一八八〇年といえば、フランスでは、近代イスラム学のパイオニアといわれる A. I. Silvestre de Sacy (1758—1838) が世を去ってからすでに約半世紀たっており、ドイツでは、T. Nöldeke (1836—1930) の *Geschichte des Qorâns* の初版 (1859) がもう出ており、A. von Kremer (1828—1889) の *Geschichte der herrschenden Ideen des Islams* (1868) が世に問われ、F. Wüstenfeld (1808—1899)、G. Flügel (1802—1870)、J. Wellhausen (1844—1918) などによる重要なアラビア語の写本の研究・校訂・出版の活動はもう始められている。イギリスでは、G. Sale (1697?—1736) がコーランの英訳 (1734) を世に出してからは既に久しいし、W. Muir (1819—1905) の *Life of Mahomet* (2vols., 1858—61) も出版され、W. E. Lane (1801—1876) の *An Arabic-English Lexicon* (1863—) が出始めた頃であり、インドのカルカッタではイギリス人の手によって重要なアラビア語のテキストの校訂・出版が開始されていた。また一方、アメリカ国内でも、サンスクリット研究の方は、ギリシャ・ラテンの古典文献学との密な関係から、すでにそうとう早くから始っていた[4]。

それでも、一八九六年までには、シカゴ、シンシナティ、コロンビア、ハーバード、ジョンズ・ホプキンス、ミシガン、ミネソタ、ペンシルベニア、プリンストンなどの大学で、一応アラビア語が教えられるようになっていたという[5]。このことは、必ずしも、アラビア語がそれ独自のために、あるいはイスラム研究のための重要な手段として、したがって初級から上級まで一貫して教えられていたことを意味しない。むしろ、聖書学の一分野としての古代近東史の考古学的研究の手段及び同一セム語族の一つとしてセム語文献学の一補助手段とみなされ、

しかも現実に生きた言葉としてではなく、古代エジプト語、アッカド語などと同じく一つの「死語」として取り扱われ、その発音についてはまったく考慮が払われなかった。したがって、教える方もアラビア語の専門家が教えたわけではなく、他のセム語の教官がかけもちで教えていたにすぎない。例えば、ハーバード大学では、先に述べたように、例の論文審査事件の直後、一八八〇年に Semitic Languages 学科が設立され、C. H. Toy が教授として迎えられ、ヘブライ語、アラム語の他にアラビア語を教えることになった。しかし同学科内にはじめてアラビア語専門の教師として J. R. Jewett が任命されたのは一九一一年のことで、一九三六年になってようやくアラビア語の講座（chair）が、Jewett 自身の二一万ドルにのぼる多額の寄贈によって、しかもアメリカの大学では最初の試みとして、設けられた。[6] しかもその間、一八八九年に設立されたハーバードの Semitic Museum には、発堀・調査の結果として多数のメソポタミアの楔形文書が集められ、その方の研究はさらに一歩進められた。[7] プリンストンでも、一八九〇年にはじめて、ヘブライ語学の一選択科目として「特にシリア語、アラビア語、アッシリア語を中心とする比較セム語研究」が設けられ、講師に考古学の教授が任命された。[8] シカゴ大学でも、単なるヘブライ語学から、さらにセム語学・聖書考古学へと研究の範囲が拡げられ、一九一九年には、全国に先がけて純粋な聖書考古学研究所としての Oriental Institute が設置された。[9] 同じような傾向は、エール、コロンビア、ミシガン、ペンシルベニアなどの上述の他の大学についても云える。[10]

このような情勢の中で、アラビア語をはじめイスラム研究そのものへの関心が少かったとしても別に不思議ではない。一九二二年の「アメリカ東洋学会」の年期総会での会長就任講演で、セム学者、N. Schmidt はヨーロッパ及びアメリカにおける東洋学の動向について語りながら、イスラム及びアメリカにおけるイスラム研究については一言も触れなかったし、さらにくだって一九三八年の同会の会長就任講演では、同じくセム学者の Waterman は、「現代世界像における東洋研究」について語りながら、「イスラム」あるいは「アラビア語」という言葉すら使わなかった。[11] つまり、大体一九三〇年代までのアメリカのイスラム学ないしはアラビア語学は、（旧約）聖書学を中心とするセム学の一部として、またその一補助手段として、関心がもたれたにすぎず、したがって従属的な位置しか与えられなかった。

他方、別の面からアメリカと中近東との関係についてみると、両者の関係は相当古くまでさかのぼることができる。まず一八二〇年には、American Board of Commissioners for Foreign Missions が結成されて[12]海外伝道活動が統一され、この頃からアメリカのキリスト教の海外伝道師達は中近東で活動を始める。彼らの教育・宣教活動の成果は、中東各地での学校の設立となって現われた。[13] これらの活動が、西洋文化を紹介し、またアラブの民族的文化的自覚をよびさまし、さらに近代アラブ文学の復興に果した役割は小さくない。[14] また十九世紀の中頃に

は、J. L. Stephens, J. G. Whittier, W. C. Bryant, H. Merville, W. Irving などの作家・旅行家が中近東地域を訪れ、それについて書き、語り、この地域への関心を高めた。[15] しかし、これら宣教師や旅行家の活動が直接イスラム研究とは結びつかなかった。思うに、当時の宣教師は、「神の言葉」を伝えることに忙しすぎたし、また旅行者にとっては、中近東は単なる異国趣味及びロマンチシズムの対象以上のものではなかった。[16]

他方、同じく、十九世紀中頃から、アメリカ大陸へのアラブの移民が始った。[17] 世紀末にはその数、数千。第一次世界大戦直前には、年間約九千人が移住したと云われ、一九五八年現在でその総数四五万と云われる。これらの大多数は、オスマン帝国内での迫害を逃れて新大陸にやって来たパレスチナのキリスト教徒である。しかもアメリカでは、その大部分が小売商人・職人として出発しなければならず、二世、三世になって初めて弁護士・医者などの自由業に就けるようになった程度で、この方からのイスラム研究への刺戟は皆無と云ってよい。

では最後に、政治的・経済的関心の方はどうであろうか。十九世紀末から二〇世紀初めは、イギリス、フランスなどのヨーロッパ列強がこの地域で植民地支配を着々と確立した時代であるが、その頃アメリカは、「孤立主義」（モンロー・ドクトリン）に立って国内建設に忙しかったし、またアメリカがその地域に政治・外交的に入り込む余地はなかった。むしろ、アメリカがこの地域に直接的利害関係をもっていなかったが故に、第一次世界戦中（一九一五年）、Near East Relief Society を結成して、オスマン帝国内の少数難民族の救済に乗り出したり、また大戦後には、大統領ウイルソンの特命をうけて King-Crane Mission がパレスチナに派遣され、アラブ＝ユダヤ人問題の調査にあたったりした。こうして少くとも一九三九年までは、アメリカは中立の立場にたって振舞うことができた。[18] アメリカが後に述べるように、この地域の政治・経済に完全にコミットするのは、第二次世界大戦後のことである。したがって、この方面からもまた、イスラム研究を刺戟し促進するものは、それまでに何もなかったと云ってよい。

註（1）例えば、十七世紀初めに創設されたハーバード大学（当時カレッジ）では、草創者達は「教会に無学の牧師を残すのを恐れて」、ヘブライ語の研究には大きな関心が払われたとある（*Supplement to the General Announcement: Higher Degrees in Near Eastern Languages and Literatures, Harvard University.* [1968—69], p. 1）。

（2）*Semitic Studies in America: Addresses made at a Reception tendered by William Pepper, Provost of the University of Pennsylvania, to the Members of the American Oriental Society, October 31, 1888*, p. 3.

（3）なお、当時のハーバードの学長は、そのようなことが二度と起ってはならないとして Semitic Languages 学

科を設立したという。一八八〇年のことである（Ibid., p. 6）。

(4) Ibid., p. 2. ちなみに、「アメリカ東洋学会」が創設されたのが一八四二年。

(5) Labib Zuwiyya-Yamak, "Introduction" to *Catalogue of Arabic, Persian and Ottoman Turkish Books* (5 vols., Harvard University Library, Cambridge, 1968), p. vii.

(6) *Supplement*（前出）, p. 1.

(7) Ibid.

(8) P. K. Hitti, "Arabic and Islamic Studies in Princeton University," *The Moslem World*, 31 (1941), no. 3, p. 292.

(9) L. Zuwiyya-Yamak, ibid., p. vii. このような関心の推移は、同大学の刊行する雑誌のタイトルの変化に見ることができる。すなわち、一八八四年に創刊された *Hebraica* は、一八九六年には *The American Journal of Semitic Languages* に変り、これが一九四二年にはさらに *Journal of Near Eastern Studies* へと変わって今日に至る。

(10) 例えば、一九〇七年に創立されたドロプシー・カレッジは、正式には The Dropsie College for Hebrew and Cognate Learning という（*Register of the Dropsie College*, 1968—69, p. 14）。

(11) P. K. Hitti, "America and the Arab Heritage," *The Arab Heritage* (ed. N. A. Faris, Princeton University Press, New Jersey, 1944), p. 13.

(12) F. C. Mattison, *A Survey of American Interests in the Middle East* (The Middle East Institute, Washington, D. C., 1953), pp. 79—80.

(13) 例えば、イスタンブールの Robert College (1863), ベイルートの American University of Beirut (1866) 及び少し時代はくだるがカイロの American University at Cairo (1920) などは、高等教育機関としてはその主なものである。

(14) G. Antonius, *The Arab Awakening* (London, 1946) 参照。

(15) これら「バイオニア」の活動については、D. H. Finnie, *Pioneers East: the Early American Experience in the Middle East* (Harvard University Press, Cambridge, 1967) 参照。すでに南北戦争（一八六一—一八六五）当時、エジプトを訪れたアメリカ人の数は五〇〇に達したといわれる（Ibid., p. 166）。

(16) とはいえ、このような趨勢の中で、十九世紀末、Hartford Theological Seminary（今の Hartford Seminary Foundation の前身）が、当時少壮のイスラム学者 D. B. Macdonald をイギリスから招聘して教育・研究活動にあたらせ、宣教の一助とするまでに至ったことは否めない

(W. D. Mackenzie, "Dunkan Black Macdonald: Scholar, Teacher, and Author," *The Macdonald Presentation Volume*, Princeton University Press, New Jersey, 1933, pp. 3—9 参照)。

(17) これについては、M. Berger, "Americans from the Arab World," *The World of Islam: Studies in honour of Philip K. Hitti* (ed. J. Kritzek & R. B. Winder: Macmillan, London, 1959), pp. 351—372 参照。

(18) N. M. Efimenco, "American Impact upon Middle East Leadership," *Political Science Quarterly*, 69 (1954), pp. 202—18.

(III)

アメリカのイスラム研究は、一九三〇年代に、徐々にではあるが、新しい段階に入る。それまでセム学の中でわずかに従属的な位置しか与えられていなかったイスラム学及びアラビア語研究は、アラビア語講座の新設、あるいはセム学科内のポストにアラビア語専門家の任命という形で、他のセム語研究から段々に独立してくる。先にみたように、ハーバードでは一九一一年に、アラビア語学者の J. R. Jewett が任命され、一九三六年になってアラビア語の講座がはじめて設けられた。この後、プリンストン、コロンビア、ペンシルベニアの諸大学でも、セム学のポストがいずれもアラビア語の専門家により占められた。(1)

プリンストンの場合、(2) 一九〇一年にドイツから若い学者 E. Littmann が東洋学科司書及びセム語文献学講師として招かれ、アラビア語の教授にあたったし、一九一〇年には、同じくドイツからアラビア語学者 R. Brünnow が招かれ、セム語文献学の講座を七年間担当し、アラビ語とアッシリア学について教えた。その後十年間アラビア語学は中断するが、一九二七年には Oriental Languages and Literatures 学科が創設され、セム語の一専門分野として、特別にアラビア語及びイスラム研究が重視されるようになってきた。さらに十二年後の一九三九年には、これにペルシア語とトルコ語が加えられることになる。また、「アメリカ学術会議」(American Council of Learned Societies) の後援で、一九三五年、一九三八年、一九四一年とアラビア語及びイスラム研究に関する夏期セミナーが開かれ、毎回約三〇人の関係学者の出席を得たのも、このプリンストンであった。このようにして、プリンストンでは、早くも学部内の改革を通じて、戦後の動きを予想した地域研究体制へと一歩踏み出していた。(3)

この他、一九三五年には、全国で最初の試みとして、ミシガン大学にイスラム美術の講座が新設され、一九三八年にはアメリカの「国会図書館」(The Library of Congress) にイスラム考古学及び美術のための顧問が任命され、一九四〇年には「アメリカ東洋学会」の年期総会の部会の一つに、はじめてイスラム部門が設けられるまでに発展した。(4)

イスラム関係の文献の蒐集という点についてみると、(5) すでに

前世紀末から多少の努力は続けられていた。New York Public Library のアスター・コレクションには七〇冊以上のアラビア語の蔵書があり、その後の発展の土台となった。[6] 一八七〇年には、E. E. Salisbury のアラビア語の全蔵書がそっくりエール大学におさめられ、世紀末にはハートフォードが D. B. Macdonald の尽力で、ケーニヒスベルクの A. Müller の蔵書を取得した。しかし何といっても第二次大戦前における最大のコレクションはプリンストンにおいてなされた。すなわち、Robert Garrett がその数五〇〇〇点にのぼるといわれるアラビア語の写本のコレクションを寄贈したし、一九三八年になって、その目録の作成、出版が P. K. Hitti, N. A. Faris らの手によって開始された。その翌年には、ペルシア語、トルコ語関係の目録が出版され、[7] これら写本の校訂、出版もぽつぽつ現われ始めた。さらに一九四二年には、その写本の数六〇〇〇点といわれるヤフダ・コレクションが同じくプリンストンにおさめられた。この他には、三年後の一九四五年に、カイロのアズハル大学の Shaykh al-Mansuri の約五〇〇〇冊に及ぶアラビア語の文献が「国会図書館」におさめられた。このようにして、徐々にではあるが、イスラム研究の基礎体制は整えられつつあった。

しかし、このイスラム研究も、アラビア語文学及び初期イスラムの文献学的研究が中心で、現代への関心はうすかった。[8] 仮りに現代の中近東への関心が払われたにしても、それは「聖地」として、また何千年もの歴史を秘めた考古学的宝庫としてみなされた程度で、そこに住む人々の文化・社会に関心があったわけではない。第一次世界大戦後一時高まった中近東への現代的関心に対して、一九一八年、「アメリカ東洋学会」会長就任講演で C. C. Torrey は「アメリカの東洋学展望」の中でこう語った。

「古代の言語、あるいは歴史の研究の中にこそ、現代のそれよりもはるかに大きな、文明を前進せしめ、広める力がある。このことは一般的に真実である。というのは、より大きい時間的な展望こそ、より重要な要素なのである。偉大なる古代をかい間見ること程有効な教育的影響力はない。他の様々な理由の中でこれこそが、大学のカリキュラムの中で、（ギリシア・ラテンの）古代古典文学が決して現代の言語、文学にとって代られ得ない一つの理由である。[9]」

そこには、現代とは何ら研究するに値しないものだという態度がよくうかがわれる。このようないわば「実用主義」に、アメリカ人がヨーロッパからもち込んできたイスラムに対する偏見・人種的優越感が加わり、非ヨーロッパ・非アメリカ的なもの、なかんずくイスラムを研究するということは一つの屈辱を意味した。このような偏見を打破することにこそ、イスラム研究の意義があるのだが、アメリカの古い大学の大部分が私立で、財政援助を連邦・州政府に期待することができず、学科・講座の新設に要する費用は専ら民間人の寄附に頼らねばならないのが現状だとすれば、その間の事情がわかるであろう。これ

に加えて、アラビア語習得に伴う誇張された困難さ、また学部以上の高等教育はヨーロッパに依存するという慣習からくるアカデミズムの伝統の欠除、これにさらに前述の経済的政治的関心の欠除、地理的距離などの要因が加って、アメリカのイスラム研究はその正常な発展が阻害された。

したがって、一九四〇年に行われた「アメリカ東洋学会」の委員会による調査報告にみられるように、ハートフォード、ドロプシーなどのセミナリーやカレッジを除いて、アメリカ全国でアラビア語コースのある大学は、カルフォルニア、アメリカ・カトリック大学、シカゴ、コロンビア、ハーバード、ジョンズ・ホプキンス、ミシガン、ペシルベニア、プリンストン、エールの十校のみ、とあっても不思議ではない。[10] これが、アラビア語についてイスラム研究にとって欠かすことのできないペルシア語、トルコ語の場合はどうであろうか。一九三七年の「アメリカ学術会議」の委員会の報告によれば、それまでにアメリカで、ペルシア語、トルコ語の研究にふさわしい教育機関はどこにも無かったといわれている。[11]

註(1) P. K. Hitti, "America and the Arab Heritage," ibid., p. 18.

(2) P. K. Hitti, "Arabic and Islamic Studies in Princeton University," ibid., pp. 292—94 参照。

(3) このような動きの中で、コロンビア大学の Gotteil の下で学位をとり、一九二六年にプリンストンに赴任してきた、レバノンのキリスト教徒、P. K. Hitti 及びイラン史の T. C. Young の果した教育的行政的役割は大きい。P. K. Hitti については、〔J. Kritzeck & R. B. Winder〕, "P. K. Hitti," (J. Kritzeck & R. B. Winder (ed.), ibid., pp. 1—9) T. C. Young については、W. C. Smith, *Orientalism and Truth: A Public Lecture in honour of T. Cuyler Young, Princeton University, May 9, 1969* (mimeographed) をそれぞれ参照。

(4) P. K. Hitti, "America and the Arab Heritage," ibid., p. 18.

(5) L. Zuwiyya-Yamak, "Introduction" (ibid.) 参照。

(6) 一九五四年現在でその数五〇〇〇に達したといわれる。

(7) P. K. Hitti, N. A. Faris & Butrus 'Abd al-Malik, *Descriptive Catalog of the Garrett Collection of Arabic Manuscripts in the Princeton University Library*, Princeton University Press, New Jersey, 1938.

P. K. Hitti, M. E. Moghadam & Y. Armajani, *Descriptive Catalog of the Garrett Collection of Persian, Turkish, and Indic Manuscripts Including Some Miniatures in the Princeton University Library*, Princeton University Press, New Jersey, 1939.

(8) D. C. Macdonald' P. K. Hitti の他に、主なアメリカのイスラム学者の名前をあげると、バビルス写本及び初

期イスラムの研究家であるシカゴの N. Abbott、ハートフォードの E. E. Calverley、N. A. Faris、コーラン研究に新しい方向を開きつつあったコロンビアの A. Jeffery、ハーバードの J. R. Jewett 及び W. Thomson、イブン・ハズムの *The Dove's Neckling* (1917) の英訳者 A. R. Nykl、科学史家で、その著 *Introduction to the History of Science* (3 vols., 1927—48) の中で、イスラム科学史について画期的な業績を残した G. Sarton、この他ユニークなものとして、*The Shi'ite Religion* (1933) の著者 D. M. Donaldson、*The Bektashi Order of Dervishes* (1937) の著者 J. K. Birge などがいる。

(9) C. C. Torrey, "The Outlook for American Oriental Studies," *Journal of American Oriental Society*, 38 (1918), p. 111.

(10) P. K. Hitti, "America and the Arab Heritage," ibid., p. 16.

(11) Ibid., pp. 18—19. これが、十年たった一九五一年の調査では、上級アラビア語を教える大学が二校（ペンシルベニア、プリンストン）、アラビア語についていくつかのコースをもつ大学が五校（シカゴ、コロンビア、ドロプシー、ジョンズ・ホプキンス、ハーバード）、上級トルコ語を教える大学が二校（ジョージタウン、プリンストン）、トルコ語についていくつかのコースをもつものが一校（ハーバード）、ペルシア語を教える大学が五校（シカゴ、ドロプシー、ハーバード、ペンシルベニア、プリンストン）と、少し改善される (W. C. Bennett, *Area Studies in American Universities*, Social Science Research Council, New York, 1951, pp. 24—25)。

(四)

第二次世界大戦を契機として、アメリカの中近東への関心は一変する。アラブ諸国は独立し、ヨーロッパ列強は戦禍の中で疲弊し、次々と中近東地域から手を引き、その肩代りとしてアメリカがこの地域に登場してくる。一九二五年に早くもアメリカの石油会社は、ヨーロッパ諸国に加ってこの地域の石油開発に乗り出すのに成功したが、一九三三年にペルシア湾の石油資源が注目を引き始めるまでには大した開発はなされなかった。それでも大規模な開発が本式に始まるのは一九四七年以降のことで、それが一九五三年にはもう、アメリカの石油会社が全中東の産油高の七〇パーセントを産出するまでになる(1)。これと並行して、一九四七年のトルーマン・ドクトリンにみられる東西冷戦の開始、翌年のイスラエルの独立宣言とパレスチナ戦争に続いて出された「ポイント・フォア」政策にみられる中近東諸国へのアメリカの軍事的経済的テコ入れ、などとこの地域の戦略的経済的重要性が増すにつれてアメリカの関心・介入は一段と増してくる。それにつれて、この地域の正確な情報の収集・理解ということが政府・民間会社の政策立案にとって最大の急務となった。しかるに、そのような要請に応える体制は、すで

(2)述べたようにアメリカでは皆無といってよかった。一九四七年に R.B. Hall は、アメリカの中東地域研究について、こう書いている。

「近東は完全に無視されており、言語の分野を除いて、その地域について何程か物を知っている学者は、ほとんどいないと云ってよい。プリンストンがこの地域についての研究のプログラムと体制を兼ねそなえる（のみ）。」(2)

したがって、まずあらゆる角度からする現代中近東の綜合的研究・理解の必要性が叫ばれだした。

このような挑戦に応ずべく、戦後いち早く（一九四六年）首都ワシントンに創設されたのが Middle East Institute である。これは、「中東についての正確な情報を広めることにより、アメリカ国民の間に中東への広い関心をよびおこすこと」(3)を目的として、民間・財界人からの財政的援助により成立したもので、特に後述の School of Advanced International Studies と提携して、直ちに出版・講演・語学の講習・調査報告などの活動を開始し、(4)翌一九四七年には機関誌 *The Middle East Journal* が創刊された。この他、Social Science Research Council（一九二四年設立）が、一九四六年に地域研究のための特別委員会を設け、まずアメリカの大学における地域研究の状況についての調査に乗り出したり、(5)Council for Middle East Affairs が一九五〇年から月刊誌 *Middle East Affairs* を発刊したり、また同じ頃「アメリカ学術会議」が中近東についての特別委員会を設け、ターハー・フセインを含む著名な現代アラブの作家の著作の英訳に乗り出したりした。(6)

次に大学関係では、まず首都ワシントンの School of Advanced International Studies（これは一九四三年、Foreign Service Educational Foundation により設立されたもので、一九五〇年にジョンズ・ホプキンス大学に合併される）がある。この大学院では、戦後間もない一九四六年、中東地域研究のプログラムが立案され、翌年にはそれが実施されるに至った。前述の Middle East Institute と関係をもちながら、M. Khadduri, W.M. Carson の指導の下に、アラブ世界のみならず、トルコ、イランを含む地域の歴史・文化・経済・社会・政治などの多方面にわたる幅広い立場からの研究が開始された。(7)

次にプリンストン。そこではすでに大戦中から徐々に、現実の必要に応ずべく体制の変化がなされつつあった。一九三五年にプリンストンにおいて、「アメリカ学術会議」の後援で始められた夏期セミナーについてはすでにふれた。また一九四三―四五年には、戦時協力体制の一つとして、同 Oriental Studies 学科が軍人のためにアラビア語とトルコ語の特別講習（Army Specialized Training Program）を開いたりしていた。それが一九四七年には、学科間の壁を破り、綜合的な立場から中近東を研究しようとする試みとして、Program in Near Eastern Studies へと発展した。これは、社会学、経済学、歴史学、イスラム学などの関係諸学部のスタッフから構成される委員会で、学生はいずれかの学科に席をおきながら、その学科とこの Program の定めるコース・ワークに従って学位が取れる仕組みに

なっている。[8] 教えられる言語の範囲も、アラビア語の他に、ペルシア語、トルコ語、ヘブライ語を含み、これらの言語の教授には、現地人による指導に重点をおく新しい方法がすでに始められていた。そしてこの Program には、政府関係の外国駐在員、実業界、軍関係の者にも窓口が開かれ、特別学生として彼らを迎え入れた。このような動きの背後には、イスラム研究の成果を、単なる少数の者の占有物としてではなく、広く関係諸学者及び一般国民とも分ち合おうとする努力がみられる。[9] イスラム研究をいち早く学部レヴェルまでおし拡げたのも、その表われである。そして最近には(一九六九年)、いよいよ、それまで Oriental Studies 学科内で東アジア研究と同居していた中東研究が独立し、新しく Near Eastern Studies 学科が設立された。

今一つプリンストンでの注目すべき画期的な試みは、一九五三年にアメリカの「国会図書館」とプリンストンの主催で開かれた、イスラム文化についての東西会議である。これには、サウジ・アラビア、スダン、北アフリカ諸国を除いて、イスラム諸国の学者が約三〇人と約同数の西洋のイスラム学者が参加した。これらアメリカのイスラム学者が、ムスリム当事者と直接対話を交すことにより、彼らの感情・思想の中に表われた現代イスラムの生々しい動きや課題を知る、という点ではそれは大きな意味があったと思われる。そこでは、当然のことながら、西洋の学者とムスリムの学者の間の意見のくい違いが指摘されたし、[10] またムスリムの学者の間でも同じような意見の対立がみられた。

プリンストンに次いで一九四八年、Institute for Israel and the Middle East を設立し、アラビア語、ヘブライ語、ペルシア語、トルコ語を含む諸地域の、社会科学的アプローチによる地域研究のプログラムの確立に踏切ったのは、ドロブシー・カレッジである。これは、M.A. 及び Ph.D. に至る学位を出す大学院レヴェルの独立したプログラムとして出発した。[11]

二年後の一九五〇年には、ミシガン(Ann Arbor)にも、それまで夏期語学プログラムとして行なわれていたのが、Program in Near Eastern Studies (後の Center for Near Eastern and North African Studies) へと拡大され、現代中近東の政治・経済・文化・歴史・地理及び美術と多方面の研究が始められた。これは、プリンストンの場合と同じく、「委員会」形式によるもので、学部一般のプログラムから独立したものではない。その反面、学部・大学院学生の両方に開かれている。最初、アラビア語、ペルシア語から出発したが、後にトルコ語、ヘブライ語のコースがこれに加った。[12]

次に注目すべきものは、コロンビアとハーバードの場合である。まずコロンビアでは、一九五〇年に、大学院レヴェルで、イラン、パキスタン、イスラエル及びトルコを含む地域の綜合的な研究をめざすプログラムとして、Near and Middle East Division が発足し、これが後に School of International Affairs 内の Middle East Institute として発展する。そこでは、スタッフ、学生、コース・ワークなど大学の一般プログラムとは一応別になっている。二年の大学院課程を終えて(大体

M.A. に相当する）Certificate in Middle East Studies が出されることになっている。Ph.D. は出さないが、もし学生が希望すれば、いずれかの学科に所属する形で、Ph.D. のコース・ワークを続けることができる。すでに発足当時（一九五二―五三）、中東関係で五六のコースをもっていたし、今日では J. Schacht, A. S. Atiya, J. C. Hurewitz 以下二六名のスタッフをそろえ、現代中近東の綜合的研究という点では、プリンストンを凌ぐ最も充実したものといえよう。(13)

ハーバードが「地中海からインド国境地帯にまたがる地域の言語・文学・歴史・経済・文化についての、(14)特に現代に重点をおいた教育・研究を綜合化し、強化する」ためのプログラムとして、Center for Middle Eastern Studies を設立したのは、やっと一九五四年になってからである。教えられる言語には、アラビア語に、トルコ語、ペルシア語、ヘブライ語が加えられ、昨年度（一九六八―六九）からはウルドウ語も加えられた。この Center には二つのプログラムがあり、一つは M.A. を目指す二年制のプログラムと、他は Ph.D. コースのためのプログラムである。後者については、Center 自体はその学位は出さない建前になっているので、学生が希望すれば、いずれかの学科、例えば、Near Eastern Languages and Literatures (NELL) 学科、あるいは History 学科と結合することによって学位の取得が可能となる。したがって、コロンビアの場合と同じく、一応学部のプログラムとは別の形になっている。

このようにハーバードは、プリンストンやコロンビアに比べて地域研究への出足しは確かに遅れたが、その後の体制の整備・施設の拡充にはめざしいものがある。アメリカにおけるイスラム研究の発展を代表するものとして、今少し詳しくみてみよう。一九五五年に、それまでアラビア語の講座を担当してきた W. Thomson が引退して、オックスフォードから H. A. R. Gibb が招かれた。その彼が一九五七年から（一九六四年に病気引退するまで）この Center の指導にもあたるようになる。続いて、ハーバードには、I. Goldziher 以後のイスラム中世史の定説を覆えし、その書き替えを主張する G. Makdisi, コーラン及び初期のイスラム史の I. Lichtenstadter, オスマン史の S. J. Shaw（一昨年 UCLA に移った）、イラン史の R. N. Frye などの学者が集められ、最近では、インド・パキスタン研究に、ドイツから A. Schimmel, パキスタンから Hamid ud-Din がそれぞれ招かれた。この他、特に近代イスラムに造詣の深い W. C. Smith が、一九六三年にカナダのマックギルから、ここの Center for the Study of World Religions に迎えられた。

次に、イスラム研究にとって不可欠な文献の蒐集という点から眺めてみよう。(15)一八〇年、つまり Semitic Languages 学科が創設された年から一八九一年、これが Division of Semitic Languages and History に改組されるまでの間を第一期とすれば、この間アラビア語の重要性は大して認められず、したがって文献の蒐集には大して関心が払われなかった。ペルシア語、トルコ語の文献に至っては、まったく無視されていた。これが、第二期の一八九一年から Center 設立の一九五四年の間に

は、多少改善される。一八九一年の学科改組はやがて、前述のように、一九三六年のアラビア語講座の設立に至るまでに発展する。この期間は、このようにして、それまでの他のセム語研究への従属的地位を脱して、アラビア語学が独立した時期で、J. R. Jewett 及び W. Thomson によって、意識的に文献蒐集の努力がなされた。それでも一九五四年までアラビア語、ペルシア語、トルコ語の全部を含めて、僅か三〇〇〇冊足らずという状態で、しかもそれは未だ充分整理されないままであった。これが H. A. R. Gibb の到来により一変する。直ちに未整理の図書の登録作業が開始され、一九五六年にはワイドナー図書館にアラビア語専門の、一九五九年には中近東関係専門の、司書が置かれ、これが三年後には Middle Eastern Division に発展し、常時数人の中近東専門の司書が働くことになる。一方文献蒐集の方でも、アラビア語関係だけで一九五八年には四〇〇〇冊に達し、これが僅か十年後の一九六八年には何と一躍三〇〇〇〇冊に増え、ペルシア語関係で五五〇〇冊、トルコ語で四〇〇〇冊と発展し、研究の基礎を築いた。(16)

以上にみてきたような戦後の地域研究のめざましい動きに対して特に注目に値するのは、一九五二年 W. C. Smith の指導の下に、カナダのマックギル大学に創設された大学院レヴェル (M. A. 及び Ph. D.) の Institute of Islamic Studies である。それは、まず、「ムスリムの信仰に関心をもち、またそれが過去において生み出し、現に関係をもっている社会と文明に係わるイスラムの伝統」に関心をもち、さらに「現代の生きた力としての信仰に、またその文明と社会が今日経験しつつある大きな変化に、特別の重点」をおく。(17) そこには、イスラムを、中東地域の理解、研究のために考慮すべき単なる一要素としてではなく、一つの信仰、宗教そのものとして、その内部から理解し、それが現代直面する問題を理解しようとする姿勢がみられる。(18) 教えられる言語では、アラビア語、ペルシア語、トルコ語、ウルドゥ語の他にマレー語、インドネシア語が加えられ、スタッフには今日、所長の C. J. Adams, N. Berkes, T. Izutsu, H. Landolt の他十二名の学者がおり、充実している。

註(1) F. C. Mattison, *A Survey of American Interests in the Middle East*, p. xi.

(2) R. B. Hall, *Area Studies: with Special Reference to their Implications for Research in the Social Sciences*, Social Science Research Council, New York, 1947, p. 84. 前年の他の調査によると、シカゴが地域研究に乗り出すべく立案中だとある (Ibid., pp. 88—90) が、実現するのはずっと後になってからである。

(3) [The Middle East Institute], *The Middle East Institute* (Washington, D. C., 1951), p. 1. この他、同じく *The Middle East Institute*, Washington, D. C., [1946]; F. C. Mattison, ibid., p. 90 参照。

(4) その主な出版物をあげると、H. A. Kitchen (ed.), *Americans and the Middle East: Partners in the Next Decade*, 1950,

J. B. Philby, *Arabian Highlands*, 1951.

F. C. Mattison, *A Survey of American Interests in the Middle East*, 1953.

M. Khadduri & H. J. Liebesny (ed.), *Law in the Middle East*, 1955—.

R. Ettinghausen, *A Selected and Annotated Bibliography of Books and Periodicals in Western Languages Dealing with the Middle East, with Special Emphasis on Medieval and Modern Times*, 1952 (Supplemented in 1954).

S. S. Glazer, *Bibliography of Periodical Literatures on the Near and Middle East*, 1947—.

W. Sands (ed.), *Tensions in the Middle East: A Series of Addresses Presented at the 10 th Annual Conference on Middle East Affairs*, 1956.

W. Sands (ed.), *New Look at the Middle East: A Series of Addresses Presented at the 11 th Annual Conference on Middle East Affairs*, 1957.

Report on Current Research [on the Middle East], 1956—58.

The Middle East: A Selected Bibliography of Recent Works, 1967.

W. Sands & K. H. Brown (ed.), *Current Research on the Middle East*, 1955—57. etc.

(5) R. B. Hall, *Area Studies* (前出)。

W. C. Bennett, *Area Studies in American Universities* (前出)。

(6) R. B. Winder, "Arabic and Islamic Studies in the United States," *Middle East Forum*, 31 (1956), p. 32.

(7) F. C. Mattison, ibid., p. 93.

(8) P.K.Hitti, "Arabic and Islamic Studies in Princeton University,"; F. C. Mattison, ibid., p. 92; *The Undergraduate Announcement of Princeton University, 1969—1970; General Catalogue of Princeton University, 1968—1969* など参照。

(9) P. K. Hitti, ibid., p. 294.

(10) このような討論や対話が、その後の研究の方法論の中でどのように生かされたかを今評価することは困難だが、筆者の印象としては、過大評価はできないと思われる。むしろ、後に述べる戦後のイスラム研究の流れの一つである「対話」グループの一つの表われとして考えるべきであろうか。

(11) F. C. Mattison, ibid., pp. 86—87; *Register of the Dropsie College, A Graduate Institution for Hebrew and Cognate Learning, 1968—1969* 参照。

(12) F. C. Mattison, ibid., p. 95; *University of Michigan: General Register, 1968—1969* (Section

2) 参照。

(13) *Columbia University Bulletin: School of International Affairs and the Regional Institute, 1968—1969; Columbia University Bulletin: the Graduate Faculties, 1968—1969*; F. C. Mattison, ibid., p. 86 参照。

(14) *Supplement to the General Announcement: Degree Programs in Middle Eastern Studies (Harvard University* [1967]), p. 2.

(15) L. Zuwiyya-Yamak, "Introduction"; *Supplement to the General Announcement: Higher Degrees in Near Eastern Languages and Literatures, Harvard University*, [1968—69] 参照。

(16) Harvard University Library, *Catalogue of Arabic, Persian and Ottoman Turkish Books*, 5 vols., 1968 参照。

(17) *McGill University, Montreal Calender 1967—68*, (Faculty of Graduate Studies and Research), p. C 15; M. P [erleman], "Middle Eastern Studies on the Campus 1956—1957," *Middle Eastern Affairs*, 7 (1956), no. 11, p. 424 参照。

(18) なお興味ある点は、これまでにアメリカで、"Middle East (ern)" ないしは "Near East (ern)" と名のつくプログラムや研究所はあっても、"Islamic Studies" をその名前の中にもつものは、少くとも筆者の調べた限り、このマックギルを除いて他にない。

(五)

以上に述べたような中近東地域への関心の高まり、そのための研究体制の充実化の試みにもかかわらず、その成果は決して満足すべきものではなかった。戦後十年たった一九五五年にプリンストン大学が行った[1]調査では、約一八〇〇校あるアメリカの高等教育機関のうち、アラビア語のコースをもつものは、僅かその一パーセントの一八校である。これは、前述の一九四〇年当時の調査と数の上では大して変らない。これが三年後に、僅か五校増えるにすぎない。また、中近東の地域研究についての何らかのプログラムをもつ学校は、何と僅か一二校、全国でアラビア語を教える資格のある教師が三〇人に満たないといわれ、そのうちアラビア語及びイスラム研究に専門に従事している者、僅か一〇人という数字が出ている。[2] また、一九五七年現在で、陸・海軍、政府外交関係当局及びアラムコはそれ独自の語学訓練所をもっていたとはいえ、中近東地域で働くアメリカ人のうち何千人かは、アラビア語は云うに及ばず、まったく語学の教育を受けてはいないといわれる。[3]

このような状態の中で、一九五〇年代の中頃、特に一九五七、八年頃から、政府・議会筋の間で、アメリカ政府・民間の海外駐在員の語学力、なかんずくアラビア語のそれの不足及びその教育のための施設の不充分さが問題にされ始めた。一九五

四年に、House Appropriations Committee で、国務省人事局長 G. F. Wilson はアメリカ外交員の語学力不足について証言し、特に極東、東ヨーロッパ、東南アジアと並んで、中近東地域について、緊急に語学プログラムを拡充することの必要性を説いた。(4) 一九五七年八月には、アメリカ国務省が "Language Policy, Proficiency, and Training Programs in the Foreign Service" という廻状を出して、アラビア語、中国語を含めて語学習得の必要性を唱えた(5)し、また一九五八年一月には、アメリカ文部・厚生省長官 M. B. Folsom が、外国語教育の現状について重要な声明を出して、同じような警告を発した。(6) このような政府筋の反省の裏には、エジプト革命(一九五二)、同共和国宣言(一九五三)、ナセルのスエズ運河の国有化(一九五六・七)、続くイスラエルのエジプト侵入によるシナイ戦争の勃発(一九五六・一〇)、エジプト、シリアの合邦(一九五八)、イラクのクーデター(一九五八)などと、揺れ動く中東の政治に対するアメリカ外交の当惑と焦躁がうかがわれる。(7)

これまで、アメリカにおけるイスラム研究、特に地域研究が所期の成果をあげ得なかったとすれば、その最大の原因の一つはやはり財政的な理由である。仮りにある大学で、パキスタン・ウルドウ研究のプログラムを新設する場合、まず言語・歴史の教授が一人、語学教授のための助手が一人、その他パキスタンの経済・政治・社会のためのコースが必要になり、加うるに文献、雑誌、地図などの購入に要する費用の他に、学生が現地で研究できるための研究・滞在費などを入れると、その費用は相当額にのぼる。仮りに、その大学には、他の関係諸言語及びイスラム一般についてのコースがあったにしても、なお百万ドルはかかるといわれる。(8) しかるに、大学はそれまで、連邦・州政府に財政援助を期待することができず、専らロックフェラー、フォード、カーネギー、ウイリアム・T・グラントなどの財団やアラムコなどの民間会社、並びに個人の寄附に頼らざるを得なかった。しかしその額には限度がある。前述の調査報告で、戦後の十年間で、地域研究のプログラムをもつものが僅か一二校、アラビア語のコースをもつものが一九四〇年で約一〇校と、数字の上からそれ程増えたように思えないのは、既存の教育・研究施設を利用するという方針がとられたからである。

このような反省から、アメリカ連邦政府が積極的に財政援助に乗り出してくる。ここにアメリカのイスラム研究は今一つ新しい段階に入る。まず一九五八年に「国防教育法」(National Defense Education Act) が適用され、その中の Title VI の語学及び地域研究に関する項目により、(9) 主にアジア、アフリカ、東欧のこれまで充分に研究されなかった言語並びに地域の研究に従事する学生、大学、研究所に財政援助が与えられることになった。最初は、プリンストン、ミシガンなどの戦時中の特別訓練センターを中心とする重点配分であったが、一九六四年には援助をうけるプログラムの数は五五に達し、さらにこの年には同法が改正され、同援助のための予算が増額された。またそれまで、主に適用範囲が大学院レヴェル止まりであったのが、学部レヴェルにまで拡げられ、さらに一九六七年には、その試

みは全国的に拡大されるようになってくる。[10] この他に、一九五四年のいわゆるフルブライ法及び一九六二年の同法の改正による現地への留学生や大学図書館への補助などがその主なものである。このような連邦政府の財政的援助を受ける私立大学の他に、最近では州立の大学でイスラム研究を含む地域研究のプログラムを設ける大学も増えてきた。

このような趨勢の中で、これまで伝統に縛られてなかなか動きのとれなかった古い大学にも徐々に現代、ないしは地域研究への関心を示すものもでてきた。ペンシルベニアでは、Oriental Studies 学科の中に、Modern Near East Language and Area Center が設けられ、シカゴでは Near Eastern Languages and Civilizations 学科の外に、同学科及び歴史学その他の関係学科の中近東地域に関心をもつスタッフよりなるプログラムとして Committee on Near Eastern Studies ができ、それが一九六五年には Center for Middle Eastern Studies へと発展する。これは、奨学金は出すが学位は出さず、隣接諸学科の学生でそのプログラムに関心ある者を指導し、その学科を通じて学位が出される仕組みになっている。[11] 大学院・学部の両方の学生に開かれている。

この他、カルフォルニア・バークレー校には、一九六二年に Near Eastern Languages 学科の外に、Committee for Middle Eastern Studies が設けられ、カルフォルニア・ロスアンゼルス校 (UCLA) には、Near Eastern Studies 学科の外に、スタッフの研究・調査機関として Center for Near Eastern Studies が新設された。ユタ大学では、アラビア語、ヘブライ語及び中東史（イラン史を含めて）はそれぞれ Languages 学科、History 学科にくり込まれ、綜合研究のプログラムとしては Middle East Center がある。UCLA とよく似た構成である。インディアナには、Near Eastern Languages and Literatures 学科が新設されたし、ウイスコンシンでは、一九五九年から通信教育のプログラムにアラビア語も加えられた。[12]

戦後のこの期の最も特徴的なことは、これまで、アメリカ東部の有名校に限られていたイスラム研究の機関が全国的に拡げられてきたこと、また授業内容についても、それまで主として大学院レヴェルで行われていたのが徐々に学部レヴェルまで拡げられてきたことである。その最もいい例がポートランド州立大学であろう。そこでは、Foreign Languages 学科でアラビア語、ヘブライ語、ペルシア語、トルコ語が教えられており、そこの Middle East Studies Center は学部レヴェルの教育が主体で、学位は出さないが B.A. に相当すると思われる Certificate of Proficiency を出すことになっている。[13]

以上にみたような北米大陸における戦後のイスラム研究の動向は、ついに一九六六年、社会科学・人文科学の立場からイスラム発生以後の中近東の研究にたずさわるアメリカ及びカナダの学者の団体で、全国的な組織としては最初の試みとしての、Middle East Studies Association of North America の結成へと発展するまでになった。[14]

註(1)　M. Mansoor, "Present State of Arabic Studies in

the United States," *Report on Current Research on the Middle East* (The Middle East Institute, Washington, D. C., 1958), p. 55.

(2) Ibid., p. 66.

(3) Ibid., p. 56. 国務省関係では，ヴァージニア州アーリントンにある The Foreign Service Institute，またレバノンには The Field School in Beirut が置かれている。海軍では，The U. S. Naval Intelligence School (USNIS)，陸軍ではカルフォルニアの The U. S. Army Language School (USALS) がある。また民間会社では，アラムコが ARAMCO Language Training Program を，サウジ・アラビアのダハラン，アブカイク，ラス・タヌーラの三ケ所に設けている (Ibid., pp. 68—70)。なおダハランのプログラムについては，C. Matthews, "Research in Saudi Arabia," *The Muslim World*, 44 (1954), pp. 110—25 参照。

(4) M. Mansoor, ibid., p. 60.

(5) M. Mansoor, ibid., p. 61.

(6) M. Mansoor, ibid., p. 56.

(7) このような傾情は，この頃出版された多くの研究書の題名にも表われている。いくつかの例をあげると，

J. C. Hurewitz, *Middle East Dilemmas*, New York, 1953.

S. A. Morrison, *Middle East Tensions: Political, Social, and Religious*, Harper, N. Y. [1954].

H. L. Hoskins, *The Middle East: Problem Area in World Politics*, New York, 1954.

N. A. Faris, *The Crescent in Crisis: An Interpretative Study of the Modern Arab World*, University of Kansas Press, Lawrence, 1955.

W. Saads (ed.), *Tensions in the Middle East*, 1956.

W. Sands (ed.), *New Look at the Middle East*, 1957.

H. W. Baldwin, *Middle East in Turmoil*, New York, 1957.

P. W. Thayer (ed.), *Tension in the Middle East*, Baltimore, 1958.

C. A. Fisher & F. Krinsky, *Middle East in Crisis: A Historical and Documentary Review*, [Syracuse], [1959].

(8) R. B. Winder, "Arabic and Islamic Studies in the United States," ibid., p. 32.

(9) L. H. Legters, "The Place of Religion in Foreign Area Studies," *Journal of American Academy of Religion*, 35 (1967), no. 2, pp. 159—164 参照。

(10) 学生についてみると，1人当り1年間1100—1300ドルにプラス家族扶養費が給与される。援助を

受けた学生の数をみると、一九六四年までは毎年一五〇〇人の大学院生。一九六四―六五年度にはその二倍の三〇〇〇人、一九六五―六年度で六〇〇〇人、一九六六―六八年には年間七五〇〇人へとさらに増えた（J. M. Swomley (Jr.), *Religion, the State and the Schools*, Pegasus, N. Y., 1968, pp. 155―56）。筆者の推定では、ハーバードでアジア・アフリカの語学研究に携わっているアメリカ人の大学院学生で、この援助を受けていない者は稀のようである。

（11）F. Rosenthal の如き学者をもつエール大学はいまだに旧来の方向を変えようとしない。

（12）これらの情報については、ここにいちいち引用はしないが、各大学が出しているカタログやパンフレットを参照。なお、ニューヨーク州立大学では、特別なプログラムはないが、Philosophy 学科の中に、「中世哲学」、「アラブ・ユダヤ哲学」のコースが設けられ、イスラム哲学史についての講義が行われている（*Bulletin of State University of New York, 1968―1969*, p. 198）。

（13）*Portland State College Bulletin, 1968―1969* 参照。

（14）*Journal of American Oriental Society*, 38 (1968), p. 396. 翌年には、その機関誌 *Bulletin* が創刊された。

（六）

少しまとめてみよう。アメリカのイスラム研究の歴史は、第二次世界大戦を中心として、大きく前後二つに分けられる。さらにこの前期は大体一九三〇年を中心として二期に、また後期は一九五八年を前後として二期に分けることができよう。第一期の一八九〇年から一九三〇年頃までは、アラビア語及びイスラム研究は、セム語学（Semitic studies）・聖書考古学の一分野として、ないしは宣教活動の一手段として、それに従属した形で、行われていたにすぎない。これが第二期に至って徐々にではあるが改善され、イスラム研究が独立してくる。その方法や関心についてみると、初期・中世イスラムの文献学的研究（それもアラビア語を中心とした）が主流であった。シカゴ、ハーバード、ペンシルベニア、プリンストン、エールなどのセム学研究の伝統をもつ古い大学で、アラビア語のコース及び講座が徐々に新設されてくる。他方、ハートフォードの如く、宣教活動に積極的に従事してきたセミナリーでは、その方面からイスラム研究が進められてきた。

戦後になって、アメリカのイスラム研究は、アメリカの国際政治的・経済的必要から、地域研究という形で促進されてくる。戦後の前期では、大体東部の伝統ある大学に限られていたのが、後期に至って、政府の莫大な財政援助という投薬によって、全国的にその規模は拡大される。ミシガン、プリンストンのように、学科内部の改造が比較的スムーズに行われ、戦後の現実的要請に応える地域研究の体制を整えた大学と、ペンシル

ペニア、エールのようにその伝統の重みからそれまでの体制をなかなか変えようとしない大学と、この二つの両極端の間に様々な適応の仕方がみられる。

戦後、続々と設けられた中近東の地域研究のプログラムを分類してみると、大きく三つに分けることができよう。第一は、プリンストンの Program in Near Eastern Studies、ミシガンの Center for Near Eastern and North African Studies の如く、プログラム自体には学科並みの独立性はなく、唯いずれかの学科に属する学生で地域研究を志望する者を指導すべく、関係諸学科のスタッフから構成された「委員会」形式のもの。第二に、マックギルの Institute of Islamic Studies、ハーバードの Center for Middle Eastern Studies、コロンビアの Middle East Institute の如く、一応学科並みに独立し、M.A. から Ph.D. までの学位を出し、そのプログラム独自の学生をもち、奨学金も出すもの。[1] 第三が、UCLA の Center for Middle Eastern Studies の如く、単なる教官の研究機関として存在するもの。そのいずれがいいか悪いかについては、各大学の伝統的経済的事情によってそのプログラムの成り立ちが違うので一概には云えない。またイスラム研究自体については、これら三つのグループに限られたわけではなく、「中近東」学科はいうに及ばず、大学によっては、哲学、歴史学、古典学などの学科においてもなされている。

次に、このような制度的発展の背後にみられる方法論的傾向についてみると、これまた大きく三つに分類することができよう。まず第一が、「文献学」(Philology) グループ。これは過去のイスラムについての文献学的歴史的研究に重点を置くグループで、歴史的には一番古い。A. Jeffery, P.K. Hitti, J. Schacht, M.G.S. Hodgson, G. Makdisi[2] などの業績はこのグループに属すると思われる。第二が、戦後急速にアメリカで発展してきた「地域研究」(Area studies) グループで、社会科学の方法論で、イスラムを、その社会ないしは地域との現代的係わりという観点から研究しようとするもの。その大部分は、伝統的な意味では、イスラム学者ではない場合が多い。[3] シカゴの L. Binder, カルフォルニア(バークレー校の) W.M. Brinner, UCLA の S.J. Shaw, マックギルの N. Berkes, ジョンズ・ホプキンスの M. Khadduri, ハーバードの N. Safran,[4] *The Religion of Java* (1960) の著者 C. Geertz, *Buurri al Lamaab* (1964) の著者 H.B. Barclay などによって代表される。また、このグループでは、研究対象及び関心の性質上、幾人かのグループによる研究、討論によるものが多い。例えば、S.N. Fisher (ed.), *Social Forces in the Middle East* (1955), M. Khadduri & H.J. Liebesny (ed.), *Law in the Middle East* (1955—) など。[5]

第三が「対話」(Dialogue) グループ。これは、いわば第一と第二のグループのアプローチに対する不満から出てきたと云ってよいであろう。現代に対して大きな関心を示すという意味では、第一の「文献学」グループと対立し、また共に現代に関心を示しながら、方法論的には第二の「地域研究」グループと対立する。「地域研究」グループが地域を研究するための一要素

として、客観的に、いわばつき離した態度でイスラムを眺めるのに対して、このグループは、イスラムをその内部から理解しようとして、ムスリムの主観的意識を重視する。「われわれがムスリム及び彼らの信仰を理解するのは、誰かがわれわれに、政治、経済その他西洋が俗と呼ぶすべてのものがムスリムにムスリムとしてどのようにみえるかを説明することができる時においてのみ」[6]とこのグループの最もソフィスティケートされた代表者 **W. C. Smith** は云う。信仰の眼を通して世界を眺める時、そこには聖・俗の区別の存する余地はない。このことは、もともと制度的に両者を区別しないイスラムをはじめ東洋の宗教の場合に特にそうである。しかるに、イスラムを、外から「客観的」に、様々な枠組の中で眺め、社会を構成する一要素という枠の中にそれを押し込め、そのような立場からムスリムの歴史や問題を理解しようとするのは誤っているとする。本来信仰とはパーソナルなもので、したがってイスラムに限らず他人の信仰を理解するには、パーソナルなアプローチが要求される。このような立場よりする研究者の成果は今日必ずや当事者の真面目な反応をよび起すし、これが研究者の理解を助け、また反面これが当事者にも反作用する。研究とは、そのような「対話」だとする。[7]いなむしろ、究極的には、例えばキリスト教徒とムスリムの対話という場合、その対話にみられる対立意識は、解消されなければならないとする。存在するのは、人間の宗教性（religiosity）のキリスト教的発現、イスラム的発現にすぎない。かくして、他人の信仰を理解することは、とりもなおさず人間一般としての「われわれ」を理解することにほかならない。

ここまで徹底しないにしても、今日これに近い立場をとるものとしては、ハートフォードで刊行されている雑誌 ***The Muslim World*** にみられるグループがある。この雑誌はもともとムスリムへの宣教活動を助けるためにイギリスで発刊されたものであるが、一九三八年に今のハートフォードに移された。その内容については、もともと、どちらかといえば、ムスリムを宣教の対象としてみる立場から、徐々に、対話を通じての相互理解という方向へ移ってきている。[8]同じような傾向は、イスラム学者ではないが、***Islam-the Straight Path*** (1958) の監修者 **K. Morgan** にもみられる。この本では、イスラムについて、非当事者たる自分の解釈や意見を述べるというよりも、当事者たるムスリムの学者に直接執筆させるという主観性尊重の立場が強調されている。[9]

このようにして、それまでふるわなかったアメリカのイスラム研究が、戦後、政府・民間人・学者の一致した努力で、めざましい発展をとげた。今ではもう、戦後新しい教育を受けたアメリカ人の学者が、ヨーロッパ出の学者達と共に第一線で活躍するまでになったし、文献などの研究施設や体制の方をみても、写本関係を除けば、ヨーロッパにそれほど劣らないところまできたといえる。そして、僅か四半世紀の間に上に述べた三つのグループにみられる如き多彩な研究活動が展開されるまでになった。

しかし、このような急造のイスラム研究に問題がないわけではない。一九五六年、すでに H. A. R. Gibb は、従来の "Orientalist" 型から脱して、イスラム学者は真の意味での「歴史学者」(historian) になるべきであると説いたが[10]、このことは今でも妥当する。しかしそれにもまして、そもそもアメリカにはこの "Orientalist" 型のイスラム学者すらまだ数多くいない。また地域研究についてみても、これまでとかく中近東地域の宗教・文化・経済・社会・政治の各専門家の寄せ集め的研究に終り、真の意味での綜合化された研究は稀であったと云ってよい。もちろんこれらの欠陥を是正するにはもっともっと数多くのモノグラフ的研究が必要であり、このことの責めをアメリカ人学者にのみ負わせるのは酷であろう。また、これらの「客観的」アプローチと、「対話」グループにみられる「主観的」アプローチをどう綜合するか。例えば、コーラン研究についてみるに、従来の西洋（アメリカを含めて）の学者は、暗黙のうちに、コーランをマホメットの作として、その立場から研究を進めてきた。しかし、ムスリムにとっては、コーランは「神の永遠なる言葉」(Kalām Allāh) であり、マホメットはその言葉を伝える単なる使徒 (Rasūl) であったにすぎない。したがって、そのような非イスラム的前提を認めることは、イスラムの根本的教義に反することになる[11]。たとえ暗黙のうちにであれ、かかる前提に立つ西洋のイスラム研究が、ムスリムから猜疑の眼をもってみられても故無しとしない。この両者のくい違いをどう統一するか。今後に残された課題であろう。

（一九六九・七・一）

註(1) シカゴの Center for Middle Eastern Studies はこの二つのタイプの中間に位置するといえようか。

(2) A. Jeffery, *Materials for the History of the Text of the Qur'ān*, 1937.

Idem, *The Foreign Vocabulary of the Qurān*, 1938.

P. K. Hitti, *The Origins of the Druze People and Religion, with Extracts from Their Sacred Writings*, 1928.

Idem, *History of the Arabs*, 1937.

J. Schacht, *Origins of Muhammadan Jurisprudence*, 1950.

Idem, *Esquisse d'histoire du droit musulman*, 1952.

M. G. S. Hodgson, *The Order of the Assassins*, 1955.

G. Makdisi, *Ibn 'Aqil et la résurgence de l'Islam traditionaliste au XI^e siècle, V^e siècle de l'Hégire*, 1963.

(3) もともとアメリカ人ではないが、G. E. von Grunebaum, H. A. R. Gibb は例外であろう。もちろん、同じような傾向はヨーロッパについてもいえる。ただそこで特徴的なことは、イギリスでは例えば、W. M. Watt (*Muhammad at Mecca*, 1953; *Muhammad at Med-*

ina, 1956; *Islam and the Integration of Society*, 1961 参照)，フランスでは M. Rodinson (*Mahomet*, 1961) の如く，イスラム学者で社会科学者的アプローチをとり入れる者が出ていることである。

(4) L. Binder, *The Ideological Revolution in the Middle East*, 1964.

M. B. Brinner, *A Chronicle of Damascus, 1389—1397*, 1963.

S. J. Shaw, *The Financial and Administrative Organization and Development of Ottoman Egypt, 1557—1798*, 1962.

N. Berkes, *The Emergence of Secularism in Turkey*, 1964.

M. Khadduri, *The Law of War and Peace in Islam*, 1941.

N. Safran, *Egypt in Search of Political Community*, 1961.

(5) この呼称については，W. G. Oxtoby, "*Religionswissenschaft* revisited," *Religions in Antiquity: Essays in Memory of Erwin Ramsdell Goodenough*, (ed. J. Neusner, E. J. Brill, Leiden, 1968), pp. 590—608 参照。

(6) W. C. Smith, "Non-Western Studies: the Religious Approach," *A Report on An Invitational Conference on the Study of Religion in the State University*, Held October 13—25, 1964, at Indiana University Medical Center, Indianapolis, p. 51. また，これに対する R. H. Robinson のコメント，ibid., pp. 62—65 及び W. C. Smith, *Islam in Modern History*, 1957 参照。

(7) 直接 Smith 教授から聞いたことであるが，彼がマックギルで教えていた頃，聴講者名簿の中にムスリムの名前が現われるまで，イスラムについてのそのコースは開かなかったとのことである。

(8) このような傾向は同セミナリーの宗教研究のプログラムの中にも現われている。そこでは，異った宗教的伝統に属する者をスタッフ・学生の中に積極的に迎えようとする態度に表われている (*The Hartford Quarterly Catalogue Issue*, 1967—1968, vol. Ⅷ, no. 1 参照)。

(9) この本が広く読まれていることから考えて，アメリカにおいて，宗教研究の立場として主観性を尊重するこのグループの傾向が案外強いことがわかる (北川三夫「米国宗教学の展望」(上)，(『宗教研究』三二巻 (一九五九)，一五八号)，九一頁。

(10) H. A. R. Gibb, "Problems of Modern Middle Eastern History," *Report on Current Research* (The Middle East Institute, Spring, 1956), pp. 1—7 参照。

(11) イスラム神学史において，コーランは創造されたものであるか否か，ということは永く論議された重要な問題であった。一時「異端」狩りの「踏絵」として，この問題が用いられたことがあった。だが，ここで問題になっているのは神による被創か否か，なのであって決してマホメットによる被創が問題になったのではない。

フランスの宗教学の近況

——東方アジア宗教の研究を中心として——

福井文雅

一

フランスの宗教学の近況というと、とりあげるべき対象がまず問題となる。宗教学を広い意味にとって、その全体を、たとえば、キリスト教研究とそれ以外の宗教研究とに大きく分けてみると、前者はまた「神学」（これもさらに分科がある）と普通のキリスト教研究とになる。神学以外を具体的に言えば、日本人の立場からでは、日本では最近になってやっと本格的に話題にしてきたテイヤール・ド・シャルダン Teillard de Chardin 神父や、アンリ・ド・リュバック Henri de Lubac 神父などの仕事がある。ド・リュバック神父は「阿弥陀」、「カトリック教」、仏教とキリスト教との優れた比較研究である「仏教の諸様相」、それに有名な「仏教と西欧との出会い」その他の著書があり、ベルギーのエチェンヌ・ラモット Etienne Lamotte 師と同じように、東西にわたる博識は驚嘆すべきものがある。他にはまた、少し遡るが、ガブリエル・マルセル Gabriel Marcel 氏などのキリスト教哲学者達があり、シモーヌ・ヴェィユ嬢 S. Weil さえも併せて考えねばなるまい。一方、カトリックの現状について、「第二ヴァチカン公会議」Concile oecuménique, Vatican Ⅱ（この議事録には邦訳十四巻がある）にも触れるべきであろう。そこから儀礼の改革や神父希望者の減少化の傾向、神父の独身の問題などが盛んに論じられるようになったことは、キリスト教関係の出版物の傾向から見てとれる。そうなると、有力紙 *Le Monde* の宗教欄にも言及しなければならず、その寄稿者であるアンリ・フェスケ氏の「カトリック教は明日の宗教たり得るか？」Henri Fesquet, *Le Catholicisme, religion de demain?* (1962) なども、詳細に紹介したくなる。この本はカトリック界の現状を、欠陥から長所までかなりに暴露しており、カトリックの近況が判ると同時に、日本の宗教界にとっても他山の石となるからである。

一方、これらのキリスト教研究以外に、他の宗教の研究がある。その近況を示そうとすると、フランスの場合には、宗教社会学と文化人類学の動向を無視するわけにはいくまい。

このように、広義でフランス宗教学の全貌を描こうとすると、とりあげるべき対象は多く、多種多様であり、この短かい紙幅の中にはすべてを収めきれない。そこで、本稿ではフランスの大学の宗教関連講座の近況を中心において報告することにしたい。それはまた後述のように、かなり客観的にフランス全体の宗教学の傾向を示す一基準と成ることができる筈だからでもある。

ただしこうなると、キリスト教神学そのものにはほとんど触

れる機会がなくなってしまう結果になるが、しかし、それは元来私の力及ばぬ分野であるし、また第一、エキュメニズムの論じられている今日では、むしろヨーロッパのキリスト教研究全体の中に位置づけて述べる方が妥当であるようにも思われるので、この問題はその専門の方に任せたい。

そこでまず、*Guide de l'Enseignement supérieur universitaire français* と各大学の *Livret* とを参考にして、宗教学関係の講座をもつ大学名を次に列挙してみよう。ただしこの場合、宗教学は広い意味にとって、宗教に関係のある講座をすべて含めておく。

一、キリスト教――パリ、エックス(・アン・プロヴァンス)、ボルドー、リヨン、モンペリエ、ストラスブール

一、宗教学――パリ、レンヌ、ストラスブール、リル

これらに加えて、パリ大学大学院の宗教研究関連講座(後述)の内容と出入する他大学の講座名を挙げると、(年度によっては宗教研究をテーマにすることもある古代・中世ヨーロッパ哲学や社会学関係は、ほとんどの大学の教養課程にあるのでそれは省略し、専門課程の中で東洋宗教研究関係を中心とする。)

教育学・倫理と倫理思想史(ボルドー。デュルケームが最初、教育学の講師となり、後にフランス最初の社会科学の講座を設けたのは、このボルドー大学であった)梵語梵文学(ストラスブール、エックス)インド研究(エックス、リヨン)民族学(ボルドー、リヨン、モンペリエ、トゥルーズ)ビザンチンの歴史と文化(リヨン、ストラスブール)印欧語比較文法(ボルドー、リヨン。宗教学が印欧語比較研究と密接に結びついてきた歴史は言うまでもなかろう)アッシリヤ学(ストラスブール)エジプト学(リヨン、ストラスブール)中近東考古学(ストラスブール。宗教社会学にとって、考古学は重要である)アラビヤ研究(ボルドー、リヨン、ストラスブール、エックス)ヘブライ研究(ストラスブール、リル、エックス)極東の文化と文学(リヨン、エックス)南洋研究(エックス、ボルドー)トルコ研究(エックス、ストラスブール)イスラム研究(ボルドー、リヨン、エックス)(1)

右の講座編成を眺めると、宗教研究の講座が綜合的にまとまってあるのは、まず第一にパリ大学 **Université de Paris**、次がストラスブール **Strasbourg** 大学、そしてそのあとに、リヨン **Lyon**、ボルドー **Bordeaux**、エックス **Aix** が並ぶことが判るであろう。

もっとも、キリスト教神学については、**ストラスブール大学**が中心である。国立系大学で、カトリック神学部 **La Faculté de théologie catholique** と、プロテスタント神学部 **La Faculté de théologie protestante** という二つの神学部を擁する大学はここだけである。ただし、この大学を語るには私よりも適当な人がいるし、(2) また、宗教学一般の面ではパリ大学ほどには大きくない。また、その次の**リヨン大学**も伝統ある大学で、ロジェ・アルナルデ「回教の哲学と文化」、ジョルジュ・デュバルビエ「中国語」、ポール・イズリエ「日本語」などの、他の地方大学には見られない講座もあり、アラビヤ、ペルシャ、ヘ

ブライそれぞれに現地人講師を有しているが、宗教学講座としては大きさとまとまりがパリ大学よりは足りない。エックス、その他の大学にしても同様のようである。

そうであるとやはり、フランスの宗教学の近況を知るには、パリ大学での近況を一つの評準としても間違いなさそうである。元来、パリ大学には、ひとり宗教研究のみならず、他の学問分野も集中している。パリ大学という一大学へのこの学問的中央集権化が、他の諸国にはあまりないフランスの大きな特徴のようであり、パリ大学の近況を見れば、フランスの学界のおおよその傾向はたどれる道理である。ただし、現在立案中の学制改革に伴なって、宗教研究の現状もかなりの変化が予想されるが、まだ誰も今後の方向について確かな情報は得ていない。しかし、方法論までもがすぐに変わるとは考えられない。

さて、パリ大学は、正式には「パリ大学区」Académie de Paris の一機構である。そこで、パリ大学区全体からみれば、宗教学に関する講座はパリ大学文学部、同高等研究院（日本の大学院博士課程程度に相当）、そしてコレージュ・ド・フランスの三機関に存在する。関連する研究所としては、パリ・カトリック研究所（神学科を含む）、国際ヘブライ研究所などがあるが、これらの中で最も重要な機関は、**パリ大学高等研究院**（＝大学院博士課程）で、それは六セクションに分かれているが、本稿で問題となるのは特にその第五部門の「**宗教学部門**」**L'Ecole pratique des Hautes Etudes**（略称 **E.P.H.E.**）, **V^e Section : Sciences religieuses**（一八八六年一月三〇日、創設）であろう。[3] ここは少人数のゼミナール制であるため、最も充実した高度の授業がある。そこでまず、この部門に置かれている昨年度の講座名と担当教授名とを次に列挙しておこう。（ ）内は講座内容についての筆者の摘要である。[4]

1、**C**・レヴィ＝ストロース「未開民族間の宗教比較研究」（後述）

2、**J**・ギアール「太平洋の宗教」（太平洋の島々の宗教テーマの綜合的比較研究）

3、**G**・ストレッセル＝パン「コロンブス発見以前のアメリカの宗教」（教授が研究出張中につき休講）

4、**G**・ディーテルラン夫人、**C**・タルディ、**G**・カラム＝グリヨル、**L**・ド＝ウッシュ「アフリカ大陸の宗教」（マリ地区ドゴン族の儀式）

5、**E**・ロ＝ファルク「北方ユーラシャの宗教」（ヤクート族研究）

6、**R**―**A**・スタン「極東と中央アジアの宗教の比較研究」（道教とチベット―後述）

7、**M**・カルタンマルク「中国の宗教」（道教―後述）

8、**C**・アグノエール「極東の宗教―朝鮮と日本」（後述）

9、**P**・レヴィ「東南アジアの宗教」（後述）

10、**O**・ラコンブ、**M**・ビアルドー女史、**A**―**M**・エヌール女史「インドの宗教」（後述）

11、**J**・ヨヨット「エジプトの宗教」（タニスとモスタイの宗教地理学的調査）

12、J・ルクラン「エジプト的宗教伝播史」（イシス神信仰の伝播について）
13、J・ヌーゲロル「アッシリヤ・バビロニヤの宗教」（儀礼研究）
14、E・ラロシュ「ヒッタイトの宗教」（ヒッタイトの宗教の文献講読）
15、J―P・ド＝ムナス「古代イランの宗教」（ゾロアスター教の文献研究）
16、A・カコ「ユダヤ教諸派の比較研究」（イスラエル的メシヤ信仰上の諸問題）
17、G・ヴァジダ「聖書以後のユダヤ教」（中世のユダヤ註釈書にみえるソロモンについての解釈。因みに、ヴァジダ氏は「中世ユダヤ教研究」叢書を監修している）
18、H・コルバン「回教とアラビヤの宗教」（十二イマームへの精神的ズィヤーラ）
19、A―J・フェスチュジェール「ヘレニズム的宗教と異教の終焉」（鬼神信仰と魔術）
20、R・シリング「ローマの宗教」（古代ローマの典礼）
21、J・マルクス「ヨーロッパの原始宗教」（ガリヤのアーサー王伝説）
22、G・デュメジル「印欧民族間の宗教比較研究」（コーカサスの文献解読）
23、O・キュルマン「キリスト教の起源」（新約聖書の成立史）
24、H―C・ピュエシュ「古代教会史と教父神学」（「グノーシス」の定義）
25、P・ノータン「キリスト教のドグマとサクラメント」（モンタヌスについて）
26、A・グラバール、J・ラッシュ「ビザンチンのキリスト教とキリスト教考古学」（キリスト教図像学。中世ビザンチン絵画と彫刻）
27、A・ギヨーモン「東方教会諸派」（シリヤの禁欲主義）
28、P・アド「ラテン教会教父神学」（アウグスティヌスの「告白」研究）
29、P・ヴィニョー、R・ロック、J・ジョリヴィエ「中世神学史」（「無限」と終末論。アヴェロエスの知性論）
30、C・トゥゼリエ女史「中世ヨーロッパの宗派史」（カタール派の文献研究）
31、F・スクレ「キリスト教秘儀神学史」（十六世紀の予言者の系譜）
32、J・オルシバル「近代以降のカトリック史」（オランダとフランスのヤンセン派の終末）
33、R・ストフェル「宗教改革の神学とその歴史」（カルヴァンの「キリスト教綱要」における贖罪の教義）
34、D・ロベール「プロテスタントの歴史」（十七世紀末前後のフランスのプロテスタント）
35、J・ゴードメ「教会法史」（中世における教区組織）
36、P・ドヴァンベ「古代ギリシャの宗教」（昨年度は休講）

パリ大学の新学年は十月に始まるから、本稿での資料は去年の末頃に公刊の統計、つまり昭和四十二年度(1967, 10—68. 6)の「大学院年報」*L'Annuaire de l'E. P. H. E. Tome LXXV*にほとんど基づいている。この最新のデータを五年前の昭和三十八年度(1963—64)と比較してみると、次のようになる。まず、講座数について言えば12、28、30、31、が新設講座に当り、33と34とはそれまでの「宗教改革とプロテスタントの歴史」講座が分かれて二講座になったものであるから、結局、五講座増えたことになる。これを更に今から八年前の昭和三十六年度と較べれば、六講座の増設になる。

この五年間の変化は学生数にも現われている。元来、「高等研究院」入学には本人の学歴、国籍、年齢など一切の条件がつかない。授業は文献講読のゼミナールが原則であり、出欠は厳格にチェックされ、卒業には少なくとも五、六年以上はかかる。入学後数年して、指導教授と教授会との議決推薦があれば、大臣名あるいは部長名で卒業論文提出資格の免状が与えられる。この段階を titulaire と言うが、日本の制度で言えばさしずめ博士課程の修了程度に当ろう。これが論文を提出し、公開の口頭試問を通れば卒業生 diplômé(e) となるが、この資格はこれ以外のいわば外人向けの「パリ大学博士」号などよりも、フランス国内では、はるかに高く評価され、その後の進路にも有利である。後に述べる極東学院研究生になるには、ここの卒業生か大学博士である必要がある。いわば「国家博士」号に次ぐ重みを持つと言えよう。

さて、「年報」には各講座毎に学年始めの登録学生数、あるいは学年末にそれまでの数年の成績によって認めたその「修了生」の人数が公表してある。そこでその統計によってこの五年間の宗教学科の学生数の変化を考えてみると、昭和三十八年度(1963—64)は47名、昭和四十二年度(1967—68)、つまり去年六月修了の学生数は89名で、約二倍近くになっている。その89名の修了生に対して当初の学生登録総数は(講座によっては修了資格を認めた学生数しか公表していないので、いくらかそれ以外の見込数を加えると)千人以上である。修了生数の少なさを見ただけでも、入り易くして出難いことはすぐこの統計でも判ろう。その内の外国人数は二五〇人で、スイス、アメリカ、ドイツが上三位を占め、日本人の登録数はわずかに三名でしかない。(5)

ただし、大学院の宗教研究に関する講座はこの第五部門だけにすべて集中しているわけではない。他の部門、たとえば第四部門の「歴史・言語部門」IVe Section : Sciences historiques et philologiques にも内容的に宗教学に関連している講座がある(元来、第五部門はこの第四部門—一八六八年七月三十一日創設—から派出した学科である)。そのいくつかを去年の講義内容から挙げれば、「死者の書」のG・ポズネルの「エジプトの歴史と考古学」、死海文書研究で名高く、今は黙示録をテーマとするA・デュポン＝ソメールの「東洋古代史」、聖者伝のイコノグラフィを研究するP・ルメルルの「ビザンチン史」、

D—P・デュボワ「聖者伝の歴史的研究」、A・シャステル「ルネッサンス史」、中国学者オーバン女史の夫君であるJ・オーバンの「イラン中世・近代史」、フィリオザ博士の令息で印度生活が長く、シヴァ神祭祀の儀礼を研究するP—S・フィリオザの「サンスクリット」、その父君J・フィリオザの、シヴァ神のイコノグラフィとタミール研究を内容にする「インドの言語」、民間神話をテーマとするC・ヴォードヴィル女史の「現代インドの歴史と言語」、A・バロー「仏教文献研究」、A・マクドナルド夫人の「チベットの歴史と言語」、L・アンビス「中央アジアの文化と言語」、M・スワミエ「中国の歴史と言語」、B・フランク「日本の歴史と言語」等々がある。

因みに、この数年間で第五部門は東洋宗教研究で真に世界的な学者を五人失っている。「サンスクリット」講座のルイ・ルヌー、「インドネシャの文化と言語」のシャルル—ルイ・ダメ、「ヴェトナムの歴史と言語」のモーリス・デュラン、「チベットの歴史と言語」のマルセル・ラルー女史、そしてラルー女史の先師、ジャック・バコーである。しかし、彼等の弟子の中から三〇代後半の若き優秀な学者が出てすぐ後を継いでいる。

二

さて次には、以上に挙げた講座の中からいくつかとりあげて、具体的に内容を報告することにしたい。ただし、全講座にわたる解説は筆者一人には不可能事であるから、筆者の専攻する中国思想・宗教史と、それに関連する東方アジアの諸宗教の研究状態を中心にしたい。

とは言え、**第五部門**の筆頭に現われるクロード・レヴィ＝ストロース Claude Lévi-Strauss の活動に言及しないではフランスの宗教学は語れまい。構造主義を世界に提唱したこの哲学者、文化人類学者の活躍についてはいまさら紹介するまでもあるまい。「生まのものと火にかけたもの」*Le cru et le cuit* (1964)、「蜜より灰へ」*Du miel aux cendres* (1967) につづいて、昨年はいつもながらの奇妙な題名で、「テーブル・マナーの起源」*L'origine des manières de table* (1968) をあらわし、これで氏の神話学の三部作が完成した。この三部作が一体を成して、どのような相互関連性をもつかは、第三部の「序文」に詳しい。実は、「蜜より灰へ」のボロロ Bororo 族の神話は、その出版に先立つ四年前に、氏がコレージュ・ド・フランスのあの階段教室で、昭和三十八年度 (1963—64) の講義として、「自然の状態から文化への移行の神話的表象」という題名で分析した題材である。最近作の「テーブル・マナーの起源」に見えるトゥクナ Tukuna 族の神話は、その翌年度 (1964—65) に講義している。勿論、講義内容と著作内容とが完全に一致しているわけではないのであって、たとえば「生まのものと火にかけたもの」というテーマは昭和三十六年度 (1961—62) の「アメリカ神話の研究」という水曜日の方の講義に早くも出ている。これはそれより三年後に出版されることになったのであるが、その同じ年でも火曜日の講義の方は、翌年、「今日的トーテミズム」*Le totémisme aujourd'hui* (1962) とし

て出版されている。

これらの著作はコレージュ・ド・フランスの講義（後述）を基にしているとして、さて、この高等研究院での授業内容はどうであろうか。それは、氏自身の演習であるよりも、むしろ、氏の「社会人類学研究所」Laboratoire d' Anthropologie sociale[6]（コレージュ・ド・フランス内に設置）に所属する研究生、または同僚の教官や、あるいは海外から特別に参加した学者達の調査研究報告を開き、討論をする時間なのである。近年は、現地で採った録音や映画も利用している。[7]氏のゼミに参加した各国学者とテーマとは毎年実に豊富で、ここにはすべてを挙げきれない。そこで、昨年度の例だけをいくつか示すと――ウィリヤム・クロッカー博士（スミソニャン研究所）が「ブラジル中部のインディヤン、ティンビラ族の社会組織と儀式」を発表（映写つき）。ブラッシィ教授引率の下に、ルーヴァン大学から二〇数名の学生が来仏し、構造人類学の理論面と実際面との諸問題を検討し、その方法の適用について議論。ボランス女史「トゥカノ・インディヤンの神話」。メッツ「身振り言語と映画の記号学的研究」、サラダン・ダングリュール「ハドソン湾北東のエスキモー研究」、K・シッペール「台湾の民間宗教」、ヘレンシュミット「ベンガル湾の漁民ワダの社会組織と信仰」、キュイズニエ「ユーゴスラヴィヤの親族形態と経済組織」等等。これらの他には、アメリカ、ブルガリヤ、イタリヤ、ポリネシヤ、タヒチ、フランス（その地方農村）などからも報告者と調査資料が到着していて、レヴィ＝ストロースの講筵の盛んなること、想うべしである。氏の研究所内の「比較民族学資料センター」には、現在、三百余数の住民に関する一八〇万余の記録カードがある。研究所は八年前から「人類」*L'Homme*という機関誌を発行し、また、資料発表用に「人類のノート・ブック」*Les Cahiers de l'Homme*も出している。研究の対象が異国趣味ばかりではなく、自国フランスの国内、地方にさえも向けられているという傾向は、注意すべき現象であろう。

このように大学院の宗教学部門の最初に、文化人類学者の「未開民族間の宗教比較研究」という講座がすえられている現象は、フランスの宗教学の性格を既に示して、まことに象徴的である。つまり、宗教学とデュルケーム学派との結びつきである。そして、レヴィ＝ストロース自身も言うところであるが、「デュルケーム、モースはとくに思想史に関して文明史家に多くの影響を与えた。……フランス支那学の先達、マルセル・グラネの著述はすべてデュルケーム学派の影響をうけている」。[8]グラネは終生、自分は中国学者ではなくて社会学者であると主張していたそうであるが、そのグラネの方法を継ぐ現在のフランス・シノローグ、なかでも中国古代思想研究家は、研究テーマとして日本や中国自身ではあまり重視しない道教や民間信仰をとりあげ、他方、やはり現在の宗教社会学者や文化人類学者などの業績に注意することも忘れない。[9]私も、出席すべく指示された東洋学の講義リストにそれら隣接科学が大きい地位を占めているのを見て、最初驚いた想い出がある。

この傾向がドイツ・ジノロギーと違う点でもある。たとえば、デュルケームの分析とオットーの「聖なるもの」R. Otto, *Das Heilige* (1917) に関する論述は多くの重要な要素について一致している、とも言われる。そして、フランス・シノロジーはそのデュルケームの「聖と俗」などの概念を大いに援用したが、ドイツ・ジノロギーがデュルケームの「宗教生活の原初形態」(1912) の丁度少しあとに出版されたオットーの「聖なるもの」にヒントを得て新境地を開いたなどとは聞かない話である。元来、中国学のテーマにしても、フランスが宗教思想に傾くのとは対照的に、ドイツは儒教的世界・その「哲学」の方を重視する傾向らしい。[10] やはり両国の文化的特性の差を示すものであろうか。それは、フランス文学の伝統が、現実にまみれた生まの人間像の方にいつも興味を示してきた傾向と無関係ではあるまい。

さて、大学院宗教学部門のうちで、先にあげた6と7との指導教授、スタン、カルタンマルクの両教授は、実にそのグラネの直弟子である。[11] スタン R. A. Stein 教授の講義は、前半は「極東の宗教」である。近年、民間信仰と既成宗教との関連を追求しているが、最近のテーマは、囲炉裏と囲炉裏の神との構造主義的分析である。氏によれば、「このテーマに関する古文献の資料を年代的にならべても、ただそのように「発展」したかのような錯覚をいだく結果にしかならない。この民話だけをとりあげれば、様々の勝手な推論しか生れないが、これを現代に残る伝説や作法に照らし、しかも広く他の極東諸国の習俗と比較してみれば、その基本的問題点が現われてくる。囲炉裏の特性は鍋か釜をのせる三個の石または錬瓦にあり、しばしば調理場のかまどと反対の性格を帯びている。そして、これにまつわる民間伝承には三人の人物が関係している点が特徴である。」と論を進める。来日中に調査された日本の屋内構造の検討から、今後どのような結論が出されるのか、楽しみである。スタン氏の授業の後半は、例年チベット文書の解読に当てられる。一昨年は、チベットの禅と中国禅とをその頓・漸の用語を中心に検討し、昨年はボンポの文献を恐らくそのモデルとなったインドの文献と考証する授業に移られたらしいが、この面の紹介は、教授の愛弟子である山口瑞鳳氏に譲る方が良いだろう。

一方、マックス・カルタンマルク Max Kaltenmark 教授も、東奔西走、多方面にわたって活躍をつづけていられる。昨年日本を去られた後、私は台北での「第一回国際華学会議」ですぐ再会したので驚いたが、先生はひきつづきイタリヤのコモ湖附近での「第一回世界道教学会議」にも出席、発表された。演習のこまかい内容まで紹介する紙幅がないので主なテーマを述べれば、一昨年は二時間全部を道教の戒律の解明に当てられ、「抱朴子」や「正一法文天師教戒科経」(道蔵洞神部、戒律類、力字)、「老子想爾注」、善書類がテキストである。昨年度は黄庭経類の研究で、その「内景経」と「外景経」(共に道蔵洞玄部、本文類、人字)を「雲笈七籤」巻十一、十二の異本と対校し、梁丘子、務成子の注釈を検討した。[12] また、「高媒について」*Notes a' propos du* Kao-mei (*Annuaire* 1966—67 de la

Vème Section, pp. 5—34) を発表。他方、シャヴァンヌの仏訳「史記」再版に当って、補訂を施した。

先生から筆者宛の私信によれば、学生の中から次のような卒業論文が提出された。ヴェトナム人学生、ゴー・ヴァン・スエット Ngo van Xuet「後漢書方術伝の研究—とくに方士と方術とについて——」、クロード・ラル神父 le P. Claude Larre「荘子その他の文献と淮南子精神訓の比較研究」。そして、韓国の朴女史 Mlle Park は朝鮮のムダン（mudang つまり、巫師）について論文を準備中である。

第五部門の他の東洋宗教研究に少し触れると、シャルル・アグノエールは、「極東（朝鮮と日本）の宗教」では「枕の草子」三段目の「粥の木」の意味を宗教的に説明しようとする。しかし、その方法があまりに言語学的分析に偏して日本宗教史自体からの説明が無いため、充分の説得性を欠くように思われる。氏の二時間目は朝鮮の巫の説明であり、前掲の朴女史が文献講読を担当した。今年度、氏の退官後は、ドイツから若き日本宗教研究者、ハルトムート・ロッテルムント Hartmut O. Rotermund が招かれて、後継者となった。(13)

ポール・レヴィの講義では、A・ルロワ＝グルアンの「先史時代の宗教」André Leroi-Gourhan, *Les religions de la Préhistoire* J—P・ヴェルナン「ギリシャ人の神話と思想」J. P. Vernant, *Mythe et pensée chez les Grecs* E・P＝マスペロ夫人の博士論文「カンボジャの農耕儀礼研究」Eveline Porée-Maspero, *Etudes sur les rites agraires cambodgiens* などを資料に東西文化の比較がなされ、一方、東南アジア各地に派遣された研究員達の調査報告の公表会が開かれた。

「インドの宗教」では、オリヴィエ・ラコンブ Olivier Lacombe が「バガヴァド・ギーター」講読、ビアルドー女史 Mlle Madeleine Biardeau が *Mahābhārata* III 273 31—72, *Padmapurāṇa* V 42 (*Matsyapurāṇa* 161—163) によってナラシンハの神話とアヴァターラ研究、エヌール女史 Mlle Anne-Marie Esnoul がインド宗教史概説と梵語文献の学習をそれぞれ担当した。

ここで、すでに前に挙げた「歴史・言語部門」の講座の中から、漢文を資料とする宗教関係の講座の内容を示しておきたい。第一にあげるミッシェル・スワミヨ Michel Soymié 氏は、元来は宗教学部門に入るべき道教の専門家である。氏の授業は「十王経」の研究と変文・宝巻を資料とする俗文学の研究の二部に分かれている。他方、「日本の歴史と言語」のベルナール・フランク Bernard Frank 氏はヨーロッパきっての日本文学の権威であり、「古今集」秋の歌に関する説明と古代仏教における仏像諸尊の図像学的諸問題を扱っている。両氏ともに、極東全般について広い知識をもつ上に、日本語に堪能であるから、縦横に日本人学者の業績も活用し、手堅く精密な考察をとげていられるが、ここでは残念ながら全貌を示す紙数がない。

小乗仏教の戒律研究に精進をつづけるアンドレ・バロー André Bareau 教授は、「紀要」に「*Abhidharma-pañca-*

skandha-prakaraṇaśāstra の中国訳に相当する文章を訳註した。」とあるから、第一時限目は「阿毘達磨法蘊足論」（大正蔵、巻二六）の解釈に当てたらしく、昨年度はその巻六「聖諦品」から巻八「覚支品」に進み、パーリ論蔵の Vibhaṅga（分別論）と数多の相似点を発見している。第二時限目はスッタニパータの研究と、それに附随して梵語とパーリ語の文法的比較説明にあてられた。また、氏は一昨年の九・十・十一月とカンボジャに滞在して、現代のカンボジャ仏教の研究に従った。

なお、バロー教授からの私信によれば、長阿含経・仏般泥洹経・般泥洹経、大般涅槃経を、経・律蔵中に見出される他の関係文献と、梵・巴本とに照合して比較研究しており、来春には大冊として刊行予定のため、現在はそれに精力を注いでいられる由である。

大学院の宗教研究の現状に関連して、ここでどうしても、「人類学資料視聴覚センター」とでも呼ぶべき新設の一大附属機関に触れておかなければならない。それはギメ博物館の別館におかれ、その右手に隣接している。住所は、*c/o L'Annexe du Musée Guimet*, 19, avenue d'Iéna, Paris (16) その内部には、「視聴覚教育」「撮影・録音技術」を教えるコースがあり、「民族学・社会学国際委員会」があり、「極東宗教部門」（二〇一号室。部長：R—A・スタン）、「東南アジアの宗教部門」（三〇四号室。部長：P・レヴィ）、「エジプトの宗教（ファラオン研究）—Wladimir Golénischeff センター」（三一五—三一六号室。部長：J・ヨヨット）の三部門がある。

この機関の目的は、現在滅びんとする、あるいは滅びる可能性のある世界各地の民族学・社会学・宗教学関係のあらゆる生きた資料（例えば、儀式、舞踊、行事）を、音と写真、映画で記録し、永久に保存して世界的資料センターにして、万人の研究に開放しようとするものである。（前記の「視聴覚教育」「撮影・録音技術」の習得コースはその為のものである）その活動を極東部門について見れば、すでにその為の調査員が派遣されて来ている。たとえば、昨年筆者が台南で実見したところでは、台湾ですでに足かけ八年も道教研究に精進するシッペール K. Schipper 氏は、道士が死ぬとその用具を全部買い上げてはここに送り、道士祕蔵の手文も系統的に集めては写本もとってパリに届ける、という有様で、台湾在来、あるいは本土伝来の道教や民間信仰資料の主たるものはこうしてあらかたフランスの手に帰してしまった、という話である。(14) この伝統的なフランス極東学院 l'Ecole française d'Extrême-Orient（略称 EFEO）の研究方法は他国の羨やむところで、なにしろ国家が援助しているであるから、我々の一、二ケ月の調査旅行などは、それに較べればとうてい印象批評にしかなれないのは残念である。(15)

なお、大学院の宗教学部門に附属しては、この他に、「神学と神祕神学との歴史と比較研究科」（科長：P・ヴィニョー）が文学部内にあり、また、筆者旧知のJ・ルクラン氏が科長をつとめるエジプト祭祀をめぐる研究科が、「エジプト研究セン

タ」（住所：3, rue Michelet, Paris VI）にある。

最後にこの部門については、教授全員が執筆して「宗教学の問題と方法」*Problèmes et Méthodes de l'Histoire des Religions* という本が出版されたそうであるが、この原稿脱稿の段階では未見である。それは、歴史学研究者の為にプレイヤード叢書が出したあの「歴史学とその方法」*L'histoire et ses méthodes* (*la Pléiade*, 1961) に匹敵する立派な仕事であろうか。

これに附随して想い出されるのは、若手の東洋宗教研究者達が、*Sources orientales* (Editions du Seuil, Paris) を出している。それは「儀礼舞踊」や「聖地巡礼」などの宗教学的テーマ別に東洋諸国の思想をまとめたユニークな叢書である。一方、ベルギーで編集され、フランスで発刊された「世界の宗教」La Collection *"Religions du Monde"* (Librairie Bloud & Gay, Paris, 1964—67) という叢書がある。これは各国の宗教についてその国の出身者が執筆する編集方針をとっているのが特徴である。また、辞典で有名なラルース社もテーマ別に編集した *Larousse générale méthodique* 三巻を発行し終えた。共に日本の部分は筆者が担当している。

東方アジアに関する最近の宗教学・宗教社会学関係の欧文出版物については、「社会学年報」*L'Année sociologique*, 3ème série. Vol. 16, 1965, pp. 275—380, 特にオーバン夫人 Mme F. Aubin 執筆の pp. 321—364 が有益である。

III

以上述べてきたパリ大学高等研究院（＝大学院）の講座の他には、文学部（いわゆる「ソルボンヌ」）とコレージュ・ド・フランスとに宗教研究に係わる講座がある。内容の面から宗教研究の一部と見なされる講座名をまず**文学部**からあげると、四年前頃では次のようであった。（ ）内は筆者が要略した具体的な講座内容である。(16)

H・グィエ「十六世紀以来のフランスの宗教史」（ルッソー、ディドロー、パスカル）O・ラコンブ「比較哲学」（インドと西欧の形而上学における「存在」の意味）V・ジャンケレヴィッチ「倫理と倫理哲学」（プロティノス「エンネアデス」について）G・ギュルヴィッチ、R・アロン「社会学」（デュルケーム、ヴェーバー、パレートの講義と文献講読）ド・カンディヤック「哲学」（聖アンセルムス、トマス・アクィナス研究）H—I・マルー「キリスト教史」（三世紀のローマ帝国。五・六世紀のキリスト教）M・モラ「中世史」（十四・十五世紀の教会と宗教生活。中世の貧困面）L・ルヌー「インドと東南アジアの文明」（ヴェーダ文献解説）J・ボワッスリエ「東南アジアの考古学」（「美術・考古学研究所」設置の講座）M・シュジニ、P・レンツ＝メドック「ドイツの文学と文化」（十九世紀のドイツの宗教。ショーペンハッワーからニーチェへの哲学と宗教）P・ルヌーヴァン「現代史」（宗教運動と国際関係）M・ジラール「近代史」

（十九世紀後半の西欧のカトリック教）A・デュプロン「近代史」（十八世紀後半におけるキリスト教宗教会議）A・ルロワ＝グルアン「民族学一般」R・バスチッド「社会・宗教民族学」（双児の神話と信仰。原始社会の教育）G・バランディエ「アフリカ大陸の民族学」（救世主的・予言者的運動）M・アルル夫人「古典期以後のギリシャ文学」（古代キリスト教の言語と思想のギリシャ的表現）

次には、**コレージュ・ド・フランス** Collège de France の宗教関係講座を挙げる。この市立大学（一五三〇年創立）は、日本の制度にあてはめて判りやすく言えば、学士院か芸術院が公開講座を開いているような機構である。[17] フランスで最高の学問がこうして一般庶民にまで公開されているのであり、授業は「講演」を原則とする点がパリ大学大学院のゼミナール中心と違うところである。[18] 全講座は三部門に分かれている。宗教学と東洋関係の講座をえらんで示すと、まず第二部「哲学・社会学」部門には、

H―C・ピュエシュ「宗教学」（後述）
C・レヴィ＝ストロース「社会人類学」（後述）

第三部「歴史学・文献学・考古学」部門には、

R・ラバ「アッシリヤ学」（バビロニヤ神学におけるマルドゥクの五〇の名称。バビロニヤの天地創造詩篇）G・デュメジル「インド・ヨーロッパ文明」（後述）G・ポズネル「エジプトの言語と考古学」（コンスー神研究）A・デュポン＝ソメール「ヘブライ語とアラム語」（死海文書研究）P・ミュス「極東の文化」（昨年度は休講。今年度はヴェトナムの文化や、仏塔と輪廻の関係を講義の予定）J・フィリオザ「インドの言語と文学」（インドの医学理論を通してインドの科学精神をさぐり、一方、古代タミール語の詩作品解説）L・アンビス「中央アジアの歴史と文明」（匈奴研究――タラーズ地方発掘の副葬品とヴォルガ川下流域の墓地比較研究）[18]
R―A・スタン「中国的世界の研究――制度と概念」[19]（後述）

右の例は、その年に宗教に関するテーマを扱っていた講座も含んでいるので、ここで挙げなかった講座でも（たとえば文学部で、ジェルネ Jacques Gernet「中国の言語と文化」、シュール P.-M. Schuhl「古代哲学史」）、年度によっては宗教研究をテーマにとる場合もあるわけである。純粋に宗教研究を講座名に掲げているのは、大学院に較べれば、少ない。これらの中には、前述の大学院の講座内容と重複したり、同一教授が兼担している講座もある。そこで、紙数の制限もあり、ここでは**コレージュ・ド・フランス**のいくつかの講義内容のテーマを記するに留めたい。

まず、アンリ＝シャルル・ピュエシュ Henri-Charles Puech の「宗教学」（この講座は一八八〇年に開創）。氏はここに附属する「宗教学研究室」の主任で、また、「宗教史宗教学」誌 ***Revue de l'Histoire des Religions*** の主幹でもある。第一時限目のテーマは、昭和三十二年（1957）頃から続く「トマスによる福音書」の研究で、昨年度はその中の「祕儀的教義とグノーシス的テーマ」を考え、一応の結論を出した。教授の目的

は、コプト版の「トマスによる福音書」の中に祕められる「人類学的な」教義を検討しようとするところにあった。第二時限目は、これも前者と同じ頃に始められた「マニ教の儀礼研究」で、昨年度はその叙階の比較分析的研究であった。因みに、氏の「マニ教。その開祖と教義」*Le manichéisme. Son fondateur, sa doctrine* (P.U.F. 1969) が待望久しく再版されたことを喜びたい。

この講座のみならず、これまでの講座に多く「儀礼研究」が見られたが、それは、儀礼研究がなくては、宗教学は成り立たないからである。単なる教義研究のみでは、哲学研究と区別がはっきりせず、「宗教」を研究しているとは言えない。

クロード・レヴィ＝ストロースの「社会人類学」（講座開設一九五九年）については、大学院宗教学部門ですでに触れておいた。去年は、原地資料の分析よりも、そうしたこれまでの神話の比較研究の結果を基に、神話研究の「方法論」の話に多くを費やしたようである。

ジョルジュ・デュメジル Georges Dumézil は今年で退官。三十年来、印欧語族の神話思考形態の中に一体化して潜む三種のチーマを発見し、あとづけて来たが、「神話と叙事詩」第一巻 *Mythe et épopée I. L'idéologie des trois fonctions dans les épopées des peuples indo-européens* (Gallimard, 1968) として公刊し始めた。一方、十年来続けてきたローマの起源に関する伝説の調査研究にも一応の結論を与えている。

R—A・スタンについては、大学院の項でも触れたが、ここの第一時間目は、「太真玉帝四極明科経」（道蔵洞真部、戒律類、雨字）、「周氏冥通記」（同上、記伝類、翔字）、「女青鬼律」（洞神部、戒律類、力字）などを資料にして、誓約に関する古代の観念がどのように道教徒によって利用されたか、を示そうとした。第二時限目は、「文化の発祥についてのボンボの物語」と題して、*Klu-'bum* の内容がモッソ族の物語や敦煌文書と比較検討された。来日中お聞きしたところでは、先生はこうして東洋全般の宗教を研究してから、最終的には「宗教現象学」を構成したい意向のようである。

なお、昨年五月には、ローマ大学のルチアーノ・ペテック Luciano Petech 教授が、「清朝下のチベットの貴族階級と政府」「十八・十九世紀のチベットの上流階級の数例」という題で、特別講義を行った。

以上の他にも、「ドミェヴィル先生退官記念号」第一冊 *Mélanges de Sinologie, offerts à Monsieur Paul Demiéville.* tome I, Paris, 1966（一昨年、先生は日本学士院客員会員に推挙された[20]）の中の宗教学関係論文や、キリスト教の今後の儀礼・制度改革問題、等々、書くべき対象はまだ多々あるが、紙数も尽きたので今回は（冒頭に述べたように）学界関係の宗教研究の近況に限定し、他はすべて別の機会に譲りたい。

註(1) これら以外でパリ大学にしかない講座は、熱帯アフリカの社会学、東西比較哲学、古代セム語、イラン文明史（イラン語はストラスブールにもある）、日本文化と

文学、朝鮮研究、などである。

(2) ストラスブール大学については、同神学部を卒業後、パリにも留学した畏友、波木居純一氏（現横浜国立大学助教授）が最も詳しいであろう。

(3) 本稿で触れるパリ大学の機構や講座についての詳細と、それの昭和四〇年（1965）前後の動向については、日本道教学会機関誌「東方宗教」第27・28・30号（1966. 9・10; 1967. 10 東京）連載の拙稿、「フランス東洋学の近況—中国学を中心として—」（上）（中）（下）に譲りたい。それと本稿とを比較すれば、おのずからこの五年間の推移も判る筈である。また、それまでのフランス東洋学の歴史については、P・ドミェヴィル、大橋他訳、「フランスにおけるシナ学研究の歴史的展望」（上）（下）（「東方学」第33・34号連載）が最も詳しい。

なおまた、フランス各地の宗教界の歴史的地理的情況については、*Guide religieux de la France* (Bibliothèques des Guides Bleus), Librairie Hachette, 1967 という充実した「フランスの宗教案内」が発行されている。

(4) Philologie は今日では文献学の意味であるが、日本語構文の体裁上、「言語」と訳しておいた。また、教授名の読み方はすべてフランス語式である。紙数の関係から原語は多く割愛し、また敬称もおおむね省略に従った。

(5) フランス史・フランス語研究がある第五部門の「歴史・言語部門」にしても十一名である（「日本文学」への相当数の参加者も含む）。ここにはフランス現代文学の講座がないからとは言え、学部（＝ソルボンヌ）ならば講義を聴講していれば大体すんでしまうからであろうか？

(6) コレージュ・ド・フランスには、これ以外にアッシリヤ学研究室（R・ラバ室長）、エジプト学研究室（G・ポズネル室長）、ヘブライ・アラム語研究室（A・デュポン＝ソメール室長）が附設されている。

(7) 本稿113頁の下段記事、参照。

(8) レヴィ＝ストロース著、加藤訳、「フランス社会学」（『二十世紀の社会学』Ⅳ）三、五、九頁。氏自身も、ポール・ペリオ賞に輝やく「親族の基本構造」*Les structures élémentaires de la parenté* (1968, 再版) で、「グラネの理論」に一章をさいている。また、日本の東洋学界にはほとんど知られていないが、氏には東洋に関する考古学的・美術的論文がある。「アジアとアメリカの芸術における二分割的表現法」*Le dédoublement de la représentation dans les arts de l'Asie et de l'Amérique* (Renaissance, Vol. Ⅱ et Ⅲ, New York, 1945, pp. 168—186)「シリヤ・インド伝来の使途不明の陶器の二、三について」*Sur certains objets en poterie d'usage douteux provenant de la Syrie et de l'Inde* (Paul Geuthner, 1950)

(9) 拙訳のJ・ジェルネ著「古代中国」(クセジュ文庫)にしても、いかに多く隣接科学の成果をとり入れていることか。

(10) H・フランケ著「ドイツの大学における中国学——歴史と現状——」Herbert Franke, *Sinologie an deutschen Universitäten* (Wiesbaden, 1968) を参照。同じ年に、この英訳が出た。*Sinology at German universities* (Wiesbaden)

(11) お二人とも最近来日して、講演や調査旅行をされた。スタン氏の講演要旨は「東方宗教」誌第33・34号(昭44、11)、参照。カルタンマルク氏の日本での活動は、「三康文化研究所年報」第二号(1968)、「日本中国学会報」第二十集(1968)の「国内学界消息欄」三〇四頁を参照。また、日本に中法漢学研究所に類する研究所を設ける準備の為の使命をおびて、今秋も来日された。

(12) この講義は、先生が早大客員教授として滞日中に大学院ゼミとしても続けられた。詳しくは前註所引の「消息欄」参照。

(13) ドイツに出した博士論文は、「山伏—日本中世におけるその信仰、生活、社会的機能の諸様相」*Die Yamabushi. Aspekte ihres Glaubens, Lebens und ihrer sozialen Funktion im japanischen Mittelalter* (Hamburg, 1968) 不思議とドイツ人には、この他にもP.G. Schurhammer, T. Immoos, U.A. Casal などの山伏研究者が多い。フランスでは、故ルノンドー将軍の「修験道」G. Renondeau, *Le shugendo* (1964) が名高い。

(14) その研究調査報告を、既述のように、中国学のではなくて、レヴィ＝ストロースの演習で語ったという現象に注意されたい。(本稿110頁、参照)

(15) 同様の意味で、今春、元来は道教研究者のA・ザイデル女史 Mlle Anna Seidel が、日仏協同編集の仏教辞典「法宝義林」の研究員の資格で来日した。

(16) 「パリ東方の十二区にあるヴァンセンヌの森 Vincennes に、非常に近代的な一大学が新設された。すでに八、九千人の学生がおり、その内の約百二〇人が中国学専攻である。」とは、そこの新設中国学科主任のエルヴーエット教授 Y. Hervouet からの私信の一部であるが、そこの宗教学科の詳細については未詳。

(17) 詳しくは、註(3)所引の拙稿の上編を参照。

(18) ドミェヴィル Paul Demiéville 先生が退官のあと、長い伝統の「中国語・中国文学講座」は途絶えて、この講座がとって代った。

(19) ガスパルドンヌ Emile Gaspardonne 教授の「インドシナの歴史と哲学」の改名講座である。

(20) 東洋学の世界的泰斗、ドミェヴィル先生の経歴と業績とについては、辻直四郎先生による記事が最も詳しい。「日本学士院紀要」第二五巻第三号(昭和四二年十一月) pp. 202—206 参照。

——昭和44(1969)年6月稿——

セイロンにおける寺院の仏教

前田恵学

内　容

まえがき
一　寺院の建造物
二　仏歯寺とその周辺
三　僧侶の教育
四　失なわれた托鉢
五　布教と読経
結びに代えて

まえがき

仏教教団のセイロン社会における存在の形態を見るとき、これを大きくハーミテジ（hermitage）の仏教と寺院（temple）の仏教とに分けることができよう。前者は人里離れた森林（araññā）にその居を求め、hut（kuṭi）を結ぶから、アランニャの仏教と言いうる。[1] 後者は都会や村落の寺院に根拠をもつもので、pansala（僧院）[2]の仏教とも言うことができる。一部にセンターの名をもつ、自由な新しい形式が生まれているが、[3]これも一応は寺院の中に含めて考えることができる。

このうちハーミテジの仏教は、専ら自己のさとりを求め、修行に専心する人に適した形態である。一切の世俗的なものから離れて、精進することができる。修行者の生活であるから、強い意志と忍耐が要求される。従って寺院生活を営む比丘に比べれば、その数はあまり多くない。セイロン全土に、どれほどハーミテジがあるか、人によって言うところの数字に相違がある。大きなハーミテジをもつアランニャが、全国に十数カ所あり、計二―三〇〇人くらいの比丘がいると言った人もある。しかしこれは、その人の所属するグループのみに関する数字だったのであろう。事実はもっと多いようである。セイロンでは、寺院所住の比丘に比較して、アランニャ所住の比丘に対する尊敬が高まっている。外護者を見出すことも、それほど困難ではない。比丘自身も、寺院生活が上座仏教本来の姿から遠ざかることを反省し、アランニャに移る人がふえている。最近アランニャ所在の三〇〇人ほどの比丘が、新しい一派を結成した。Siyamopāli Vanavāsi Saṅghasabhā という。かれらはセイロン各地の三五のアランニャに住していたもので、いずれもマルワッタのシャム派に所属していた。[4]しかしこの新派はシャム派と違って、ゴイガマ以外のカースト出身者にも、入団を許すという。Watuluvila 村の Tibbotuwawa という田舎に本部と pirivena を設け、Sri Ñāṇānanda Vanavāsa Mahāthera をその代表者としている。新グループ結成にあたって、キャンディの仏歯寺に礼拝供養したのち、マルワッタ・アスギリヤの両

Mahānāyaka Thera をはじめとする一〇〇人の比丘を招いて、八要員（aṭṭhaparikkhāra）を布施したという。一九六八年一一月に政府（Department of Home Affairs）に登録して、正式に認可された。(5)

ハーミテジの仏教は、今日セイロンでブーム状態にあるが、仏教教団の主力をなすのは、やはり寺院の仏教である。セイロンの寺院は、一九五九年現在で、その数およそ五六二〇を数える。一万数千人にのぼる圧倒的に多数の比丘が寺院に住し、社会に対してきわめて大きな影響力をもっている。寺院は、ハーミテジとは異なる社会的機能を果している。ハーミテジが比丘自身の修行の場であるのに対し、寺院は出家者が世俗の世界と接触する接点であり、比丘が社会的活動をする根拠地である。仏教がナショナリズムと結びついたセイロンでは、寺院は民族意識を高揚するにない手として、重要な役割を果している。そこで本稿では、寺院を中心とする仏教の在り方について、述べたいと思う。

註（1） ハーミテジの仏教については、拙稿「セイロン仏教学術調査中間報告」（金倉博士古稀記念『印度学仏教学論集』三五一頁以下）参照。

（2） pansala は paṇṇasālā がシンハラ語化したもので、もとは文字通り〈草庵〉を意味した。のちには monastic residence ならば、どんな形のものもこのことばで呼ばれ、現代のモダンな仏教寺院も pansala と言われる。（Walpola Rahula : History of Buddhism in Ceylon. Colombo 1956, p. 116, note 1）。

（3） International Buddhist Centre や Vipassana Bhavana Samitiya など、従来の寺院が仏塔や仏殿を中心として構成されているのに対し、伝統的な寺院形式にとらわれず、自由な立場から、国際活動とか冥想とか、それぞれの目的に合わせて建設されたもの。

（4） マルワッタが寺院仏教を代表するのに対し、アスギリヤは本来アランニャの仏教の中心であった。しかし今日ではアスギリヤもまた寺院化して、本来の意味を失なっている。

（5） Rev. R. Seevali Thera の資料提供による。

一 寺院の建造物

セイロンの寺院が、社会に対していかなる態勢を持しているか。寺院建造物の在り方が、その一班を物語っていると見ることができる。寺院の構成を一般的に言うならば、境内の中心にくるのは、多く仏殿（budugē, vihāragē, shrine room）である。仏殿の起源は、仏塔や菩提樹よりも新しいが、今日では寺院境内の中心的な建造物となっている。(1) 古いパーリ語注釈書の時代（西暦五世紀以前）には、冥想生活をする比丘の行作として、仏塔と菩提樹に礼拝し、托鉢にでかけることが説かれている。しかし仏像や仏殿に礼拝することは、完全に無視されている。(2) 四世紀以後セイロンで、仏像や仏殿の製作が盛んになった

が[3]、この状態は変らなかった。これが一般的になったのは、五世紀以後と思われる。一〇世紀になると、仏殿に灯明をともす設備に言及する資料が見出されるようになる。しかし仏殿の明確な概念を得るのは、ポロンナルワ（Polonnaruva）時代（一二世紀）の考古学的遺跡によってである[4]。

仏殿に入ると、入口の左右には、しばしばヴィシヌ神やカタラガマないしスマナの神像が見られる。守護する意味である。内部正面の扉をあけて入ると、奥に釈尊の座像・立像・涅槃像、そのまわりに舎利弗・目連・阿難などの弟子の像が置かれている。また堂内の外側には廻廊部があり、仏伝やジャータカの故事来歴の物語を示す人形や彫刻が、どきつい原色調で並んでいる。この仏殿は、礼拝のためばかりではなく、たくさんの像を見せて、その間に平素説教で教えているような物語や十波羅蜜の精神を想起せしめ、かつまた仏徳を讃歎するためのものであると思われる。

礼拝のための中心になるのは、古くは仏塔であり、本来寺院における最も重要な建造物であった[5]。仏塔ということばは、もちろん thupa の訳語であるが、cetiya もしくはセイロン語で dāgāba と呼ばれることが多い。仏塔の周囲には、白砂の庭があったり、敷石が敷いてあったりする。四方には適当に献花し礼拝する場所が設けてある[6]。仏舎利（sarira）の存在は、仏陀自身の存在に等しいという信仰は、シンハラ・ブッディストの心に深く刻み込まれたもので、仏舎利をまつる仏塔の建立は、セイロン仏教の最初期からあった。仏舎利をまつる本来の仏塔を特に sarira-cetiya（仏舎利廟）と称し、仏像をまつる仏殿を uddissa-cetiya（表示廟）、また菩提樹や仏陀の使用された鉢をまつるものを paribhoga-cetiya（受用具廟）と称することがある[7]。三つの cetiya の中でも、sarira-cetiya が、起源古くして最も重要である。しかし今日では、仏殿が寺院の境内の中心となり、仏塔や菩提樹は、寺院の一隅に位置していることが少なくない。

菩提樹（Bodhi-tree）の崇拝は[8]、仏舎利をまつる仏塔崇拝と同じく、セイロンに仏教が渡来した最初のころから存在していたと思われる。セイロンへの仏教初伝（前三世紀）ののち間もなく、ブッダガヤーの聖菩提樹の南枝がアヌラーダプラに将来されたと言われる[9]。菩提樹はセイロンならどこでも生育する。今日菩提樹は神聖視され、特に定められた場合を除き、その枝を切ってはならぬとされる。無暗に枝を切れば罪悪と見做される。注連縄様のものを張り、根元に壇を築いて高くし、周囲をかこい、木の下に礼拝所を設け、時に仏像を安置する。また祠や寺が建てられる。各地には、民衆から特別深く信仰を受けている菩提樹も見られる[10]。

次に講堂（dharmasālā, preaching hall）がある。講堂は民衆に説教するための建造物であり、広い空間と、説教するため正面に講壇その他多少の工夫が見られる。説教は、古くはその目的のためにつくられた dhamma-maṇḍapa（法堂）において行なわれた。また padhānaghara（冥想堂）も用いられた。これは本来 meditation のための建造物であって、日本の禅宗で

言えば、座禅堂にあたるもののようである。セイロン古代の大寺院にとっては、重要な構成要素をなしていたはずである。かなり早くから、その本来の意味を失ない、僧院長（the chief monk of the monastery）の部屋、もしくは説教のためのお堂となってしまったらしいことは、興味ある事実である。恐らくこれは、セイロンの寺院では、あまり meditation が規則的に行なわれなかったことを示すのであろう。[11]

それから重要なのは、僧侶が住するための僧房（lagumgē, living house）である。僧房には、住職（high priest）以下、師弟等の関係で結ばれた数名もしくはそれ以上の比丘や沙弥が住する。多くはいくつかの小部屋に分たれ、住職室・客間・寝室・貯蔵室・食堂・炊事室・便所等から構成されている。大きな僧房になると、数個もしくは十数個以上の僧房の集合体を成すものがある。キャンディのマルワッタやアスギリヤはその代表例である。

戒律を守り、身を清浄に保つことが比丘にとって最も重要であることは、寺院所住の比丘もハーミテジ所住の比丘もかわるところはない。毎月の満月・新月の日などに行なわれる布薩は、これを保証する神聖な行事である。特定の大寺院には、僧房のほかにシーマーに囲まれた布薩堂（uposatha-house）があ[12]る。布薩の日には、布薩堂をもたない寺院からも比丘が集まる。何ぴともかいま見ることのできない比丘だけの厳粛な儀式が行なわれる。

大寺院の中には、書庫（library）を備え、写本や印刷した経典類を所蔵しているものが少なくない。こうした設備は、西暦五世紀以前より存在していたと思われるが、文献上直接書庫に言及されるのは、一二世紀 Parākramabāhu 一世の時代になってからである。[13] 書庫に所蔵された経典類は、読むための書物というよりは、拝むための宝物という感じが強い。特に写本に対してその感が深い。

そのほか、鐘楼（gāntāraya）や警備所（murage）などが、寺院の境内に見られる。

註（1） Walpola Rahula: History of Buddhism in Ceylon, Colombo 1956, p. 121 note 4.

（2） Walpola Rahula, ibid. p. 126.

（3） インドにおける仏像崇拝の起源は、西暦前一世紀末葉にまでさかのぼるという（高田修博士『仏像の起源』四一五頁）。

セイロンにおいては、Anurādhapura の Thūpārāma の中に、前三世紀に Devānampiya Tissa 王の手によって、大石仏（urusilāpatimā）が建立されたとの伝えがある（Mahāvaṃsa XXXVI, 128）。これが事実とすれば、世界最初の仏像である。しかしこの伝えは、Jeṭṭhatissa 王（三一三年―三三三年）の事蹟に関聯して物語られたものであり、事実とは認め難い（cf. Walpola Rahula, ibid. p. 122 f.; D. T. Devendra: The Buddha Image and Ceylon. Colombo 1957, p. 31 f.）。

(4) Walpola Rahula, ibid. p. 129.

(5) 因みに、この点から筆者はいわゆる〈大乗仏塔起源説〉には疑問を抱いている。仏陀時代の竹林精舎や祇園精舎に仏塔が存在したはずはないが、紀元前三世紀頃にはすでにセイロンに仏塔中心の寺院形態が存在していた。仏像出現以前の寺院が、インドにおいても仏塔中心の構造を有していたであろうことは、想像に難くない。とすれば、たいていの寺院には仏塔があったということになりはしないか。われわれ日本人は、寺院と言えば、仏殿中心に考えるから、仏塔から大乗が発祥したと言えば、新らしい事実のように聞えるが、インドにおいて仏塔から大乗仏教が発祥したということは、単に寺院から大乗仏教が生まれたというにすぎず、至極当然のことであろう。これでは大乗の起源を明らかにしたことにはならないと思う。ただ単に arañña の形態からではなかった、というくらいの意味となる。

(6) Walpola Rahula, ibid. p. 117—120.

因みに、献花・献灯・献香もしくは献食の際には、それぞれ唱えるべき文句があるが、仏塔の前でお参りする時は、次の句を唱える (Narada Thera: The Mirror of the Dhamma 1963, p. 13 による)。

vandāmi cetiyaṁ sabbaṁ,
sabbaṭṭhānesu patiṭṭhitaṁ,
sārīrikadhātu-mahābodhiṁ,
buddharūpaṁ sakalaṁ sadā.

(I salute every Cetiya that may stand in any place, the bodily relics, the Great Bodhi, and all images of the Buddha.)

(7) Dhammapada Commentary. III, p. 251; cf. E. W. Adikaram: Early History of Buddhism in Ceylon. Colombo 1946, p. 135—141.

(8) Cf. E. W. Adikaram: Early History of Buddhism in Ceylon. Colombo 1946, p. 139—141; Walpola Rahula: History of Buddhism in Ceylon. Colombo 1956, p. 120—121.

(9) Dipavaṁsa XVI (p. 86); Mahāvaṁsa XVIII (p. 274).

(10) バスがその前で停まり、運転手や車掌が降りて拝んでから通過する菩提樹もある。そこまでしなくとも、車の上から礼拝して通る菩提樹は少なくない。ベラデニヤのレスト・ハウスの近くにある菩提樹も、多くの人の信仰を受けている一つである。聞けばあるとき洪水があって、菩提樹附近だけが助かったという。爾来民衆から厚い崇敬を受けるにいたり、今では寺祠も建立されている。因みに、菩提樹の前では、次の句を唱える。(Narada Thera: The Mirror of the Dhamma, 1963, p. 12)

yassa mūle nisinno'va,
sabbāri vijayaṁ akā,

patto sabbaññutaṁ satthā,
vande taṁ bodhipādapaṁ.

(Seated at whose base, the Teacher overcame all foes, attaining omniscience,—that very Bodhi-tree do I adore.)

ime ete mahābodhi,
lokanāthena pūjitā
aham'pi te namassāmi,
bodhirājā namatthu te.

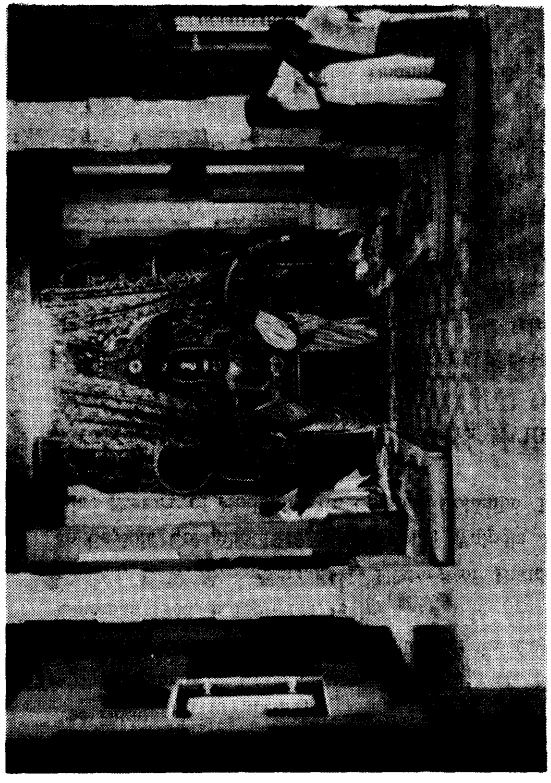
(Those great Trees of Enlightenment, reverenced by the Lord of the world,—I, too, shall salute you! May there be adoration to you, O royal Bodhis!)

inda nīla-vaṇṇa-patta-setakanda-bhāsuraṁ,
satthunetta-paṅkhajābhi pūjitagga sātadaṁ,
agga bodhi nāma vāma-deva rukkha sannibhaṁ,
taṁ visāla-bodhipādapaṁ namāmi sabbadā.

(Blue sapphire-hued leaves, white trunk, brightly shinning reverenced by the lotus-like eyes of the Teacher, and yielding the highest blessing, namely, the ultimate Enlightenment—that mighty Bodhi, like unto a glorious tree celestial—daily do I salute!)

(11) Walpola Rahula : History of Buddhism in Ceylon. Colombo 1956, p. 133.

(12) 下の写真は，キャンディのアスギリヤにある布薩堂



アスギリヤ Uposatha-house の内部

の内部である。マルワッタのもほぼ同じ構造である。正面仏像の前、左右の最上座には、Mahānāyaka Thera, Anunāyaka Thera が坐し、次いで律蔵に精通する持律師（vinayadhara）が左右に分れて着座する。以下二列に分れ、列柱を背にして、法臘順に向い合って坐る。W. Rahula Thera の報告によれば、uposatha-house は、現代セイロンの僧院に欠くべからざる建築物であるが、普段は住居として用いられている。uposatha の儀式は、定期的に行なわれず、安居の季節にのみ用いられているようだ（History of Buddhism in Ceylon. p. 133—134）という。しかし、uposatha-house を住居に用いず、uposatha も毎月一回か二回、もしくは二カ月に一回くらい行なっているところもある。

また sīmā の境界は、もともと比丘らが uposatha を行なうための、余人の立ち入りを禁ずる区域であるから、しばしば水上に設備をして作られる。なお sīmā なることばの、現代における意義については、G. Obeysekere, The Buddhist Pantheon in Ceylon and its Extensions. Anthropological Studies in Theravada Buddhism. Yale University. 1966, p. 16 f.

(13) Mahāvaṃsa LXXVIII 37; cf. Walpola Rahula: History of Buddhism in Ceylon. Colombo 1956, p. 134.

二　仏歯寺とその周辺

セイロン国民の仏教信仰の中心を成す大本山とも言うべきは、キャンディの仏歯寺（Daladā Māligāwa, Temple of the Sacred Tooth Relic）である。Vimaladhammasuriya 二世（一六八七年—一七〇七年）によって創建せられ、Kittisirirājasiha（一七四七年—一七八一年）によって再建されたと言われる。(1) この寺の有名な八角堂（pattirippuwa）は、キャンディ王朝最後の Sirivikkamarājasiha（一七九八年—一八一五年）の手によって加えられた。(2) 仏歯寺の管理は、現在シャム派（Siyam Nikāya）の二大精舎すなわち Malvatta Mahāvihāra, Asgiriya Mahāvihāra と仏歯寺の中に事務所をもつ Diyawadana Nilamē との三者で共同して行なっている。この管理方式は、一九世紀中期以後のことである。

Diyawadana Nilamē は、仏歯寺の在家の管理者であり、ことばの意味は、'waterpresenting officer'（灌水官）とも言うべきもの。西欧植民地支配以前、仏歯の祭典を遂行したのは、キャンディの国王であった。祭典にあたって国王の手に水を注ぐ役があり、国王によって任命された。今日の Nilamē は、政府役人・特定寺院の管理者並びにマルワッタとアスギリヤの両チャプターによって選ばれる。その任期は一〇年であり、すぐれた Nilamē は再任される。セイロン最大の寺院の在家頭領として、財産管理をなし、寺の仕事に決裁を与え、あわせて仏歯の展観に責任を有する。年間最重要な義務の一つは、エサラ

・ペラヘラ祭（Äsaḷa Perahāra 七月―八月）である。[3] この祭のページェントにおいて、仏歯の行進を指揮する。またNiamē は、仏歯寺に関わる役員を任命する。これらの宗教的職能を遂行する人々は、多く父祖伝来の世襲の権利を所有しているが、それでも Diyawaḍana Niamē によって任命されることを要求する。この office は、いかなる政府部局や名誉職・階級とも結びついてはいない。しかしイギリス支配下にあったころからの一般的傾向として、Diyawaḍana Niamē は高い市民階級に属し、国家的な名誉が附せられていた。ペラヘラ祭のパレードにおいては、最も華麗な装いをつける。そしてすべての寺院役員と同じく、Sinhalese Buddhist の誇り高き Kandyan から選ばれる。一八一五年に滅亡したキャンディ王朝の残した貴重な遺産、すなわち仏歯を永久に保存することをその任務としている。[4]

仏歯寺を囲む地域一帯を、聖域として環境整備することは、仏教徒の願うところである。すでに Anuradhapura や Polonnaruwa 等の古代遺跡が、聖域として整備せられた例がある。仏歯寺についても、近接する建築物等を移転するように要求している。仏歯寺は、裁判所や政府の部局や教会や法律事務所その他の建物で囲まれていて、今日ではこの霊場を拡張する余地がない。この聖域の中に、キリスト教の教会があることは、仏教徒を刺戟している。またかつてカトリック教徒であった最高裁判所の裁判官が、裁判の進行にさまたげになるという理由で、仏歯寺の太鼓を停止するよう命令したことも、忘れられてはいない。[5]

仏歯寺に対するマルワッタとアスギリヤの High Priest の関係は、イングランド教会（The Church of England）に対するカンタベリーとヨークの大僧正職（Archibishoprics）に似ているとせられる。[6] そのうちマルワッタ大精舎は、キャンディ湖をはさんで仏歯寺に相対峙する位置にある。総計約一五〇名ほどの比丘が、二〇ほどの僧房に分れて住している。二〇名から成る僧伽委員会（sanghasabhā）が構成せられ、大導師（Mahānāyaka Thera）一名、副導師（Anunāyaka Thera）二名、差配（secretary）一名が選ばれる。マルワッタの大導師はまた、シャム派の比丘全体の大導師でもあり、セイロン最高の名誉ある地位である。

マルワッタに所属する二〇の僧房の中でも、Saṅgharājārāmaya は最古の歴史をもつ。初代の住持（High Priest）たる Väliviṭa Saṅgharāja Thera（一七七八年歿）は、そもそもこの大精舎（Mahāvihāra）全体の創始者でもある。Saṅgharājārāmaya の一室は、Väliviṭa Saṅgharāja Thera の遺品を集めて、小さなミュージアムを成している。[7] 経典写本・書巻・衣鉢・扇その他日用品まで集め、一比丘の持物としては高価なものが揃っている。現在の住持は、Väliviṭa Saraṇaṅkara Mahāthera で、きわめて高齢である。寝室、応接室・事務室の三室が、この長老の居室にあてられている。ほかに B. Seelawansa Thera という侍者の部屋など、この僧房には一〇室あるという。他の僧房も大同小異のものである。

マルワッタ大精舎全体を代表する大導師は、Śāstravisārada Vinayachariya の敬称をもつ Ven. Amanugama Rājaguru Siri Vipassi である。この大導師の住する僧房は、Saṅgharājārāmaya からやや離れた一群の建物の中にある。部屋の造りは、Saṅgharājārāmaya よりも質素であり、格差があるように見える。大導師は、円満な親しみ多い人で、全教団の大指導者という態度ではない。来日の経験など、きさくに語る。しかし非常に大きな発言力をもったセイロン有数の実力者の一人である。

アスギリヤ大精舎は、仏歯寺からかなり離れた山手にある。六〇余名の比丘が一六の僧房に分れて住しているという。その中から二〇人の委員（member）を出して委員会（Committee）を構成し、Mahānāyaka Thera 一名、Anunāyaka Thera 一名を選出している。Mahānāyaka Thera の Yatawatte Dhammānanda Kirti Sri Sumaṅgala Dhammaratana Thera は、八七才（一九六五年現在）の高齢であり、社会的にはほとんど活躍できない（翌年死亡されたと聞く）。Anunāyaka Thera は Udugama Sri Ratanapāla Thera（当時七二才）である。口に南方特有の betel-leaf（tambūla）をかみ、豪快な笑い方をする人である。アスギリヤ大精舎は、境内中央に布薩堂を置き、その周囲に一六の僧房を配置するという構成をとっている。布薩堂は、マルワッタ大精舎にもあり、その建物の構造は同じである（六五頁注一二参照）。

註（1）　Cūlavaṁsa 97. 4 f. (p. 538).

（2）　Cf. Sir Richard Aluwihare: The Kandy Perahera. p. 5.

（3）　Cf. Sir Richard Aluwihare, ibid.; M. D. Raghavan: CEYLON: A Pictorial Survey of the Peoples and Arts. Colombo 1962, p. 120 f.

（4）　Dr. D. T. Devendra の教示によるところが多い。謝意を表する。

（5）　All Ceylon Buddhist Congress, Presidental Address of Sir Lalita Rajapakse. Dec. 1963, p. 18.

（6）　Sir Richard Aluwihare: The Kandy Perahera. p. 4.

（7）　もともと比丘に許される所持品は、三衣一鉢のほか、きわめて限られたものであった。(1) mutthipotthaka（教科書類）(2) araṇi（発火器具）等 (3) sipāṭikā（かみそりケース）(4) arakantaka（指ぬき）(5) pipphalaka（はさみ）(6) nakhacchedana（爪きり）(7) sūci（針）。これらは thavikā と呼ばれる袋に入れてもつ。(E. W. Adikaram: Early History of Buddhism in Ceylon. p. 128)。今日の寺院所住の比丘は必ずしもこれに従っていないが、アランニャ所住の比丘の中には、これを守っている人もあるようである。

三　僧侶の教育

セイロンの多くの寺院には、比丘とともに年若い沙弥が生活している。[1] かれらは伝統的な教学を身につけるために勉学を強

いられる。二十才になって具足戒を受け、一人前の比丘となるには、多くの準備が必要である。この準備期間の教育の主要な部分は、pirivena においてなされる。Vidyodaya, Vidyālaṅkāra, Paramadhammacetiya (Ratmalāna), Vijayabā (Kotte) 等、多数の有名な pirivena がある。

pirivena における教育は、かつては一〇才か一一、二才の幼少時からこれを行なうことが多かった。最近では、国家の義務教育を終えてから、pirivena 教育に入るべきであるとされる。そうなれば、pirivena への入学資格は junior course を修了したものとなり、いずれは、一四才を超えた少年だけが、pirivena に入学を許可されるということになろう。(2)

法律の定めるところによれば、pirivena に二種類ある。初等校 (primary institution) と高等教育校 (higher educational institution) とである。前者は、必須課目または副次課目から選ばれた三科目を三年間で教える。後者は、必須課目だけ三年以上七年以下にわたって教える。必須課目は、シンハラ語・パーリ語・サンスクリット語、哲学・修辞学と仏教、副次課目は、英語・タミル語・ヒンディ語・地理と数学とせらる。しかし実情とは多少の相違が見られる。

pirivena では、一〇人か一五人位の少数者を対象として教育をする。パーリ語の語学教育について言えば、最初は名詞変化、動詞変化を、一日一頁くらいの速度で、暗記させる。これに四〇日くらいかかる。次に始めから説明を加えて、意味と用法を教える。これに二―三カ月かかる。これが第一教科である。次に初等文法の教科書として、Balāvatāra (with ṭikā つまり注釈つき) を取りあげる。その教授法は、前と同じである。これが第二教科である。第三教科としては、Rūpasiddhi (with ṭikā) または Kaccāyana (with pañcikā) の文法を教えるが、教授法は同じである。これだけやるのに、三年くらいかかる。その他に教えるテキストとしては、Piriṭ, Dhammapada, Abhidhānappadipikā, Dhātumañjusā, Abhidhammatthasaṅgaha や Vinaya の一部などがある。またこのあと Mahāsaddaniti が自学自習すべきものとされている。

かれらは先輩比丘と行住座臥を共にして、日常の行作をはじめ、あらゆる教えを受ける機会をもつ。具足戒を受けるまでは、学習に身を入れる。具足戒を受けたのちも、研学をつづけて大学に入学したり、試験を受けて pandit の称号をうる道がある。(3) パーリとサンスクリットとシンハリーズの三学に精通した人に与えられる栄誉である。しかし具足戒を受けてしばらくすると、比丘の中には目的を失ない、堕性で生きるものが出てくるが如くである。経済的にはダーヤカの援助によって、比丘は何もしなくても、生活できる仕組みにできている。精神的な面で、セイロンでは、比丘生活の目的は、涅槃もしくは解脱をうることであるが、現実にさとりを得たと認められる人がないようである。それのみか、いかに修行しても、阿羅漢果を得ることができないことはもちろん、預流果をうることも疑わしいという考えがみなぎっている。(4) これが、かれらの精進努力をいっそうさまたげる結果となっている。もちろん例外はあるにし

ても、かれらは多く仏教の修行とその結果に対して、充分な自信を持ち合わせていないが如くである。その結果、一部の人は、比丘としての生活をすてて、還俗していく。最近はこの傾向が強くなったという。

従来は、いったん僧侶となると、還俗して世俗の職業につくことがきわめて困難であった。しかるに最近になって、pirivena の中で国立大学に昇格するものができた。セイロンにある四つの国立大学のうち二つが、pirivena から昇格したものである。Vidyodaya と Vidyālaṅkāra がこれである。[5] ほかに最近アヌラーダプラに比丘のための大学もできた。そこで pirivena の学習を終えたものは、一定の予備過程を経て、大学に入学できることとなった。現に右二大学の約三分の一は黄衣をつけている。仏教系でない国立セイロン大学にも、黄衣の学生が在学している。かくして僧侶でも大学を卒業することができ、還俗しても有利な条件で、社会に進出できることとなった。同時に僧侶のままでも、学校の教職につくことができる。[6] これも重要な変化であって、比丘として寺院に住しつつ、社会的な職業につく道が開かれたことになる。僧侶がダーヤカに頼らずとも、自活できることにもなった。このことは、僧侶に経済的自立の自信をもたしめた。しかしこの人たちは、実際にはダーヤカの供養をうけつつ、学校のサラリーを得ている。大学の教職にある比丘などは、多くのダーヤカよりもむしろ高い給料を得ている。二重取りである。この点を指摘してはっきり不満を表明する人もある。

註

(1) 比丘が生涯独身を通す上座仏教において、在家の家庭から後継者を獲得することは、特に重要な関心事である。教団の盛衰に直接影響を与える。親が子供の入団を希望するのは、(一) 経済的に楽でない家庭、(二) 子供が多すぎる家庭や、(三) 子供自身虚弱であるような場合が少なくない。真に優秀な人材を得るために、比丘たちは両親を見て、生まれた時から、それとなく心がけておくという。

ただし、マルワッタやアスギリヤのように、富裕な寺院では、財産保持の点から、後継者を同一族の子弟の中から求める傾向が強いようである。師弟の間に同名者が多いのは、この結果であろう。そこには、世襲にも似た関係が生まれている。

(2) The Buddhist Commission Report (The Betrayal of Buddhism. Balangoda 1956, p. 120) によれば、伝統的な比丘の教育機関としての pirivena は、あるものは高等教育の機関に、あるものは最高学府に、格づけもしくは格上げすべきである。従って、pirivena によって教育段階が、次のように分れる。

(1) presenior (2) senior (3) undergraduate (university preliminary) (4) graduate

pirivena における一般教育が修了したあと、専門家の指導の下で、degree や diploma を得るために上級 pirivena に入るには、入学試験が必要である。degree の

基準は、university degree のそれに等しくすべきである、とされる。

(3) pandit の試験には、若い比丘が多く及第し、老人はあまり及第しない。セイロン全体で pandit の数は、二〇〇人くらいと言われる。

因みに、具足戒を受けた人は、Thera（または Thero）と呼ばれ、約二〇年後 Mahā Thera（または Mahā Thero）と呼ばれる。これは主として法臘、すなわち具足戒を受けてからの年数に関係している。しかしこの称号を権威主義的であると感じて、避けて用いず、Bhikkhu をその名に冠する人もある。

(4) セイロンの比丘に、出家生活の目的は何かと質問すれば、解脱 mokkha または涅槃 nibbāna であると答えるであろう。そのためには、清らかな生活と冥想と教法の研究とが大切である。それではその目的を達した人があるかと聞くと、意外な答えが返ってくる。比丘は自分でさとったと言うことができないし、外からも言うことができない。自らさとったと言う者は、〈不妄語〉を犯したことになりかねない。とすれば、波羅夷すなわち教団追放の最も重い罪に問われる。阿羅漢はいるかも知れないし、いないかも知れないという。セイロンにも比丘がみな解脱に到達し阿羅漢となった時期があった。(cf. E. W. Adikaram: Early History of Buddhism in Ceylon. Colombo 1946, p. 125)。しかし Dutthagāmaṇi 王時代（前一―二世紀）の Maliyadeva 長老を最後とし、以後阿羅漢と言われる人は出ていないという(R. Seevali Thera のご教示による)。ビルマには、阿羅漢と称せられる人がいるが、この点セイロンは異なっている。さとりの前と後とで、どんな違いが生まれるか、との問いに対して、さとりを得た人は煩悩をすべて断じつくし、再生がないので、未来に対する不安がないと答えられる。（もっとも、セイロンにも預流果 sotāpanna に達した人はいるかも知れないと考えられている。

因みに、セイロンの一部に、法滅の思想が行なわれてきたことは、注目すべきである。阿羅漢・法・律・僧伽・仏舎利の五つが順次に滅することを説く pañca antaradhāna（五滅）の思想も一五世紀に成立した Saddharmaratnākaraya 第一〇章に論及されている。(cf. C. E. Godakumbura: Sinhalese Literature. Colombo 1955, p. 95)。

Dr. E. W. Adikaram らの指摘によると、最近セイロンに Metteya 仏（弥勒仏、未来仏）信仰が起きたという。これは現実にはもはやさとりが得られないとの認識に立ち、未来仏を待望する考えである。弥勒信仰は、セイロンに古くからあり、(cf. Mahāvaṃsa 32. 72 f.; Saddharmālaṅkāraya of Dharmakirti, ed. by Kirialle Ñāṇavimala Mahāthera. Colombo 1954, p. 760 f.)、現代もこれが盛んとなるような情勢があると見てよい。一

般在家者の中には、来世に弥勒の出世に遭うことを願っている人が多い。また German Dharmaduta Society の Asoka Weeraratna 氏が、一度はいったら目的達成まで、二度と娑婆に出ないハーミテジを作っているのは、何としても解脱を得て欲しいという在家者の悲願の表れと言いうる。つまり一方では阿羅漢果に到達することを不可能と見る絶望感と同時に、他方では現代の世界でも修行さえすれば、目的を達成できるとする積極的な考え方とが、共存しているようである。

居士仏教者に対する民衆の尊敬も、かかる法滅思想的な社会の風潮と、無関係とは言えない。セイロンには、独身と禁欲生活を守り、身を清浄に保ち、居士の生活をして、人々から出家者以上に尊敬を集めている人がある。Anagarika Dharmapala, Valisinha Harischandra もこの種の人であった。Dr. E. W. Adikaram もこうした居士の一人と言える。六〇才くらい。かつてイギリスにおいて Dr. W. Stede（ロンドン大学）や Prof. E. J. Thomas（ケンブリッジ大学）の教えを受けた。パーリ古注釈書の研究によって、ロンドンで Ph. D. の学位を得た。その研究は、必ずしも大部のものではないが、高い評価を受けている。ロンドンから帰って、永らくコロンボ郊外 Kotte の或るカレッジの校長をしていた。近時退職して、悠々自適している。一部のセイロン人からは、高潔の士として、非常な尊敬を受けている。Adikaram は、仏像を礼拝せず、従って花・香・食のお供えの必要なしと言い、ただ厳格に五戒を守ることを誓い、冥想を専らとすべきことを主張する人として知られる。筆者が Kotte の自宅を尋ねたところ（一九六五年四月）、仏教やパーリの研究を一切放棄して、自然科学の書物に取り囲まれて、その飜訳と紹介に専念していた。一驚するとともに、その見識に敬服した。

(5) 一九五九年に昇格した。cf. Second Anniversary Souvenir of the Inauguration of the Vidyodaya University of Ceylon. 1961; Ferguson's Ceylon Directory 1966, p. 1230 f.

因みにこの二つの大学は、その性格が対照的である。Vidyodaya が保守的伝統的立場に立つのに対して、Vidyālankāra は自由主義的進歩的である。そこで、時として前者を往昔の Mahāvihāra に対比し、後者を Abhayagirivihāra に対比する人もある。しかしいずれも国立大学となって、次第に仏教色を薄くする傾向にある。

(6) アーユル・ヴェーダ医学その他の仕事に従事している比丘もある。

四　失なわれた托鉢

上座仏教の比丘の生活を考える時、托鉢の習慣がすぐ念頭に浮ぶことは、当然であろう。上座仏教は、厳格な戒律を守り、

托鉢と冥想を主体とする、三衣一鉢の規則正しい生活態度に特徴があるはずである。しかしセイロンでは、寺院所住の比丘も、ハーミテジ所住の比丘も、あまり托鉢しなくなっている。コロンボでもキャンディでも、托鉢する僧侶の姿は、探してもなかなか見つからないのが実状である。コロンボなら Maradana とか、Borella とか、特定の地域の街頭で、時たま見かけるにすぎない。僧侶がいないのではない。黄衣の僧は、どこの町角でも見ることができる。しかし黄衣はつけていても、鉢を用いることを忘れたかの如くである。二、三尋ねてみたところ、この現象を、比丘自身必ずしも好ましいこととは、考えていない。

好ましくないのに、なぜ鉢を用いないか。鉢を用いる必要がなくなったのであるという。ダーヤカが、寺に食事を持参して、托鉢しないでよいとしているというのである。この傾向は、第二次大戦後、特に顕著となった。戦前にはもっと托鉢に行ったものである。托鉢生活を尊重する気風はまだ残っており、托鉢するのが仏陀の教えであると思うが、時代が変ったのだ、とある比丘は述懐していた。

多くの寺院には、小は数十人から、大は数百人のダーヤカが附属する。president, secretary, treasurer といった役員をもつ、組織的なダーヤカ・サバー (dāyaka-sabhā 檀家会) が出来あがり、寺院の経済面を引き受けている。信徒は、Poya Day に集まるときに、金品をダーヤカ・サバーに寄せ、また特別の必要ある時は、寄附金を募る。ダーヤカ・サバーには、讃助者が遠近を問わず参加する。また多く近くの人が、毎日の食事の供養をする。そのため比丘は、鉢を用いる必要がなくなったのである。また一部の大寺院は、莫大な土地や財産を所有し[1]、これまた托鉢の必要がない。

托鉢の必要がなくなって、それだけ時間に余裕ができれば、比丘らは利益を得たに相違ない。しかしそこにはまた弊害が伴なうことを見逃すわけにはゆかない。

第一に、比丘の生活が保障され、安易となったため、不純な気持から入団する人が多くなる危険がある。この危険は、タイ国のような一時的入団を拒否することによって、防がれている。しかしまた一生かけてとなると、最初に純粋な気持の人も、長い間には安易に流れるに相違ない。事実、比丘の中には、何の気迫も感じられない人が少なくない。在家者の中には、この点に対する不満がある。

第二に、托鉢を捨てたことによって、僧侶の側から、社会に接触する機会の一つが失なわれたことになる。(寺院所住の比丘は、ほかに社会と接触する機会を有するが、ハーミテジ所住の比丘にとっては、托鉢がほとんど唯一の機会であったと思われる)。

第三に、食事がダーヤカの手にゆだねられ、食事の時間を自律的に決定しにくくなる。そのため、一日の食事を正午までに終るという戒律規定が、ルーズになる可能性がある[2]。

第四に、毎日の食事を寺に持参できるのは、生活に余裕ある人であり、貧しい人々が見逃されることとなる。実際毎日朝と

昼前の二回、ダーヤカの人たちが、食事を家からとどけ、または調理するために、寺院に行くことは、並たいていのことではない。信仰心もさることながら、家に下僕を使い、または暇をもて余している人の多いセイロンにして、はじめてできることである。[3]（ただしこの困難を解決する方法として、三六五人のダーヤカを獲得すれば、年一日の負担ですむ。また六〇人のダーヤカを獲得して月一回づつ食事供養をする方法もとられている）。

第五に、比丘の経済生活がダーヤカに依存する結果、寺院としては有力なダーヤカを獲得することに懸命とならざるを得ない。勢い寺院の間で、ダーヤカ獲得のために、気まづい問題が生ずることも絶無ではない。ダーヤカとしては、複数の寺院に奉仕することが可能であるが、やはりそこには限度があろう。

とにかく、かくして僧侶は、托鉢の労を脱れることができた。[4]それだけ時間の余裕を得たはずである。しかし必ずしもそれだけ余計に修行が行なわれるようになった、とは言い難い。その余裕は他の方へ、言わば俗事に向けられているが如くである。俗事と言うと聞えが悪いが、社会的活動にその関心が向けられていると言えよう。そしてセイロンの仏教も、日本の状態によく似た、寺院中心の仏教と化しつつある。

在家者が家庭へ比丘を招待して、食事の布施（dāna）や薬石（gilānapāsa＝gilānapaccaya）の供養がしばしば行なわれる。[5]特に食事の布施には、家庭でできるだけの準備をして待っている。比丘らは行列をして到着する。にぎやかな太鼓など、鳴物入りの時もある。家主は入口で合掌して迎え、到着した比丘らの洗足を行ない、屋内に招じ入れる。用意されたテーブルの席につく。五戒等のことばを唱えたのち、食事が運ばれる。もちろん右手を使って食べる。家中の人が、いそがしく料理を給仕する。食事終れば、Maṅgalasutta, Ratanasutta, Karaṇiyasuttaを読経して、一〇分か一五分間法話が行なわれる。

また寺院所住の比丘の日常生活はどうなっているか、筆者はキャンディで、ある仏教センターを主宰している比丘（50才くらい）に聞いてみた。

五時半起床　六時洗顔　六時半仏歯寺礼拝　七時朝食（食後三種の新聞を読む）自由（時に来客）　一一時沐浴　一一時半昼食　休憩　二時お茶　二時半読書来客その他　六時半仏歯寺礼拝　七時お茶・ラジオ聴取・読書　一〇時就寝

これがそのだいたいである。説明によれば、時々起床前ベッドの中で冥想し、また就寝前にもベッドの中で冥想し、あるいは経典を読誦する。meditationは行住座臥いつでもできるものだという。しかしベッドの中でmeditationをするだけで、本格的なmeditationができるのであろうか。この人に限らず、一般に寺院所住の比丘は、あまりmeditationをしないように思われる。[6]もちろん例外も多い。今一人キャンディのアスギリヤにあって重要な地位にある人（七二才）から聞いたところは、次の通りである。

五時起床　五時半礼拝　六時お茶または食事　七時新聞

一一時半昼食　一時礼拝　一〇時就寝

で、かなり自由なものである。忙しい人であるからであろう。

註(1) Cf. Ralph Pieris: Sinhalese Social Organization. Colombo 1956, p. 73 f.

(2) 食事中に正午になったらどうするか。多数の比丘がそろって食事の供養を受けていても、中には正午で食事を中止する人がある。多くは最後まで食べ終える。食事を中止する人は戒律が厳格であるといって、在家者からは尊敬される。しかし比丘の仲間からは敬遠される。（この問題は、古来より戒律上の争点の一つである。拙著『原始仏教聖典の成立史研究』五八一頁参照。）

因みに、在家者から供養された魚や肉を食することは、必ずしも戒律に反しない。しかしインドやセイロンでは、菜食主義者が尊重されることも事実である。ダーヤカから食事供養を受けるとき、魚や肉が出ると、大声でそれは何かと聞き、自分は vegitarian であると言って断わる人がある。やはりダーヤカからは尊敬されるが、比丘仲間からは敬遠される。

(3) ダーヤカの負担において、寺男をやとっている場合も多い。

(4) 托鉢する必要がなくなれば、比丘は年中安居に準ずる生活が可能となる。

因みに安居（vassāna）の習慣は、インドにおける雨期に由来する。しかしセイロンにおいては、六月もしくは七月の満月の日から三カ月間行なわれる。(cf. Nur Yalman, Dual Organization in Central Ceylon. Anthropological Studies in Theravada Buddhism. Yale Univ. 1966, p. 202)。セイロンの安居は、比丘らが冥想や、修行をするための時期ではなく、信者が寺にきて、比丘から説教を聞くことが、主な内容となっている。寺院所住の比丘にとっては、社会活動をする大切な期間となる。安居もセイロンでは本来の意味を失なっている。

(5) dāna の習慣の実際については、M. D. Raghavan: CEYLON: A Pictorial Survey of the Peoples and Arts. Colombo 1962, p. 2 f. 参照のこと。

(6) meditation によって自得の境地を開いた比丘が、meditation をしない他の比丘に向って、meditation の効能を説き、その修習をすすめることがある。meditation は、必ずしも多くの比丘に修習されていない。

五　布教と読経

比丘の在家者に対する直接的奉仕の最大なるものは、やはり布教と読経であろう。これは在家者の比丘への財施に対する法施という意味をもつ。布教に関して言えば、定期的な行事として、Poya Day の布教とか、日曜学校がある。(1) 仏教の習慣では、満月・新月とその中間の半月二回の計四回の Poya Day（布薩日）には、寺院に在家信者が集まる。そこで説教を聞かせるのである。日曜学校は非常に多くの寺で行なっている。主とし

て青少年を対象にした重要な活動の一つである。日曜日には、数十人もしくは、一〇〇人以上の子供が集まる。筆者の止宿していた International Buddhist Centre には、朝八時半―一一時に多い時は一五〇人くらい集まっていた。寺院には、たいてい四、五人から一五、六人もしくはそれ以上の僧侶（沙弥を含めて）が住している。比丘たちは手分けしてクラスを編成し、これを指導する。日曜日でなくとも、子供の面倒を見てほしいと頼みにくる人もある。近代的な学校が、充分完備していないので、寺小屋的な存在として、寺院の役割が大きい。国民教育の上で、大事な役割を果している。

またセイロンには、いろいろな機会に在家者のために読経をする習慣がある。（この習慣は、地方によって相違があり、それぞれのケースによっても差違が見られよう。）

(1) 胎内に子供が宿り、出産が近くなると、比丘らがでかけて、読経をする。[2] 仏教では、受胎した時から年齢を数え、一個の生命の誕生を認めるので、この読経は、母親はもちろん、胎児にも聞かせる意味を有する。安産を祈る気持と同時に、胎教のような考え方も存在しているようである。生まれたのちは、母子がお礼にお寺にお参りする。

(2) 必ずしも読経とは関係がないかも知れないが、幼児が母乳を離れる時に、比丘に dāna をしたり、また子供が成長して、文字を習いはじめる時に、最初に比丘からその手ほどきを受けたりする。比丘は一般に高い知識人であるから。

(3) 結婚に際しては、式に先立って dāna をするため、比丘を自宅に招く。比丘は Maṅgalasutta, Ratanasutta, Karaṇiyasutta などを読経して、祝福をおくる。[3]

(4) 家を新築するとき、鍬入れ・定礎式・落成式の三回に、同じく Maṅgala-, Ratana- および Karaṇiya- の三 sutta を読むが、後二経には特に悪霊をしりぞける功能があるとされる。落成式のときには、夜九時から翌朝六時まで、大かがりな読経式が催されることがある。

(5) 病気の時。

(6) 死と葬式と死後。

各種の読経の中でも、病気平癒の読経は、最も責任が重い。こと人命にかかわるので、比丘も信者も真剣である。筆者の実際の見聞を報告しておくことも、無意義ではあるまい。

コロンボの International Buddhist Centre に止宿していたときのこと、住持にかねて依頼しておいた。ある晩さるダーヤカの家から車の迎えがきた。住持以下筆者を入れて五名が招かれた。先方に到着すると、まず玄関で洗足である。主人が比丘一人一人の足に水をかけて清める。二間つづきの部屋の床にはラッカーを茶色に塗り、きれいにみがいてあった。奥の間の左の壁面に、小さな仏壇があり灯明がともされていた。手前の部屋の右側には、比丘のための椅子が用意され、左側には床に敷物が敷かれ、その一隅に子供が寝かされてぐったりしていた。住持の席の前には、台が置いてある。下段には betel の葉や木の実・石灰が置いてある。南方特有の嗜好品である。上段には水瓶が

あって白布で覆われ、巻糸が巻きつけてある。しばらく雑談する間に、家族が出てきて、病児の敷物の上にみんなそろって坐る。水瓶につながれた巻糸がのばされ、住持から比丘、比丘から家族へと糸をのばしてわたす。最後に糸の端が子供の手ににぎらされた。あとで聞くと、水瓶の由来は『大般涅槃経』によるとの説明であったが、恐らくヒンドゥイズムの影響であろうと思われる。仏陀と比丘と家族とを合わせて僧伽が形成せられ、一本の細い糸に托して、子供の病気の平癒に願いをこめる。そこにはいたいたしいまでの、子供に対する親や家族の愛と願いがこめられている。無条件で人の心を打つものがある。[4]

この読経は一回だけでなく、最初の日は夕方、翌日は朝、翌々日は夕と三回にわたって行なわれる。七回にわたるときもある。病気のときに読まれる経典は、『覚支経』(Bhojaṅga-sutta)が中心になるという。これには Mahākassapa, Mahāmoggallāna および Mahācunda の三長老の『覚支経』があり、これを病状によって読みわける。覚支は三者に共通して説かれているが、七種を数える。いわゆる念・択法・精進・喜・軽安・定・捨の七覚支である。また過去の諸仏 Mahāvīra, Medhaṅkara, Saraṇaṅkara, Dīpaṅkara, Koṇḍañña から Kassapa, Gotama Buddha にいたる二十八仏をお祭りして読経する ataviṣipirit という儀式もある。

病気平癒の読経に対する考え方は、単なるご都合主義の神だのみに類するものではない。キリスト教にいう祈り(pray)でもない。英語で言えば asseveration であるという。このことは、読経のあとに唱える。etena sacca-vajjena, sotthi te hotu sabbadā (この真実語によりて、そなたにつねに幸せあれかし)との文句によって、端的に示されている。例えば、かつて親の病気を必死に介抱したとか、行き倒れの人を親身に世話したとか、何か自分の積んだ功徳があるとき、それを病人の平癒にふり向けて欲しい。仏陀釈尊も病人を直されたことがある。この真理によって病人に幸せあれと誓言するのである。要するにその根柢にあるのは回向の観念である。身を清浄に保ち、多くの功徳を積んだ比丘が尊ばれる道理である。果して現実に利益効果があるか。もちろん住持は必ずあるという。[5]

臨終が近づいたときには、身内の者や友人が、枕許に集まる。仏教徒の家庭ならば、比丘が招かれ、枕頭において読経をする。Karaṇīyasutta や時に Dhajaggasutta を加えて読む。

死者はそれぞれ生前の業によって果をうける。現在世で積んだ功徳や犯した罪悪によって来世がある。とは言え、人は死者が天界に行くことを期待する。死者は頭を西に仰向けにねかされる。死に臨んで比丘は、無常偈 (DN. II, p. 157) を三度唱える。この時死者の家族から、比丘は白い布の布施を受ける。この布は mataka-wastara (死者の衣服の意) と言われる。昔はこれを死体に巻いて、墓場に捨てたものである。比丘はそれをひろって糞雑衣を作り、身にまとった。今はこの白布の布施にその名残りをとどめる。この布施ののち、比丘は一〇分か一五分の短かい法話をする。

通夜は通常二晩くらい行なわれる。田舎では、Vessantara-jātaka (Jāt. 547) が大声で読まれる。悪霊を近づけないためという。火曜日と金曜日には葬式を避ける傾向がある。ヒンドゥイズムの影響である。葬式には、比丘も墓場へ行くことがある。この場合も無常偈を唱え、生死の問題について簡単な説法をする。翌日お骨をひろう。お骨は、家の墓へ入れたり、川や海へ流したりする。一週間目には、比丘が死者の家へ招かれて、食事の布施を受け、説教をする。〔一カ月〕・三カ月・〔六カ月〕・一年目にこれをくり返す。それ以後は、一年毎に布施が行なわれるが、任意であるという。(6)

葬儀の方法として、仏教徒は多く火葬を用いる。Robert Knox は積みあげた薪の上に死骸をのせた図をえがいている。(7) これは三〇〇年も前のこと、今日では、薪をパコダ風に積みあげ（これを darasaeya という）、その真中へ棺が埋まるようにするので、死骸は外から見えないという。夕方か真夜中にかけて焼く。比丘や富裕な人など、男性は多く火葬にされ、女性や子供は土葬が多い。火葬には多量の薪を必要とし、経済的負担が多いからである。同じ傾向は、シンガポールなどにも見られる。

註（1）　日曜日に代って Poya Day（布薩日）が休日となったセイロンでは、Sunday School の代りに Poya Day School がもたれるようになった。また YMBA が主催する Dhamma School がこれに結びついている。

（2）　このとき比丘は、仏像や仏舎利を奉持していくこともある。読む経典は、Karaṇīya と Ratana の両経のほか、Aṅgulimāla-paritta (cf. G.P. Malalasekera: Dictionary of Pāli Proper Names. I, p. 23) である。後者は鬼子母神信仰との関係が予想されて興味がある。

（3）　もともと出家棄欲を本旨とする仏教は、結婚を正当づける論理をもち合わせていない。比丘らが直接結婚式に関与することはない（山田英世博士『セイロン――こめとほとけとナショナリズム――』八六頁、九二頁参照）。比丘に代ってしばしば主役を演ずるのは、māgul kapuwā と呼ばれる一種の kapurāla や、sāstra-karaya (fortune-teller) たちである (Paul Wirz: Exorcism and the Art of Healing in Ceylon. Leiden 1954, p. 244—246; cf. M. D. Raghavan: *CEYLON: A Pictorial Survey of the Peoples and Arts*. Colombo 1962, p. 44 f.; Edmund Peiris, Marriage Customs and Ceremonies of Ceylon. J. of the Ceylon Branch of the RAS. New Series VIII, 1 (1962), p. 2 f.)。

（4）　この水瓶は sembu と称する。M. D. Raghavan の伝える pūṇakumbha（聖水瓶）もこの種のものであろう (M. D. Raghavan, ibid. p. 5)。

Dr. W. Ānanda Thero の説明によると、水瓶の由来は、仏陀八〇才、重病の身を入滅の地 Kusināra に歩を進められていたとき、Kakutthā 河の畔にて水を所望された故事による (Digha Nikāya II, p. 128—129)。また

Vessantara-jātaka (Jāt. 547) の中に出てくる Jūjaka バラモンの故事にもとづくとも言う (R. Seevali Thero のご教示による)。しかしこれは恐らく、真鍮の瓶に入れた聖水を神事に用いるヒンドゥの影響であろう。もし仏陀から系を引くのであれば、壁面に仏壇がしつらえてあったから、そこから引いてもよいはずである。

(5) 具体的実例として、例えば、あるムスリムの親が、五人の子供を生んだが、五人とも死んだ。六人目の懐妊のとき、何とか育てたいと、自分のところにきた。仏教の service を受けて生まれた六人目の子は、丈夫にそだっているという。控え目ではあるが、自信をもった説明であった。

(6) N. D. Wijesekera, Beliefs and Ceremonial Associated with Death in Ceylon. J. of the Ceylon Branch of the RAS. New Series VIII, 2 (1963). p. 242—244.

(7) An Historical Relation of Ceylon by Robert Knox. The Ceylon Historical Journal VI. ed. p. 184 の挿絵参照。

セイロンの田舎にゆくと、村はずれや海岸のココナット林の中に、しばしば火葬の跡や墓群を見出す。地方では昔からの古い方法が行なわれていると思われる。ただレコロンボの Kanatte にある共同墓地は、近代的なもので、日本人墓地もある。仏教徒・ヒンドゥ教徒・キリスト教徒が用いている。回教徒や Parsi は、別の場所に墓地を有するという。

結びに代えて

今日セイロンの寺院仏教は、大きな試煉に直面している。

第一に、後進国として近代化の必要に迫られているセイロンにあって、上座仏教は保守的伝統的な文化を代表するものであること。

第二に、仏教は西洋植民地支配下のセイロンにおいて、ナショナリズムのにない手となり、セイロンの自立独立路線の推進に大いに役立ってきたが、独立後の近代化の前にあって、今後はかえって阻害要因としての性格を強める可能性を充分にもっていること。

第三に、仏教がナショナリズムと結びついた結果、寺院僧侶の中に政治活動を行なう、言わゆる 'political bhikkhu' が生まれ、仏教教団が時の政治状勢の変動によって、大きく左右されるようになってきたこと。

第四に、伝統的な上座仏教は、近代社会の中において、さまざまな矛盾を露呈し、今後はこの矛盾を速やかに克服し、古い殻を脱皮してゆく必要に迫られていること。

これらの点を考えてみても、その前途は決して容易ではないと言えよう。

これらの諸問題については、「近代化をむかえるセイロン仏教の対応」(お茶の水書房『アジア近代化の研究—精神構造を中心として—』二八五頁—三一八頁) や日本仏教文化会議紀要『アジア開発と仏教』九〇頁以下の拙論についていて見ていただきたい。

オランダの宗教学研究[1]

鎧　淳

オランダにおける、宗教の純学問的研究や、輓近における、この方面の研究業績を正しく紹介するに当って、その背景となった過去の事情について触れておくことは、意味のないことではないことではないであろう。他のヨーロッパ諸国におけると同じように、オランダでも、かなり長い期間に亘って、いわゆる、キリスト教会の支配が存在していた。国家、社会、更に個人の生活に至るまで、いづれも、キリスト教会の影響の下におかれ、したがって、又、宗教上の問題の対立が、ただちに、個人、社会、さらには国家的問題にからまる対立にまで発展することがしばしばであった。すでに、オランダの独立自体、ローマ正教を信ずるハプスブルグ家の Karel V がルーテル派の信仰をネーデルラント（Nederland）地方に許さず、かつ、これを迫害したことに端を発しているように、さらに、オランダ独立戦争の重要な指導者、Willem, prins van Oranje がルーテル派からカルヴィン主義に転じるに及んで、オランダ、ことに、その為政者たちとカルヴィン派教会との結びつきは抜きがたいものとなり、マース河（Maas）上流の、ローマ正教を信ずる南部地方の住民たちと激しい対立を形成して、ついには、政治的にも、社会的にも、数多くの困難な問題を提出するに至った。

しかるに、一八四八年、当時のヨーロッパ自由主義運動の機運をうけて、オランダでも、J. R. Thorbeck を主班とする自由主義政党内閣が誕生するに及んで、ここに、政府は、国家と教会の関係について自由主義的な立場をとり、一八五七年には、国民生活における信教の自由を尊重する主旨に基づいて、初等教育における宗教的中立を守るための法案を通過せしめ、さらに、一八七六年、Kappeyne van de Coppelle 内閣の時、この方針を一段と強化し、すべての公教育から、特定の教派・教会的要素を排除する措置をとるに至った。すなわち、大学教育に関しては、高等教育令（Hogeronderwijswet）を施行し、キリスト教を含む諸宗教を純学問的（zuiver wetenschappelijk）な立場から研究、教育すること、教義学、キリスト教倫理、象徴論など、神学的研究の中心的課題をなし、純学問的立場からの研究が困難な課目は、これを教育、研究の枠組から外すこと[2]とし、かかる、宗教の純学問的な研究、教育のための講座を、新たに、ライデン（Leiden）大学（一八七七）、クロニンゲン（Groningen）大学（一八七八）、アムステルダム（Amsterdam）市立大学（一八七八）[3]、ウトレヒト（Utrecht）大学（一九一三）[4]の四大学に設置した。かくて、宗教学（Godsdienstwetenschap）は、教会から独立した一学問として発足し、ここに、又、

Erasmus, Arminius 以来の、オランダ＝ヒューマニスト、自由の伝統は、制度の上でも結実を見るに至った。F. Max Müller が、初めて、イギリスで宗教学を講じてから、実に、七年後のことである。以下では、オランダ各大学における、宗教学研究の過去と、現在とを、簡単に、紹介する。

ライデン大学

オランダ独立戦争に際し、スペイン軍に対するライデン市民の英雄的抗戦を記念して、一五七五年に建てられたライデン大学では、大学創設以来、宗教史（Godsdienstgeschiedenis）が神学部内の一補助的教課として研究、教授された以外、さらに、東洋、オリエント諸語の専門家たちが、それぞれに、自らの研究に関連した地域の宗教、文化を公開していたが、高等教育令の施行に伴い、一八七七年、同大学内に、新たに、宗教史講座が、独立の一研究部門として設置され、その講座の初代教授には、抗議派（Remonstrant）の神学教授として、又、古代ペルシア、バビロニア、アッシリア学者として内外に令名の高かった C. P. Tiele[5] が就任した。彼は、ここで、自然則（Naturgesetze）[6] の思想に基づく、宗教史の説明と体系化に努めたが[7]、その興味は、後年、思弁的な宗教哲学に傾くに至った。

一九〇一年、彼の後を W. B. Kristensen が襲った。Kristensen は、元来、エジプト、および古代宗教の専門家であったが[8]、さらに、宗教現象学（Godsdienstfenomenologie）[9] の確立にも重大な関心を示し、この方向において、数多くの、すぐれた研究者を育成、その門下から輩出した。後日、オランダの宗教現象学において、指導的役割を占めるに至った W. G. van der Leeuw, H. Th. Obbink, H. Kraemer, C. J. Bleeker, H. A. H. Hidding など、いづれも、彼の講筵に列し、彼の許において指導をうけたものである。

Kristensen の担当していた、ライデン大学の宗教史講座は、一九三八年、原始、古代の宗教（Antieke godsdiensten）と、近代の宗教（Moderne godsdiensten）の二講座に発展し、前者には、Kristensen の弟子であり、かつ又、エジプト学者として名の高かった A. de Buck[10] が、さらに、de Buck の死後は[11]、スイスの、イスラエル古代宗教史学者、B. Hartmann が、正教授として、古代宗教史を講じた。又、後者には、H. Kraemer[12] がスイスの国際世界公会議議長として転出した後をうけて、一九四八年以来、H. A. H. Hidding が宗教現象学を担当している。Hidding は、その師、Kristensen の意図をさらに推し進め、特に、宗教と思想との連関、すなわち、宗教現象における思想の意味の解明に精力を傾けている。彼の最近著「宗教意識の展開」（De evolutie van het godsdienstige bewustzyn. Utrecht 1965）[13] は、宗教意識が、いかに展開、発展してゆくかを、細かに考察した労作であり、さらに、一九六七年、ライデン大学正教授就任講演「構造宗教学」（Structurele godsdienstwetenschap. Rede. Leiden 1967）は、彼の意図する処が、今日、那辺にあるかを[14]、明らかに示している。彼の下には、現在、心理学者で、又、文化人類学にも造詣の深い F. Sieksma[15] が、よ

く師の立場をうけ、さらに、Freud-Jung の提出した諸観念の克服を目指して、原始宗教における宗教意識の展開と発展の問題に取り組んでいる。(16)

クロニンゲン大学

一八七六年、高等教育令の施行によって、独立の学問として宗教史の講座が開設された、第二の大学は、クロニンゲン大学である。ここでも、宗教史の講座が、神学部内に、独立の一講座として新設され、その初代教授には、当時、クロニンゲン大学の宗教哲学教授であつた Isaac van Dÿk が兼任して、宗教史概説を講じた。さらに、一時、P. D. Chantepie de la Saussaye が、思弁的立場から、宗教の歴史を講じていたが、一八七八年、彼がアムステルダム大学に転出するに及んで、W. G. van der Leeuw がその後をうけ、クロニンゲン大学における宗教史研究を、名実ともに、純学問的研究として確立した。(17) 彼の、いわゆる、現象学的方法 (fenomenologische methode) と、'Epoche' の概念は、当時から、すでに、数多くの追随者を得、又、他宗教の 'Einfühlen' 及び 'Verstehen' の操作は、数多くの問題を提起した。

van der Leeuw の体系は、その弟子でエジプト学者、かつ、コプト語にも通じる Th. P. van Baaren (18) によって、方法論的にも、一段の発展を見た。師の後をうけた van Baaren は、宗教現象のさまざまな形態を「了解する」(verstehen) に当って、まず、Jung の心理学に手掛りをもとめ、これによって、彼は、師 van der Leeuw の提出した諸前提が、民俗学的に、いかに薄弱な基礎をもつものであるかということを示し、さらに又、史上における神概念の展開は、進化論的に図式化しえないものであることを明らかにした。そして、さらに進んで、彼は、文化人類学者たちの業績に依拠しつつ、未だ文献をもたない (schriftloos) 諸民族が、これまで考えられていたよりも、はるかに、種々の点で分化し、いわゆる、原始的 (primitief) とは考ええないことを明らかにし、このことを、これら諸民族の図解法 (ikonografie) を用いて例証した。(19)

クロニンゲン大学の宗教史研究で、ここに特記すべきことは、宗教史史料編纂所 (Instituut voor godsdiensthistorische beelddocumentatie) の設置である。この宗教史史料編纂所は、一九六六年、クロニンゲン大学神学部内に創設され、前記 van Baaren が、現在、所長を兼任している。宗教学、宗教史の研究、ならびに教育に重要と思われる、さまざまの資料を蒐集して、これを純学問的立場から、史料として、編纂することを目的としている。編纂の成果は、クロニンゲン大学の「展望」(Academisch Perspectief, Groningen Univesiteit)、ならびに、年二回、半年ごとに同編纂所から発行される「報告」(Halfjaarlykse expositie. Instituut voor godsdiensthistische beelddocumentatie, Groningen Universiteit) に公開され、今日までに、すでに、六冊を刊行している。この「展望」、ならびに「報告」の編集には、Th. P. van Baaren の弟子で、インドネシアの宗教を研究分野とする L. Leertouwer がたずさわっている。

van Baaren の許には、この他、東洋の宗教、イスラム教を専攻する J. M. S. Baljon[20]、エジプト学の俊鋭 H. te Velde[21]、さらに、セム語の研究家で、グノーシス、ヘレニズムの宗教を専門とする H. J. W. Drijvers[22]など、新進の学究が集まり、活潑に、研究に参加している。

アムステルダム市立大学

アムステルダム市立大学では、一八七八年、クロニンゲン大学から P. D. Chantepie de la Saussaye[23]を迎えて、新設の宗教史講座を開講した。Chantepie de la Saussaye は、元来、ゲルマン民族の宗教の専門家であったが、彼は、又、宗教史教科書 (Lehrbuch der Religionsgeschichte. Tübingen 1887/1889) の編纂者としても知られている。

彼の後継者は、マンダ教の研究者 A. J. H. W. Brandt[24]である。Brandt は、一生涯、マンダ教の研究以外に出ることがなかったが、彼の死後、一九一〇年、Kristensen の弟子であり、すでに、エジプト、バビロニア学者としても令名の高かった H. Th. Obbink[25]が迎えられるに及んで、彼の優れた語学力と、広汎な知識欲とにより、ここに、アムステルダム市立大学の宗教史研究は、とみに、活況を呈するに至った。Obbink のアムステルダム滞在は、わずか三年に満たなかったが、その影響は著るしい。その後、彼は、ウトレヒト大学に迎えられて、宗教現象学を講ずることとなるが、彼のウトレヒト出発後、アムステルダム市立大学では、中国宗教、特に、中国仏教のユニークな研究者であり、戦後、「中梵独・中国仏教解説辞典」(Erklärend Wörterbuch zum chinesischen Buddhismus, Chinesisch-Sanskrit-Deutsch. Leiden 1951) を出版したドイツ人 H. Hackmann が宗教史の講座を担当し、中国の宗教、哲学についての、数多くの、すぐれた業績を発表した[26]。一九三三年からは、比較宗教史の研究者であり、「宗教学研究」、二十一巻 (Godsdienstwetenschappelijke studieën, 21 dln. Haarlem 1947—1957) の大冊をもって知られる G. A. van de Bergh van Eysinga が、宗教史教授に就任して、宗教史における発展の諸階段を定式化しようと試みた[27]。

一九四六年に至って、この宗教史の講座は、Kristensen の有能な弟子の一人であり、かつ又、国際宗教史学会第九回東京大会には、大会組織委員として来日して、わが国にもなじみ深い C. J. Bleeker が受け継ぐことになった。この精力的、かつ、活動的な宗教史学者は、他の数多くの、オランダの宗教史研究者と同じく、エジプト学者として出発し、この方面においても、数多くのすぐれた研究を、つぎつぎに発表する一方、これまでの、さまざまな宗教現象学の綜合と、さらに、人類学的方法の導入による宗教人類学の確立に意を注いでいる[28]。一九六九年秋に退官する Bleeker の後任には、現在、「生きている宗教」(levende godsdiensten) と「昔の宗教」(antieke godsdiensten) のそれぞれについて、合計二人の後任者が予定されている。

ウトレヒト大学

ウトレヒト大学の宗教史講座は、高等教育令の施行以後、適切な人材を欠いていた。とき折、インド学者、アラビア学者が、各自、その専門領域における宗教の歴史について研究を公開するに止まっていたが、一九一三年、H. Th. Obbink がアムステルダムから招かれるに及んで、名実ともに、独立の一研究部門として、その体裁を整えるに至った。[29] さらに、一九三九年、その子、H. W. Obbink jr. が、彼の後を継いだ。彼は、その父と同じく、エジプト研究から出発し、「特に、古代エジプトにおける名前の呪術的意義」(De magische beteeknis van de naam, inzonderheid in het oude Egypte, 1925) の論文で、若くして学位をえ、のち、旧約聖書の宗教史的研究から、さらに、地中海、オリエントの諸宗教の研究まで、その研究領域を拡大するに至った。[30]

Obbink jr. の助手は D. J. Hoens[31] である。Hoens は、ウトレヒト大学の世界的インド学者 J. Gonda の下で、「古代インド宗教用語 "Śānti" の研究」(Śānti. A contribution to ancient Indian religious terminology, I : Śānti in the Saṃhitās, the Brāhmaṇas and the Śrāutasūtras. The Hague 1951) を完成した後、一九六〇年以来、Obbink jr. の宗教史講座の一端を受けもち、インドの宗教、イスラム教の歴史を講じて、一九六八年、Obbink jr. の退官とともに、ウトレヒト大学宗教史正教授に就任した。現在、彼は、「古代インド宗教用語の研究、II」(A contribution to ancient Indian religious terminology, II : Initiation in later Hinduism according to Tantric text)[32] の執筆に専念している。ウトレヒト大学では、最近、アメリカ、ロス・アンゼルス遊学から帰国したばかりの J. D. J. Waardenburg が、Hoens の助手として、宗教史の研究に加わった。Waardenburg は、宗教史研究の方法としての現象学の役割りを研究の課題とし、今日、オランダにおける宗教現象学の綜合と、整理とに従事している。

数派系の諸大学：アムステルダム自由大学 (Vrij-universiteit te Amsterdam) とナイメーゲン、カトリック大学 (Katholiek Universiteit te Nymegen)

十九世紀末、J. Heemskerk 内閣の時、キリスト教各派が、それぞれの主義に則って教育を施こす教派系大学の設置が許可され、アムステルダムに、新教メソジスト主義のアムステルダム自由大学(一八八〇)、少しおくれて、ローマ時代以来の古都、ナイメーゲンに、ローマ正教主義のカトリック大学が創設された。これら教派系の大学では、'principium theologiae' の立場から、独立した一研究分野としての宗教史には、特に、その意義を認めず、宣教学、反証学[33]などを専門とする神学部教授が宗教史の講座をも併せ担当してきたが、宗教史研究の発展に伴い、宗教史を宣教学、反証学などと共に、神学研究の一部門として、同一の立場で研究、教育することが、事実上、困難となったため[34]、アムステルダム自由大学では、J. H. Bavinck の時、

遂に、宗教史を宣教学、反証学から分離し、宗教史を、キリスト教以外の宗教研究に当るものとして、イスラム学者 D.C. Mulder[35] をその教授に任命した。この、アムステルダム自由大学における宗教史と神学側との軋轢――それは、又、オランダにおける宗教史研究の一側面を代表しているものであるが――は、今日、なお、その解決を見ていない。[36]

ナイメーゲンのカトリック大学では、なお、'principium theologiae' の立場が守られ、宗教史は、宣教学、伝道学のための補助学科として研究、教育され、W. H. van de Pol が、一九六八年退官した後をうけて、E. M. Y. M. Cornélis 神父が「キリスト教以外の宗教」を講じている。[37]

ここで、オランダにおける宗教学研究の、心理学、社会学、民俗学など、いわゆる、隣接諸学との関係について、簡単に、述べておこう。この際、〝宗教〟という概念が、これら隣接諸学にとっては、極めて限られた概念であるということ、一方、宗教学において、非宗教的と名づけうる現象が、極めて限られているということに注目する必要があるであろう。すなわち、このことは、宗教史研究者が、どの程度まで隣接諸学を手掛りとするかは、宗教研究者個人の、研究上の関心いかんに依っているということを示している。オランダでは、特に、宗教学の講座が神学部内におかれた関係もあって、これら隣接諸学と宗教学との交流は、事実上、多くの困難を伴っていた。というのは、宗教史研究者は、ほとんどの場合、なかんずく、文献学、文学、歴史学の訓練を受けており、心理学、社会学、人類学などの導入には、神学部内の宗教研究者たちに、さらに、これら諸学についての関心を要求することになったからである。しかし、最近、特に、第二次世界大戦後、イギリス、アメリカにおいて、人類学を含む社会科学的研究法が長足の進歩を遂げ、更にドイツ、フランスの社会学派の影響も著るしくなるに及んで、オランダでも、文化人類学、社会人類学に対する興味が、二三の宗教史研究者の間で増大してきた。以下に、それらの研究者と、その研究の分野をあげるならば、

ライデン大学
F. Sierksma[38] 宗教心理学、原始民族の宗教
H. P. Goddyn[39] 経験社会学史

クロニンゲン大学
Th. P. van Baaren については、すでに述べた。[40]

アムステルダム市立大学
C. J. Bleeker については、前に述べた。[41]

ウトレヒト大学
J. van Baal[42] 宗教民俗学、文明化の民俗学理論

アムステルダム自由大学
J. Blauw キリスト教、ならびに諸宗教の概観、特に、文明化過程上の問題と、文化の宗教的局面の取り扱いを中心に

ナイメーゲン・カトリック大学
J. Mohr 文化人類学、原始民族の宗教

H. M. M. Fortmann 文化と宗教に関する比較心理学

O. Schreuder 宗教社会学

以上の外に、アムステルダムの熱帯博物館 (Tropisch Museum)[43] の Miss J. E. van Lohuizen-de Leeuw、デン、ハークの国立社会科学研究所 (Institute of Social Studies) の C. A. O. van Nieuwenhuize[44] の名前も忘れることができないであろう。

最後に、宗教の類型学 (Typologie) について、一言つけ加えることにしよう。宗教の類型学は、今日、オランダでは、まだ、一個の独立した、宗教研究の部門として確立していない。宗教史研究者たちが、それぞれの便宜に応じて、各個に、類型化を行っているに過ぎない。まず、もっとも一般的な意味で、宗教の類型の問題を取りあげたものとして、W. G. van der Leeuw「宗教現象学」(Phänomenologie der Religion. Tübingen 1932) があげられる。又、一段と基礎的、かつ理論的意味での、宗教の類型については、H. Kraemer の「キリスト教以外の世界におけるキリストの福音」(The Christian message in a non-Christian world. Edinburgh 1938, ³[1956])、及び、「世界文化と世界宗教」(id., world cultures and world religions: The coming dialogue. London & Philadelphia 1960) をあげることができるであろう。ここでは、歴史的宗教と自然的宗教の二大類型が、対立を構成している。さらに、人類学的、あるいは、現象学的意味での、宗教の類型については、K. A. H. Hidding が、「人間と宗教。現象学的に見た生ける諸宗教」(Mens en godsdienst. Levende godsdiensten phaenomenologisch belicht. Delft 1954)、「宗教意識の展開」、及び、「構造宗教学」において、示唆的な、数多くの問題を提出している。

すでに、アムステルダム自由大学における、宗教史をめぐる神学部内の拮抗に見るごとく、オランダの宗教学研究は、過去においても、現在も又、多難な道を歩みつづけている。すでに、Chantepie de la Saussaye の「宗教史教科書」、van der Leeuw の「宗教現象学」をはじめ、過去から現在におよぶ宗教の、純学問的研究におけるオランダの貢献は実に大なるものがあるとは云え、さらに又、今日、いく人かの、勇敢な宗教史研究者たちの、不断の努力にもかかわらず、なお、宗教を、その文化、社会から切り離して、なにか、絶対的なものと考えたり、あるいは、さらに、宗教を、数多くの文化現象の一つにまで帰納、還元させてしまうことなしに、人間生存の場で、与えられた状況の中で、ありのままに宗教を見、かつ研究しようとする立場が、広く、一般に行き亘るには、いまだ、程遠しの憾が深い。オランダの宗教学界に、さらに、多くを期待する所以である。

註

(1) ここに云うオランダは、今日 Nederland を称している部分のことで、北はクロニンゲン州から、南は北ブラバント、リンブルクの諸州までの、いわゆる十一州を

含む地域を指している。

(2) Wet tot regeling van het Hooger Onderwijs. Art. 41 および 42. なお以上の記述については、今来陸郎編 中欧史（世界各国史 Ⅶ）東京・山川出版 [5]昭四一, pp. 247—253; I. H. Gosses en N. Japikse, Handboek tot het Staatkundige Geschiedenis van Nederland. 's Gravenhage [2]1927, pp. 814, 822 ff., 841.

(3) これ以外の、いわゆる教派系大学における宗教学研究については、後の「教派系諸大学：アムステルダム自由大学とナイメーゲン・カトリック大学」の項を見る。

(4) オランダでは、宗教学、宗教史 (Godsdienstgeschiedenis) という言葉の用法が曖昧であり、時には、相互に入れ代ることがある。一般には、宗教学より、宗教史の名をもって呼ばれている。

(5) C. P. Tiele に関しては、P. D. Chantepie de la Saussaye が記念追悼論文を書いている。P. D. Chantepie de la Saussay, Levensbericht van C. P. Tiele. (Jaarboek der Koninglÿke Akademie van Wetenschappen, Amsterdam 1902)

(6) C. P. Tiele, Geschiedenis van den godsdienst tot aan de heerschappÿ der wereldgodsdiensten. A'dam 1876; id., Geschiedenis van den godsdienst in de oudheid tot op Alexander Groote. 2 dln., A'dam 1893/96.

(7) C. P. Tiele, Inleiding tot de godsdienstwetenschap. A'dam 1898.

(8) ここで、「現象学」(fenomenologie) の語は、Max Scheler や、Edmund Husserl の場合のような、高度の、思弁的内容をもつ哲学用語とは、全く関係がなく、自分の宗教以外の、宗教という"現象"を研究する学問と云った程の意味である。ちなみに、アムステルダム自由大学で、東洋の宗教を研究する場合には、「東洋宗教の現象学」(Fenomenologie van de Oosterse godsdiensten) と呼ばれ、ナイメーゲンのカトリック大学では、「プロテスタントの宗教現象学」(Fenomenologie van het Protestantisme) という講義が行われている。

(9) W. B. Kristensen は、数多くの論文、著書があるが、ここでは論文として、

De loofhut en het loofhuttenfeest in den egyptischen cultus. (Mededeelingen der Kon. Ned. Akad. van Wetenschappen. Afd. Letterkunde, 56), A'dam 1923;

De Delphische drievoet. (idem., 60), 1925;

De goddelijke bedrieger. (idem., 66), 1928;

De goddelijke heraut en het woord van god. (idem., 70), 1930;

De Romeinsche fasces. (idem., 74), 1932;

De Ark van Jahwa. (idem., 76), 1933;

De antieke opvatting van dienstbaarheid, enz.

(idem., 78), 1934;

Kringloop en totaliteit. (idem., nieuwe reek 1), A'dam 1938;

Antieke wetenschap. (idem., nr. 3), 1940;

De rijkdom der aarde in mythe en cultus. (idem., nr. 5), 1942;

Het mysterie van Mithra. (idem., nr. 9), 1946;

Verzamelde bijdragen tot kennis der antieke godsdiensten. (idem.), 1947;

Het sacrament van de uitzending, Missa. (idem., nr. 12), 1949;

De slangenstaf en het spraakvermogen van Mozes en Aäron. (idem., 16), 1953;

等著もこゝに出づ。

The meaning of religion. The Hague 1960

をあらはせり。

(10) A. de Buck の主な著述は、

De Egyptische voorstellingen betreffende den oerheuvel. (Proefschrift), Leiden 1922;

The Egyptian Coffin Texts I—VI. (The University of Chicago Oriental Institute Publications), Chicago 1935 ff.;

Egyptische Grammatica. Leiden ²1944;

なほ de Buck につゐては、

P. A. van Proosdij e. a., Als een goed instrument. Leven en werken van Prof. A. de Buck. Leiden 1960

(11) B. Hartman の主敵著書は、

Die nomialen Aufreihungen in Hebräischen. (Proefschrift);

De herkomst van goddelijke ambachtsman in Oegarit en Griekenland. (Rede), Leiden 1964;

Menotheistische stromingen in de Babylonische Godsdienst. (Nederlands Theologisch Tydschrift. XX);

Hebraische Wortforschung. Festschrift zum 80 Geburtstag von W. Baumgartner. Herausgegeben von B. Hartmann u. a. Leiden 1967, (Supplements to Vetus Testamentum, vol. XVI);

*Hebräisches und aramäisches Lexikon zum A. T. 3 Auflage, neu bearbeitet von B. Hartmann unter Mitw. von E. Y. Kutscher, Leiden 1967-;

De opstandingsgedachte in de antieke godsdiensten van het nabij Oosten. (Gereformeerd Theologisch Tijdschrift, 68 Jrg.), Kampen

*印は共著をあらはす。

(12) H. Kraemer の主敵著書は、

Een Javaansche primbon uit de zestiende eeuw, enz. Leiden 1921.

Waarom zending, juist nú; een studie over het goed

recht en de noodzaak der zending, juist in den tegenwoorigen tijd. 's Gravenhage ²1938;

The Chrisitan message in a non-Christian world. Edinburgh 1938, ³1956;

Kerk en humanisme. 's Gravenhage 1956;

Religion and Christion faith. London 1956, Philadelphia 1957, (改訳);

La foi chrétienne et les religions non chrétiennes; traduit de l'anglais par Simone Mathil. Neuchatel 1956, (再訳): Religion und christlicher Glaube. (Theologie der Oekumene, 8), Göttingen 1959;

The communication of the Christian faith. Philadelphia 1959, London 1957;

A theology of the laity. London & Philadelphia 1958;

From missionfield to independent church; report on a decisive decade in the growth of indigenous churches in Indonesia. The Hague & London 1958;

Vormen van godsdienstcrisis. (Mededeelingen der Kon. Ned. Akad. van Wetenschappen. Afd. Letterkunde, nr. 22), A'dam 1959;

De plaats van godsdienstwetenschap en godsdienstfenomenologie in de theologische faculteit. Nijkerk 1959;

Waarom nu juist het Christendom? Nijkerk 1960, (英訳): Why Christianity of all religions? Translated by Hubert Hoskins. Philadelphia 1962;

World cultures and world religions: the coming dialogue. London & Philadelphia 1960;

Een nieuw geluid op het gebied der Koranexegese. (Mededeelingen der Kon. Ned. Aked. van Wetenschappen. Afd. Letterkunde, nr. 25), A'dam 1962

なお H. Kraemer については

A. Th. van Leeuwen, Hendrik Kraemer, dienaar der wereldkerk. A'dam 1959

(13) 本書′ならびに′本文中に言及した著作については′後日′改めて′紹介するつもりにしたい。

(14) K. A. H. Hidding の主論文書は′

Nij Pohatij Sangjan Sri. A dissertation on the origin and significance of the rice-plant as it is told in Sudanese and Javaanese dramas. (Proefschrift), Leiden 1929;

Gebruiken en godsdienst der Soendaneezen. Batavia 1935;

Mystiek en ethiek in Schweitzer's geest. Een anthropologische studie. Haalem 1938;

De spiegel der waarheid. (Rede), Leiden 1948;

Geestesstructuur en cultuur: hoofdlijnen ener fenomenologische anthropologie. 's Gravenhage 1948;

Mens en godsdienst: levende godsdiensten phaenomenologisch belicht. Delft 1954:

God en goden. Wezen, waarheid en ontwikkeling der godsdiensten. Assen 1960;

De evolutie van het godsdenstige bewustzijn. Utrecht 1965;

Structurele godsdienstwetenschap. (Rede), Leiden 1967.

主要編文は′

Tweeërlei geestesstructuur, zonder plaatsaanduiding. 1936;

Ethik und Mystik in anthropologischer Beziehung. (Ehrfurcht vor dem Leben: Ein Freundesgabe zum 80 Geburtstag Albert Schweitzers), Bern 1954;

Godsdienstfenomenologie. (NTT. XI);

Godsdienst engemeenschap. (NTT. XII);

De absoluut heid der godsdiensten en het christendom. (NTT. XIII);

De huidige taak der godsdienstwetenschap. (NTT. XVII);

Zijnsvergetelheid en Godverlatenheid. (NTT. XVIII);

De evolutie in de godsdienstwetenschap, (NTT, XIX);

Het verschijrsel godsdienst. Prolegomena voor de godsdienstfenomenologie. (NTT. XXIII)

(15) 後述の註（38）を見よ°

(16) 宗教学研究と隣接諸学との関係は′後に′一括して概説する°

(17) W. G. van der Leenw の宗教史研究に関する著述は′

（著書）

Godsvoorstellingen in de oud-aegyptische pyramidetexten. (Academisch Proefschrift), Leiden 1916;

Plaats en taak van de godsdienstgeschiedenis in de theologische wetenschap. (Rede), Groningen 1918;

Inleiding tot de godsdienstgeschiedenis. (Volkuniversiteits bibliotheek, 26), Haarlem 1924;

Einführung in die Phänomenologie der Religion. München 1925;

Goden en mensen in Hellas. (Volkuniversiteits biblitotheek, 39), Haarlem 1927;

Achnaton. Een religieuze en aesthetische revolutie in the veertiende eeuw voor Christus. Amsterdam 1927;

La structure de la mentalité primitive. (Cahiers de la Revue d'histoire et de philosophie religieuses, 15) Strasbourg 1928;

In de hemel is eenen dans...Over de religieuze bet-

eeknis van dans en optocht. (De weg der mensheid, 10), A'dam 1930;

Wegen en grenzen. Studie over de verhouding van religie en kunst. A'dam 1932;

Phänomenologie der Religion. Tübingen 1933, ²1958, (英訳) Religion in essence and manifestation. A study in phenomenology. Transl. by J. E. Turner. London 1938, (仏訳) : La religion dans son essence et ses manifestations. Phénomenologie de la religion. Edition francaise refondue et miseau jour par l'auteur avec la collaboration du traducteur Jacques Marty. Paris 1948;

Muziek en religie, in verband met de verhouding van woord en toon. A'dam 1934;

De primitieve mensch en de religie. Anthropologische studie. Groningen 1937;

Virginibus puerisque. A study on the service of children in worship. (Mededeelingen der Kon. Nederlandse Akademie van Wetenschappen. Afdeling Letterkunde, n. r. II, 12), A'dam 1937;

*Het mysterie van ons bestaan. Zes verhandelingen over het probleem van leven en dood. Zeist 1938;

Der Mensch und die Reigion. Anthropologischer Versuch. (Philosophia universalis, 2), Basel 1940;

L'homme primitief et la religion. Ètude anthropologique. Paris 1940;

*De godsdiensten der wereld. 2dln. Onder reductie van W. G. van der Leeuw. A'dam 1940/41;

Gallicinium. De haan in de oudste hymnen der Westersche kerk. (Mededeelingen der Kon. Ned. Akad. van Wetenschappen. n. r. IV, 19), A'dam 1941;

*Der anthropologische Ort des Zweifels. (Festschrift Karl Jaspers), 1941;

Antieke roep- en klaagliederen. 's Graveland 1942;

*In Deo omnia unum. Eine Sammlung van Aufsätzen Friedrich Heiler zum 50 Geburtstage dargebracht. München 1942;

De godsdienst van het oude Aegypt. (Encyclopedie in monografieën. Afd. Godsdienstgechiedenis, 12/13), 's Gravenhage 1944;

De botsing tusschen heidendom en christendom in de eerste vier eeuwen. (Mededeelingen der Kon. Ned. Akad. van Wetenschappen. Afd. Letterkunde, n. r. IX, 5), A'dam 1946;

Wegen en grenzen. (2e herziene en vermeederde druk), A'dam 1948;

*Dans en beschaving. (Exuli Amico Huizinga historico Amico non historici Die VII mensis Decembris Anni MCMXLII.), Haarlem 1948;

Inleiding tot de phaenomenologie van de godsdienst. Haarlem 1948;

Menswording en cultuurverschuiving. Een anthropologisch probleem. (Mededeelingen van de Kon. Vlaamsche Akad. voor Wetetnschappen. Letteren en Schone Kunsten van België, X, 1), Antwerpen 1948;

Egyptische Eschatologie. (Mededeelingen der Kon. Ned. Akad. van Wetenschappen. Afd. Letterkunde, n. r. XII, 11), A'dam 1949;

*Gottesbild und Menschenbild. Zwei Aufsätze von W. G. van der Leeuw und R. Bultmann.

＊田辺共著をあらわす。

(論文)

Eenige opmerkingen over de onderlinge verhouding der begrippen God, macht en ziel. Theologisch Tijdschrift, 52, 1918, 123ff.

The Moon-God Khons and the King's placenta, Journal of Egyptian Archeology V, part I

External Soul, Schutzgeist und der ägyptische ka. Zeitschrift für ägyptische Sprache und Altertumskunde, Bd 54, p. 54

Das neuentdeckte Osirisheiligtum in Abydos und das sog. Natatorium der Villa Adriana. Archiv für Religionswissenschaft, Bd 19, 1919, 544

Process and Drama. The Constructive Quarterely, vol. VIII, 281ff.

Proces en drama. Nieuwe Theologische Studiën, 3e jg. pp. 209.

Uit de godsdienstgeschiedenis. Algemeen en bijzonder. Nieuwe Theologische Studiën 4e jg. pp. 85.

Die do-ut-des-Formel in der Opfertheorie. Archiv für Religionswissenschaft. Bd. XX, pp. 241

De religie van Griekenen Romeinen. Nieuwe Theologische Studiën 4e jg. pp. 250

Uit de godsdienstgeschiedenis. Nieuwe Theologische Studiën, 5, 1922 p. 153ff.

De religieuze beteekenis van het Animisme. Mededeelingen Nederlandsch Zendingsgenootschap, 65, 1921, 300ff.

Uit de godsdienstgeschiedenis. Nieuwe Theologische Studiën, 7, 1924, p. 1ff.

Verwantschap tussen Aegyptische en Orphische voorstellingen in: Verslag van het Vierde Congres van het Oostersch Genootschap in Nederland gehouden te Leiden op 5 en 6 Januari 1925. Leiden 1925.

Ueber einige neuere Ergebnisse der psychologischen Forschung und ihre Anwendung auf die Geschichte, insonderheit die Religionsgeschichte. Studi e Materiali

di Storia delle Religioni, II, 1926, P. 1ff.

Zum Mythos und Gestalt des Osiris. Archiv für Orientforschung, III, 1926, p. 9ff.

Het heidendom in den Indischen archipel. 8ste Programma koloniale Vacantiecursus voor geografen, 1927, pp. 3; (Idem in Tijdschrift van het Koninklijk Ned. Aardrijkskundig Genootschap, 2e serie dl. XLV, p. 873).

Das Heilige und das Schöne. Zeitschrift für Religionspsychologie, 2, 1929, p. 101

Phénoménologie de l'âme. Conférence faite au Ve congrès international d'histoire des religions à Lund. Bulletin de la Société d'histoire du Protestantisme. Janv-mars 1930.

Die Struktur der Vorstellung des sogenannten Höchsten Wesens. Arciv für Religionswissnschaft, Bd. XXIX, 1929, p. 79

Sur le nom et la personalité des dieux dans les religions primitives. Revue d'histoire et de philosophie religieuses. Année 1931, p. 241

Pia fraus. Een phaenomenologische- psychologische studie. Mensch en Maatschappij. 8, 1932

The *Συυβολον* in Firmicus Maternus. Egyptian Religion, I, 1932, pp. 61

Nog eens het oermonotheïsme. Methode en theologie. Studia Catholica, 9, 1933, p. 397

Refrigerium. Paradijsvoorstellingen in heidendom en christendom. Handelingen van het 16e Nederlandse Philologencongres, gehouden te Groningen op 25 en 26 April, 1935, p. 108

La mentalité primitive et la religion. Recueil des communictions présentées au VIe congrès international de l'histoire des religions. Louvain 1935, p. 52

In hoeverre kan men van een homo religiosus spreken en in hoeverre is deze eventueel psychologisch te beschrijven? (Voordracht op den tweeden psychologendag gehouden, 18 Mei, 1935 te Amsterdam). Algemeen Nederloandsch Tijdschrift voor Wijsbegeerte en Psychologie 29, 1935, p. 36

In en om de godsdienstgeschiedenis. Nieuwe Theologische Studiën 19, 1935, p. 43

Mythos, logos en geschiedenis. (Samenvatting van een referaat, te Utrecht gehouden op 7 februari, 1936) Eltheto 90, 1935, p. 251

Phaenomenologie der openbaring. Vox Theologica 8, 1937, p. 125

Eenige opmerkingen betreffende den huidigen stand en ons inzicht aangaande Achnaton. Ex Oriente Lux.

Jaarbericht 5, 1938, p. 301

Das sogenannte Hockerbegräbnis und der ägyptische TJKNW. Studi e Materiali di Storia delle Religioni. vol. XIV, 1938, p. 151

Altägyptischer Pantheismus. Aus der Welt der Religion N. F. 1—3 (Rudolf-Otto-Ehrung) 1940, 16

De twee wegen der theologie. Vox Theologica 13, 1941, p. 17

Adunata. Ex Oriente Lux. Jaarbericht 8, 1941, p. 632

Structuur en object van de godsdienstgeschiedenis met betrekking tot geschiedenis en philologie. Jaarboek Oostersch Instituut Leiden 1941, p. 65

De betekenis van het begrip myths. Het Gemeen ebest 4, 1941, p. 223

Fenomenologieky popis cirkve. Nábzenskà 17, 194 5, p. 345

L'anthropomorphisme comme forme de l'Anthropologie. Le Monde non chrétien, N. S. 2, 1947, p. 170

De religie van de voorhistorische mens. Mens en maatschappij 23, 1948, p. 239

L'homme et la civilsation. Ce que peut comprendre le terme : évolution de l'homme. Eranos-Jahrbuch 19 48, p. 141

Lucien Lévy Brühl en de primitieve mentaliteit. Nedelands Studieblad 11, 1948, p. 148

Bericht over de Godsdienstwetenschap. NTT. 4, 1949, p. 112

Urzeit und Endzeit. Eranos Jahrbuch 1949, p. 329

Guerre et combat chez les primitifs. Le monde non-chrétien 19, 1951, p. 350

Tanz und Religion. 'Du' Schweizerische Monatschrift, 5 Mai, 1950

Unsterblichkeit. Eranos Jahrbuch 1950, p. 183

The task of religion in the modern world. Atti della Juissione della Sodalitas Erasmiana. Napoli 1950, I, p. 80

(18) Th. P. van Baaren の著述は'

Voorstellingen van openbaring phaenomenologisch beschouwd. (Diss. Utrecht), Utrecht 1951;

Geruststellingsriten, een bijdrage tot de critiek op de opvattingen over magie. (Oratie Groningen), Groningen 1952;

De mens in het licht van de godsdienstwetenschap. (Scripta Academica Groningana, VI), Groningen 1955;

Primitieve anthropology, Anthropologie religieuse etc. Leiden 1955;

Het sacrale koningschap bij de primitieven. (NTT.

10), 1956;

Uit de wereld der religie. Arnhem 1956;

De theologische basis van de faenomenologie van G. van der Leeuw. (NTT. 11), 1957;

Wereldschepping en wereldbeeld in het Oude Oosten. (Scripta Academica Groningana, XIII), 1959;

Wij mensen, religie en wereldbeschouwing bij vreemde volken. Utrecht 1960, (独訳) : Menschen wie wir, Religion und Kult der schriftlosen Völker. Gütersloh 1964;

Van maansikkel tot rijzende zon, de grote godsdiensten van Azië. Zeist 1960, (仏訳) : Les religions d'Asie. Verviers (Belgique) 1962, (スペイン訳) : Las religiones de Asia. Barcelona 1967;

Discussie over theologie en godsdienstwetenschap met Prof. H. Kraemer. (NTT. 14/15), 1960;

Doolhof der goden, inleiding tot de vergelijkende godsdienstwetenschap. A'dam 1960;

Ritus als weg tot integratie. (Tijdschrift voor vrijmetselaren, 11), 1960;

Goden van de weg. (De Gids, 124), 1961;

Dans en religie, vormen van religieuze dans in heden en verleden. Zeist 1962, (独訳) : Selbst die Götter tanzen. Gütersloh 1964;

Religieuze symboliek bij schriftloze volken. (Vox Theologica, 32), 1962;

Bezielend beelden, inleiding tot de beeldende kunst der primitieve volken. A'dam 1962;

Kunst van verre landen. (Groninger Museum, tentoonstellingscatalogus), 1962;

Enkele methoden van divinatie in Afrika. (NTT. 17), 1962;

De culturele functie van de mythe. (Wijsgerig Perspectief, 3), 1963;

Oorsprong, functie en verklaring van de mythe, mythe en realiteit, verkenningen. A'dam 1963;

Mensen tussen Nijl en Zon. Zeist 1963;

Theoretical speculations on sacrifice. (NVMEN, XI), 1964;

Scheppingsverhalen, de schepping der wereld volgens het geloof der volken. A'dam 1964;

Religious symbols, their essence and function (Verbum), 1964;

Geschiedenis der godsdiensten, inleiding tot de theologische studie. Groningen 1965;

Pluriform monotheism. (NTT. 20), 1966;

Kunst uit de Nigerbocht. (Groningen Museum, tentoonstellingscat.), 1966;

Cultus en ritus, een godsdiensthistorische beschouwing. (Tijdschrift voor Liturgie, 51), 1967, (外記せ′ Paroisse et Liturgie, 1968 に発載°)

Art and Religion. (New Catholic Encyclopaedia of America), 1967;

Kunst uit het Sepikgebied. (Groningen Museum, tentoonstellingcat.), 1967;

Towards a definition of Gnosticism. Le Origini dello Gnosticismo. Leiden 1967;

Conceptions of life after death. (Tijdschrift voor Filosofie en Theologie, 28), 1967;

Het dier in de primitieve kunst. (Groningen Museum, tentoonstellingcat.), 1967;

Egyptische goden en hun beeldjes. (Antiek, 2), 1967;

Korwars and korwar style, art and ancestor worship in Northwest New Guinea. The Hague/Paris 1968;

(19) Th. P. van Baaren, Menschen wie wir, Religion und Kult der schiftlosen Völker. Gütersloh 1964 他°

(20) J. M. S. Baljon の主な著作せ′

The reforms and religious ideas of Sir Ahmad Khân. Leiden 1949;

Sajjid Ahmad Khân, Seorang Islam-Modern dan Pembaharu Sosial. Djakarta/A'dam 1950;

Twee grondleggers van de moderne Islam, Ahmad Khan en Muhammad Abduh. 's Gravenhage 1950;

'To seek the face of God' in Koran and Ḥadîth. (Acta Orientalia, XXI), 1953;

A Modern Urdu Tafsîr. (The world of Islam, vol. II), 1953;

A Modern Muslim Decalogue. (The world of Islam, vol. III), 1954;

Pakistani views of Ḥadîth. (The world of Islam, vol. V), 1958;

Modern Muslim Koran Interpretation, 1880—1960. Leiden 1961;

Fatimalogie. (Vox Theologica, 32), 1962;

Two lists of prophets. A comparison between Ibn al-Arabî's Fuṣûṣ al-hikam and Shâh Walî Allâh al-Dihlawî's Ta'wil al-Aḥâdîth. (NTT. XXI), 1967;

Moslimse Ambivalentie inzake Muziek. Leiden 1968

(21) H. te Velde の著作せ′

Seth, God of Confusion. A study of his rôle in Egyptian mythology and religion. Leiden 1967;

The Egyptian God Seth as trickster. (Journal of the American Research Center in Egypt, VI), 1968

(22) H. J. W. Drijvers の主な著作せ′

Abrahamtradities in Jodendom, Christendom en

Islam. Een Phaenomenologische schets. (Vox Theologica, 31), 1960/61;

De hymnen van Madinet-Madi en de hellenistische Isisreligie. (Vox Theologica, 32), 1962;

The Book of the Laws of Countries. Dialogue on fate of Bardaisan of Edessas. Semitic texts with translations III. Assen 1965;

Bardaisan of Edessa. (Studia Semitica Neerlandica, VI), Assen 1966;

Quq and the Quqites. An unknown Sect in Edessa in the 2nd century A. D. (NVMEN, XIV), 1967;

Bardaisan, die Bardaisaniten und die Ursprünge des Gnostizismus. The origin of Gnosticism. (Suppl. to NVMEN, XII), 1967;

The origins of Gnosticism a sa religious and historical problem. (NTT. XXII), 1967/68

(23) P. D. Chantepie de la Saussaye はじめとする諸学者達がこの語を用いている。K. H. Roessingh, P. D. Chantepie de la Saussaye. (Verzammelte werken II, 1926); Gedenkboek van de Universiteit van Amsterdam. (Aanhangsel), Amsterdam 1932; E. Hirschmann, Phänomenologie der Religion (Diss. Groningen, 1940)

なお P. D. Chantepie de la Saussaye の主要著書は

Methodologische bijdrage tot het onderzoek naar de oorsprong van de godsdienst. (Proefschrift), Utrecht 1870;

Het belang van de studie der godsdiensten voor de kennis van het Christendom. Groningen 1878;

Vier schetsen uit de godsdienstgeschiedenis. Utrecht 1883;

Lehrbuch der Religionsgeschichte. Tübingen 1887/89

Die vergleichende Religionsforschung und der religiöse Glaube. Freiburg 1898;

Geschiedenis van de godsdienst der Germanen voor hun overgang naar het Christendom. Haarlem 1900;

The religion of the Teutons. Boston 1902;

Levensbericht van C. P. Tiele. (Jaarboek der Kon. Ned. Akad. van Wetenschappen.), A'dam 1902;

Geestelijke stromingen. Haarlem 1907;

(24) A. J. H. W. Brandt の主要な著書は

Die mandäische Religion, ihre Entwicklung und geschichtliche Bedeutung. (Proefschrift), Utrecht 1889;

Das Schicksal der Seele nach dem Tode nach mandäischen und parsischen Vorstellungen. (Jahrbuch für Protestantische Theologie, XVIII), 1892;

Elchasai, ein Religionsstifter und sein Werk. Leip-

zig 1912;

Die Mandäer, ihre Religion und ihre Geschichte. A'dam 1915

(25) H. Th. Obbink については、後述の、カナンヨヘト大学の頃を見よ。なお、彼の主要な著述は、

De heilige oorlog volgens de Koran. Leiden 1901;

De beteeknis van Egypte en Babylonië in de oude religieuze denkwereld. 's Gravenhage 1910;

Over oud-aegyptische voorstellingen aangaande dood en leven. Nijmegen 1913;

Oostersch leven. 2dln. Nijkerk 1914;

Het bijbels Paradijsverhaal en de Babylonische bronnen. Utrecht 1917;

Godsdienstwetenschap. (Een woordenboek), 1920;

Op bÿbelschen bodem; Egypte - Palestina - Syrië. 1924;

Het Oude Testament opnieuw vertaald. 1927;

*Inleiding tot den Bijbel. 1928;

Survivals. 1929;

De godsdienst in zijn verschijiningsvormen. 1933, ²1947

(26) H. Hackmann の主要著書は、

Der Buddhismus, II. - Der südliche Buddhismus und Lamaïsmus. Halle 1905;

Der Buddhismus. Halle 1906;

Von Omi bis Bhamo. Berlin 1907;

Buddhism as a religion. London 1910;

Welt des Ostens. Berlin 1912;

Religionen und heilige Schriften. Berlin 1914;

Chinesische Philosophie. München 1927;

Der Zusammenhang zwischen Schrift und Kultur in China. München 1928;

Chineesche wijsgere. 2dln. A'dam 1930;

Die dreihundert Mönchsgebote des chinesischen Taoïsmus. A'dam 1931;

Erklärendes Wörterbuch zum chinesischen Buddhismus. Chin - Sanskrit - Deutsch. Leiden 1951

(27) G. A. van de Bergh van Eijsinga の主要な著述は、

Indische invloeden op oude christelijke verhalen. Leiden 1901;

Godsdient en werkelijkheid. Haarlem 1922;

De geschiedenis der godsdiensten. A'dam 1935;

Trappen van ontwikkeling in de godsdienst. Utrecht 1938;

Godsdienstwetenschappelijke studieën. 21dln. Haarlem 1947/57

(28) C. J. Bleeker の著書は、

De beteeknis van de egyptische godin Ma-a-t. (Pro-

efschrift), Leiden 1929;

De internationale boodschap van godsdienst en kerk aan de wereld van deze tijd. Assen 1936;

Het Christendom en de godsdiensten der aarde. Assen 1940;

De overwinning op den dood naar oud-egyptisch geloof. 's Gravenhage 1942;

Grondlijnen eener phaenomenologie van de godsdienst. (Encyclopaedie in monografieën), 's Gravenhage 1943;

De godsdienstige betekenis van oog en oor. Assen 1946;

Op zoek naar het geheim van de godsdienst. Inleiding tot de godsdienstwetenschap. A'dam 1952;

*Anthropologische verkenningen. Delft 1953;

*Maskerspel. Bussem 1955;

*De godsdiensten der wereld. (3de bijgewerkte druk van 'De godsdiensten der wereld' van W. G. van der Leeuw, onder reductie van C. J. Bleeker.) 2dln. A'dam 1955/56;

Die Geburt eines Gottes. Eine Studie über den ägyptischen Gott Min und sein Fest. Leiden 1956;

De struktuur van de godsdienst. Hoofdlijnen ener fenomenologie van godsdienst. 's Gravenhage 1956;

Godsdienst voorheen en thans. Beschouwingen over de struktuur van het geloof. 's Gravenhage 1958;

Wat gelooft de mensheid? Wegen en invloeden van de grote godsdiensten. 's Gravenhage 1959;

De Moedergodin in de Oudheid. 's Gravenhage 1960;

The sacred bridge. Researches into the nature and structure of religion. Leiden 1963;

Christ in modern Athens. The confrontation of Christianity with modern culture and the non-Christ religions. Leiden 1965;

*Initiation. Contributions to the theme of the study conference of the International Association for the History of Religion held at Strassburg. Leiden 1965;

*Spelregels. A'dam 1967;

Egyptian Festivals. Enactments of religious renewal. Leiden 1967;

*Anthropologie religieuse: L'homme et sa destinée à la lumière de l'histoire des religions. Étude publ. sous la dir. de C. J. Bleeker.

＊印は共著または編著

(29) H. W. Obbink の主要著書は，すべて，本文中であげたもの，更に註 (30) であげるものの他に，

Het oude testament in het licht der nieuwe onderzoeking. 1927;

Ur der Chaldeeën, de stad van Abraham. 1931;

Commentaar op het boek Daniël. 1932;

Theologische bezinning op het oude testament. 1938;

Het heilige boek als godsdiensthistorisch verschijnsel. 1940;

Enige kanttekeningen bij het probleem van de religieuze tolerantie. 1957

(30) H. W. Obbink, Oude geschiedenis van het nabij Oosten. 1939, ³1951;

Cybele, Isis, Mithras. Oosterse godsdiensten in het romeinse rijk. 1965

(31) D. J. Hoens の著述は，本文中にあげたものの外，

Sarvodaya. Een modern voorbeeld van het absorptievermogen van het Hindoeïsme. 1961

(32) D. J. Hoens, Initiation. (Suppl. to NVMEN X), Leiden 1965

(33) elenktiek ＜ἐλέγχω. いわゆる，補助課目としての宗教史に代って神学部内にもうけられた課目で，キリスト教が他の宗教と接触，対決するに至った場合，予め，他の宗教を知悉しておくことが必要である処から，その種の知識を整理し，供給して，事ある時に，それと対決して誤りであることを論証し，キリスト教の正当なることを主張しようとする学問である。

(34) J. H. Bavinck の宗教史研究の分野での主要著述は，

Christus en de mystiek van het oosten. 1934;

Christusprediking in de volkerenwereld. 1939;

Zending in een wereld in nood. 1941;

De psychologie van de oosterling. 1942;

The impact of Christianity on the non-Christian world. 1948;

Religieus besef en christelijk geloof. 1949;

In de ban der demonen. 1950;

Uitkomsten der studie van buitenbijbelse religies. (Cultuurgeschiedenis van het Christendom), 1951;

Inleiding in de zendingswetenschap. 1954;

Religies en wereldbeschouwingen van onze tijd. 1958;

Absoluutheid van het christendom. (?)

(35) D. C. Mulder の著述は，

Openbaring en rede in de islamietische filosofie van Al-Fârâbî tot Ibn Ruśd. 1949;

(Artikelen over islamietische filosofie in Christelijke Encyclopaedie, Kampen 1956/58);

The nature of Islam to-day, as it relates to evangelism. (in Report of the Study Conference at Asmare, 1959);

De perediking van het evangelie in de wereld van de islam. (Heerbaan, 1959), 1959;

The possibility of Dogmatics. (SEA. Journal of Theology, Oct.), 1962;

De islam. (Theoletherleergang der NCRV.), 1965;

Minoriteit zonder complex. (idem.), 1965;

Theologie en godsdienstwetenschap. 1965;

Primaat van het westerse christendom. (Heerbaan, 1965), 1965;

De islam in Indonesie. (theoetherleergang der NC-RV.), 1966;

Indrukken van de Brummannaconferentie. (Heer-baan, 1966), 1966;

De eerste crsis in het leven van Al-Gazâlî. (Philo-sophie Reformate, 1967), 1967;

Medemenselijkheid in de niet-christelijke religies. (Diakonaat, 1967), 1967;

Islam - nummer de Heerbaan. 1968

(36) J. Blauw, Godsdienstwetnschap en theologie. C. D. Mulder, Theologie en godsdienstwetenschap. 1965

(37) ナイメーゲン大学からは，その後の報告が届かなかったので，ここに，E. M. Y. M. Cornélis 神父の著作目録を紹介できず，遺憾である。

(38) F. Sierksma の主な著述は，

Phaenomenolofie der religie en complex psychologie. Een methodologische bijdrage. 1950;

De religieuze projectie. Een anthropologische studie over de projectie-verschijnsen in de godsdiensten. 1956;

De mens en zijn goden. 1959;

Een nieuwe hemel en een nieuwe aarde. Messianis-tische en eschatologische bewegingen en uoorstellin-gen bij primitieve volken. 1961;

De roof van het vrouwengeheim. De mythe van de dictatuur der vrouwen en het ontstaan der geheim mannengenootschappen. 1962;

Profiel van een incarnatie. Het leven en de conflic-ten van een Tibetaanse geestelijke in Tibet en Europa. 1964;

Tibet's terrifying deities. Sex and aggression in religious acculturation. 1966.

(39) H. P. Goddijn の著述

Sociologie van Kerk en godsdienst. 1966

(40) 前註（18）を見よ。

(41) 前註（28）を見よ。

(42) J. van Baal の著述，

Godsdienst en samenleving in Nederlandsch-Zuid-Nieuw-Guinea. 1934;

Over wegen en drijfveren der religie. Een godsdien-stpsychologische studie. 1947;

De magie als godsdienstig verschijnsel. (Rede), 1960;

Mensen in verandering. Ontstaan en groei van een nieuwe cultuur in ontwikkelingslanden. 1967.

(43) J. E. van Lohuizen-de Leeuw, The 'Scythian' Period. An approach to the history, art, epigraphy and palaeography of North India from the 1st century B. C. to the 3rd century A. D. (Diss. Utrecht, 1949), (Orientalia Rheno-trajectina, ediderunt J. Gonda et H. W. Obbink, II), Leiden 1950. 彼女は、現在、ウトレヒト大学の J. Gonda 教授とともに、Handbuch der Orientalistik の編集に参画し、その第六部「美術、考古学」の刊行に力を注いでいる。

(44) C. A. O. van Nieuwenhuize, Aspects of Islam in post-colonial Indonesia. 1958.

（あとがき）　本稿の執筆に当って、K. A. H. Hidding, Th. P. van Baaren, C. J. Bleeker, H. W. Obbink, J. D. J. Waardenburg, D. C. Mulder の各教授、ならびに、東京、オランダ大使館の Dr. M. J. Meijer, さらに、Baron G. W. de Vos van Steenwijk の多大な協力をうけた。ここに、深く感謝の意を表したい。なお、本文中の、重要な宗教史研究者については、その全著作目録を作成、公開することを目標としたが、今回は、資料不足から、その目的を達せなかった。大方の寛恕を乞う次第である。

執筆者紹介

中村　幸子　ハーバード大学助手
中村広治郎　ハーバード大学大学院
福井　文雄　早稲田大学助教授
前田　恵学　名城大学教授
鎧　淳　立正女子大学講師